

第5章 遺物

概要 今回の調査において、先土器時代～江戸時代の多種多様の遺物が出土した。その数量は、コンテナ約1,500杯を優に越えるものである。時代別にすると、弥生時代中期～後期の遺物が大半を占め、遺構の検出状況と対応する。時代毎に簡単に遺物の概要を述べてみたい。

先土器時代は、剝片1点が出土しているのみである。縄文時代は後～晩期と思われる土器片が数点出土している。弥生時代は、土器が第Ⅰ様式の中段階から第Ⅴ様式後半まで揃っており、特に第Ⅲ様式と第Ⅴ様式は器種が揃い多量に出土している。土器以外では、石器・木器も多種類に渡り、製品も未製品も出土し、金属器・玉類・骨角器はバラエティーをもっている。古墳時代の遺物は、須恵器・埴輪・土師器が少量出土した。須恵器は中村編年⁽¹⁾のⅠ期～Ⅱ期のものであり、埴輪は川西編年⁽²⁾のⅢ期及びⅤ期のものである。土師器はほぼ須恵器と併行するぐらいのものである。土器以外では、滑石製白玉6点が出土した。以降の遺物は、奈良、平安時代それぞれの土師器、鎌倉時代の瓦器、室町時代の土師器、江戸時代の染付等が極少量出土している。

以下、遺物の紹介を時代順に行っていきたい。弥生時代の土器に関しては、多量のため、時期が限定出来て一括と考えられるような土器の出土状況を検出した遺構の中から抽出し、時期順で遺構毎に紹介することにした。さらに一遺構出土の土器から、各器種の代表的なものを優先した。弥生時代の石器・木器に関しては、遺構出土の中から代表的なものを抽出した。

なお、弥生式土器の分類の基準及び名称・用語については、原則として『弥生式土器集成・本編』（小林・杉原編1968）、『池上遺跡・土器編』（井藤他1978）を用い、中期に関しては『瓜生堂Ⅲ』（瓜生堂遺跡調査会1981）、後期に関しては『六条山遺跡』（寺沢他1979）を参照させて頂いた。

第1節 弥生時代の遺物

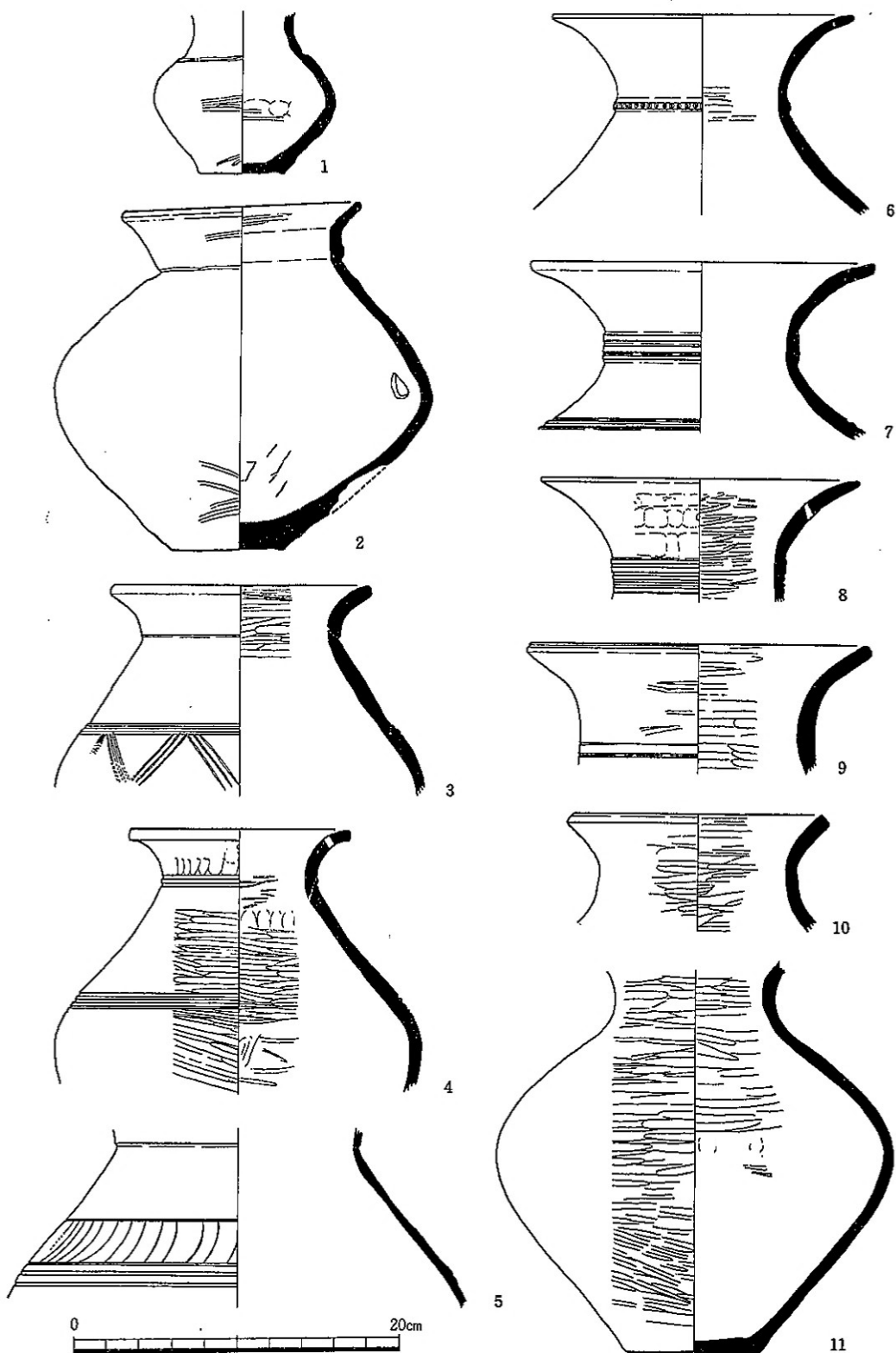
第1項 土器（第113～142図）

前期 この時期の土器は、Cトレンチで出土した。S D3079、S K3156から中～新段階のもの、S X3008、S K3157、S X3011・3012から新段階、S D3087から新段階でも新しいものが出土している。器種は壺・鉢・甕形土器がある。なお、甕・鉢形土器については完形品でないものはどちらか判定しがたいものがある。

S D3079 中段階のもの（1～8・14・15）、新段階のもの（9～13）がある。

壺形土器（1～11） 段をもつもの（1～3・5）、削り出し凸帯をもつもの（6～8）、篋描沈線文を施すもの（4・9）、無文のもの（10・11）がある。

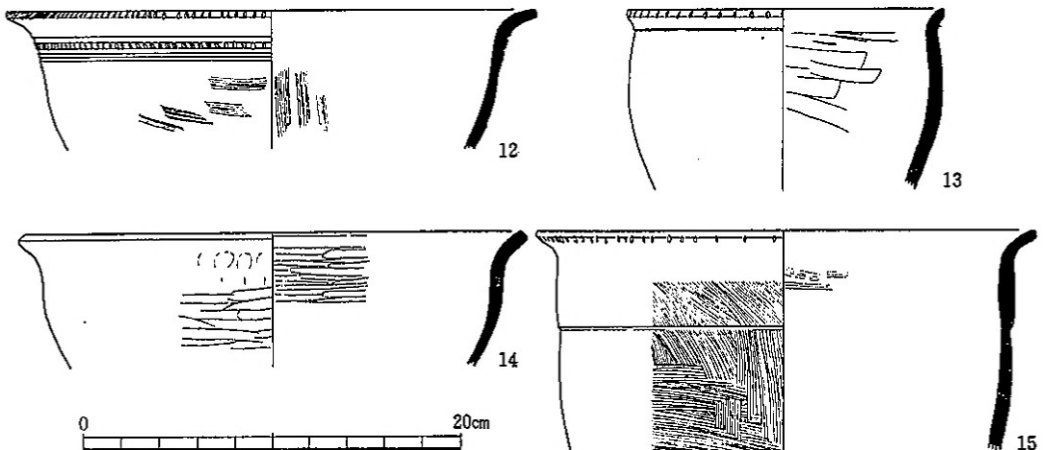
（1）、底径は5.34cm、最大腹径11.3cmを測る小形のものである。頸洞間の段の直下に篋描沈線文を1条めぐらす。外面はヨコヘラミガキ、内面は指押えの後ナデている。胴上半部一部に煤が付着している。他にもう1点小形の壺が出土しているが、今回は紹介出来なかった。（2）は



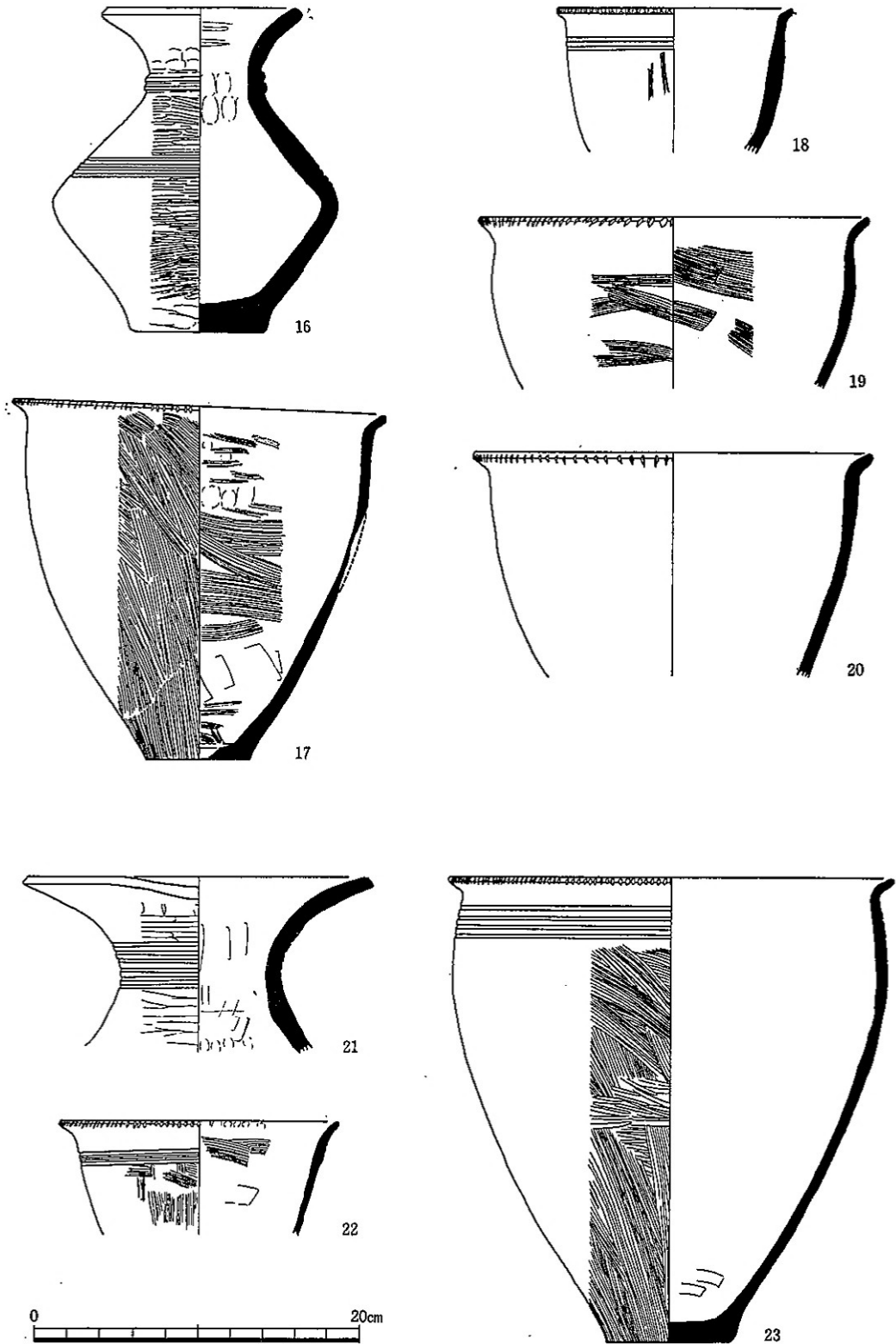
第113图 S D 3079出土土器实测图 ¼

口径14.2cm、器高21.4cmを測る。口頸間に段をもつ。外面はヨコヘラミガキ、内面は口縁部ヨコヘラミガキ、頸部、胴上半部ナデ、下半部ヘラナデ調整である。最大腹径部に焼成後、表から穿孔している。胴部全体の $\frac{1}{2}$ に煤が付着している。(3)は復元口径15.4cmを測る。口頸間と頸胴間に段をもつ。後者の段の直下に篋描沈線文2条、その下に3条の篋描平行斜線文を施す。外面はヨコヘラミガキ、内面は口頸部ヨコヘラミガキ、胴部は器壁の荒れで調整不明。(4)は復元口径13.2cmを測る。口頸間と頸胴間に2条と3条(部分的に4条)の篋描沈線文を施す。口縁部に1ヶ所穿孔する。外面はヨコヘラミガキ、内面は口縁部ヨコナデ(部分的に削りのような痕跡を残す)、胴部・肩部は最大腹径部に指押えが残る他はヨコヘラミガキ調整。(5)は復元頸部径14.7cmを測る。口頸部間に段をもち、頸胴間に篋描沈線文1条を施す削り出し凸帯をもつ。後者の上下に篋描沈線文を1条ずつ施し、凸帯の上方に篋描列弧文を描く。今回紹介する前期土器の中の唯一生駒西麓の胎土である。(6)は復元口径18.1cmを測る。口頸間に竹管文を施した削り出し凸帯をもつ。外面は器壁の荒れ著しく調整不明、内面は口頸部ヨコヘラミガキ、胴部ナデ及び指押え調整。(7)は復元口径20.7cmを測る。口頸間に削り出し凸帯をもち凸帯上に篋描沈線文4条を施す。口縁部に1ヶ所穿孔を施す。外面ヘラミガキでハケメ痕が若干残る。内面は荒いヨコヘラミガキ調整。(9)は復元口径20.6cmを測る。口縁端部に篋描沈線文を施し、口頸間に篋描沈線文が2条現存する。内外面ヨコヘラミガキ調整。(10)は復元口径15.1cmを測る。内外面ヨコヘラミガキ調整。(11)は底径8.1cm、復元最大腹径24.3cmを測る。外面ヨコヘラミガキ、内面は上半部ヨコヘラミガキ、下半部は器壁の荒れで調整不明。

鉢形土器(12・13) (12)は復元口径27.8cmを測る。口縁端部に刻目、頸部に篋描沈線文3条を施し、2条間で刻目を施す。外面はヨコハケ、内面はタテハケ調整。(13)復元口径16.6cmを測る。頸部に段をもち、口縁端部に篋で刻目を施す。外面は器壁の荒れが著しく調整不明、内面はヨコナデ状のハケ調整。胴部は丸みを帯びるが段を持つことで中段階とした。(14)は復元口径25.0cmを測る。外面は、頸部指押え、胴部ヨコヘラミガキ、内面上半部ヨコヘラミガキ調整。



第114図 S D 3079出土土器実測図(14)

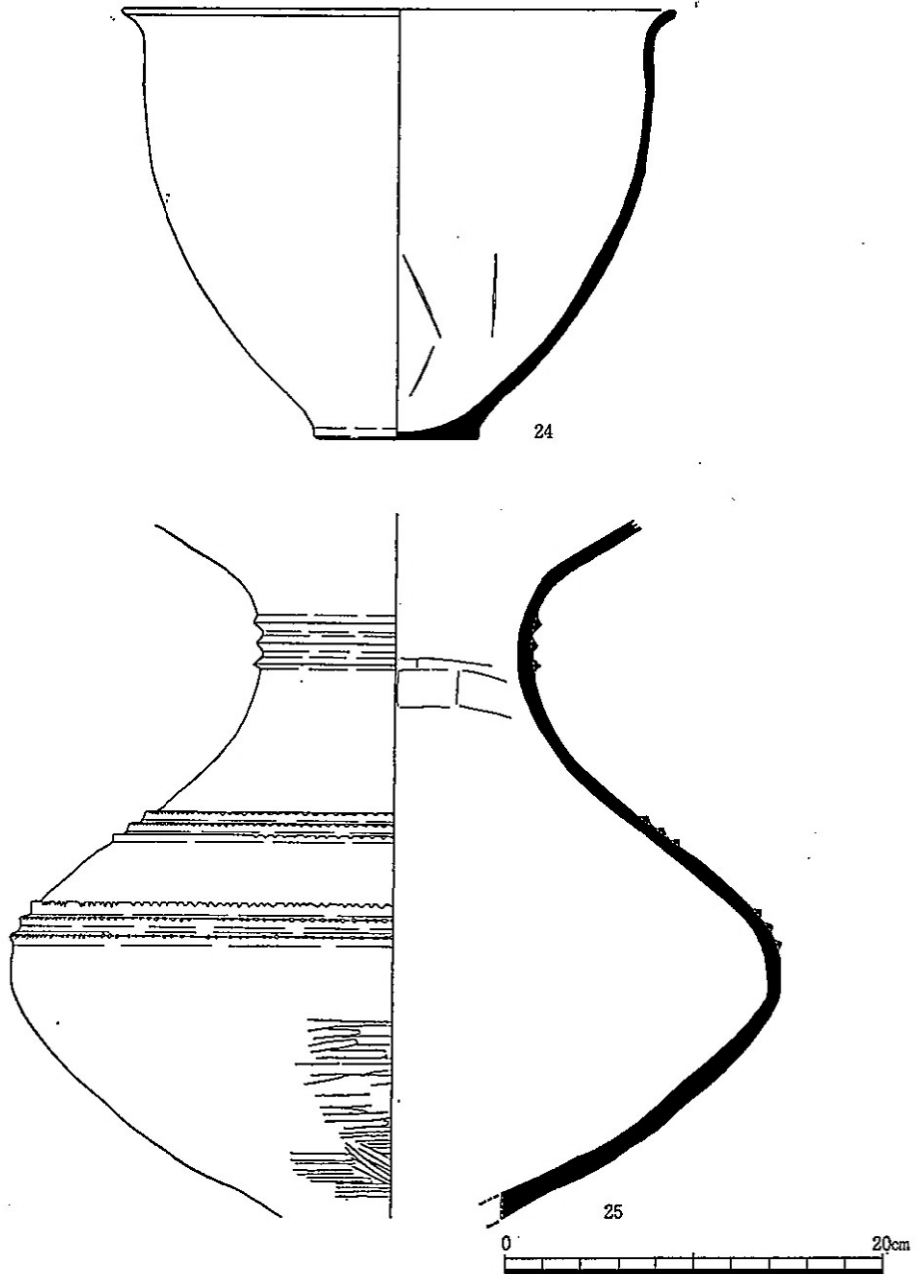


第115图 S K 3156 · S X 3008 · S K 3157出土土器实测图 (1/4)

(15) は復元口径25.7cmを測る。頸部に段をもち口縁端部に刻目を施す。外面は段上方ナナメハケ、下半ヨコハケ、タテハケ、内面は頸部ヨコハケの後ヨコナデ、胴部指押え調整。

S K3156 中段段のもの(16~18)、新段階のもの(19)がある。

壺形土器(16)は口径11.5cm、器高19.9cmを測る。口頸間に削り出し凸帯をもち、凸帯上に篋描沈線1条を施す。頸胴間に4条の篋描沈線文を施す。外面はヨコヘラミガキ、内面は口縁部ヨコヘラミガキ、頸部指押え調整。器壁が厚い。



第116図 S X 3011・S X 3012出土土器実測図(1/4)

甕形土器 (17・18・20) いずれも倒鐘形で口縁部に篋で刻目を施す。

(17) は口径 22.7 cm、器高 21.6 cm を測る。焼成後、外から底部を穿孔する。外面はタテ及びナメハケ、内面は口頸部指押えの上荒いヨコハケ、胴部ナデ状のヨコハケ調整。(18) は口径 14.3 cm を測る。頸部に 2 条の篋描沈線文を施す。内外面は器壁の荒れ著しく調整不明。一部外面にタテハケが見える。(20) は口径 24.2 cm を測る。内外面は器壁の荒れ著しく調整不明。

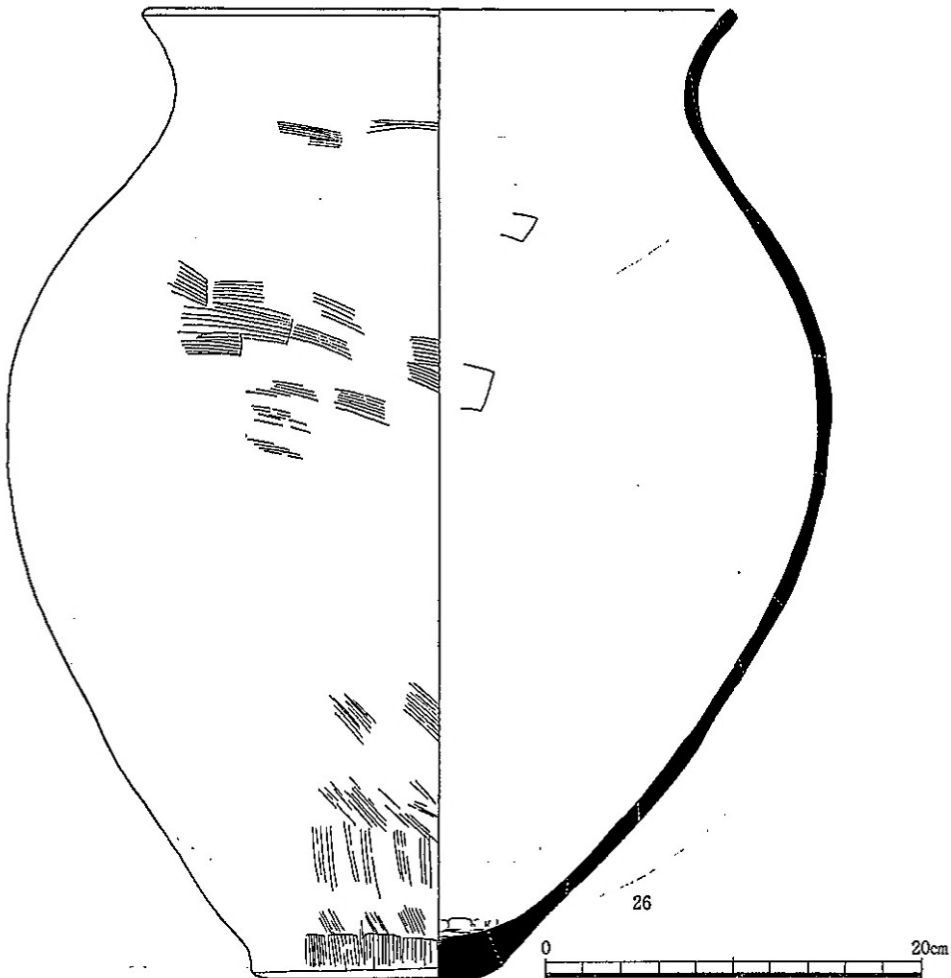
鉢形土器 (19) は復元口径 23.7 cm を測る。内外面ナデ状のヨコハケ調整。

S X 3008 新段階である。

壺形土器 (21) は口径 21.6 cm を測る。口縁部の一部分のみ片口状にたれ下がる。口頸間に 6 条の篋描沈線文を施す。外面はヨコヘラミガキ、内面はナデ状のヨコハケ調整。

S K 3157 新段階である。

甕形土器 (22・23) (22) は口径 16.9 cm を測る。口縁端部に刻目、頸部に篋描沈線文 3 条を施す。外面はナデ状のヨコ及タテハケ、内面はナデ状のヨコハケ調整。(23) は復元口径 27.1 cm、



第117図 S X 3012出土土器実測図 (1/4)

器高28.6cmを測る。口縁端部に刻目、頸部に4条の篋描沈線文を施す。外面はヨコヘラミガキの上をタテハケ、内面は口縁部にヨコハケ、底部にナデ状のヨコハケが一部残る他は調整不明。外面の胴中央部に煤が付着する。

S X 3011 新段階である。

鉢形土器(24)は復元口径28.7cm、器高22.7cmを測る。内外面は調整不明だが内面下半部にナデ状のヨコハケと思われる痕跡がある。

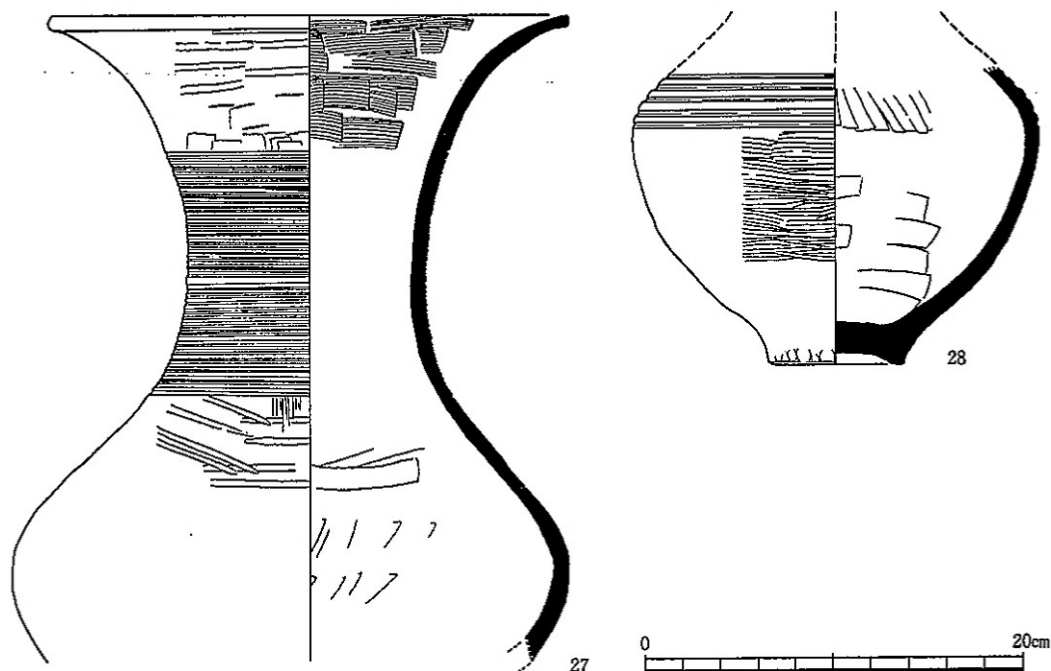
S X 3012 新段階である。

壺形土器(25)は頸部径14.8cm、胴部最大径40.7cmを測る。口頸間に3条の貼り付け凸帯、頸胴間、胴部に刻目を施した3条の貼り付け凸帯をもつ。外面はヨコヘラミガキ、内面は頸部ハケ状のナデ、胴部は器壁の荒れのため調整不明。

甕形土器(26)は復元口径35.0cm、器高51.2cmを測る大形のものである。外面は胴上半部ヨコハケ、胴下半部ナナメハケ及びタテハケ、内面は一部分ヨコ方向のナデが見られるが調整不明。

S D 3087 新段階でも新しく、極少量の櫛描文が混じる。

壺形土器(27・28) (27)は口径27.2cmを測る。頸部に5条の太い篋描沈線文を施し、その沈線文間に10~13条の細い篋描沈線文を施す。外面は口縁部ヨコヘラミガキ、頸部ナデ状のタテハケ、胴部ヨコヘラミガキ、内面は口縁部荒いヨコハケ、頸部から胴部にかけて指押え及びナデ、胴下半部ナデ状のヨコハケ調整。(28)は復元底径7.3cm、復元最大腹径21.5cmを測る。胴部に篋描沈線文5条が現存する。外面はヨコヘラミガキ、下半部ナデ、内面は上半部ナデ状のナナメハケ、下半部ナデ及びナデ状のヨコハケ調整。



第118図 S D 3087出土土器実測図(1/4)

中期 第Ⅱ様式の土器の代表としてS D3077、第Ⅲ様式古段階の代表としてS K3143、第Ⅲ様式はS D3074、S D3012、第Ⅲ様式新段階の代表としてS K3060、第Ⅳ様式の代表としてS K3040を取り上げた。

S D3077 コンテナ約10杯の土器が出土した。第84図の遺物出土状況に見る土器の中から抽出した。器種は、壺・無頸壺・甕・蓋形土器等がある。甕形土器に関しては、今回紹介出来なかった形態の異なるもの（例えば、大形甕など）もある。紀伊系と思われるものも数片存在する。

壺形土器（29～31） 太く長い頸部に短く外反する口縁部、丸みをおびた体部をもつ壺A（30・31）と短い頸部に短く外反する口縁部と球状の体部をもつ小形の壺B（29）等が出土した。

（29）は最大腹径13.4cm、現高18.0cmを測る。頸部から胴部にかけて4～5条の直線文を4帯施し、口縁部内面に雑な扇形文を施す。外面は荒いハケ、内面は胴上半部指押え、下半部ナデ調整。外面 $\frac{1}{2}$ と内面下半部に煤が付着する。（30）は口径20cmを測る。頸部に9条の直線文を6帯施す。外面は口縁部にヘラ痕が残り、頸部細かいハケ、内面は指押えの後細かいハケ調整。（31）は復元口径21.9cm、現高38.9cmを測る。頸部から胴部にかけて7条の直線文を6帯施す。内外面はヨコヘラミガキ調整。（30・31）は生駒西麓の胎土。

鉢形土器（32）は口径22.3cm、器高18.6cmを測る。口縁端部に刻目を施す。内外面とも調整不明だが、一部外面にタテヘラミガキ、内面にハケメが残る。

蓋形土器（33）は復元口径21.1cm、現高11.2cmを測る甕用である。外面指押え、内面ハケ調整、内面一部に煤付着。

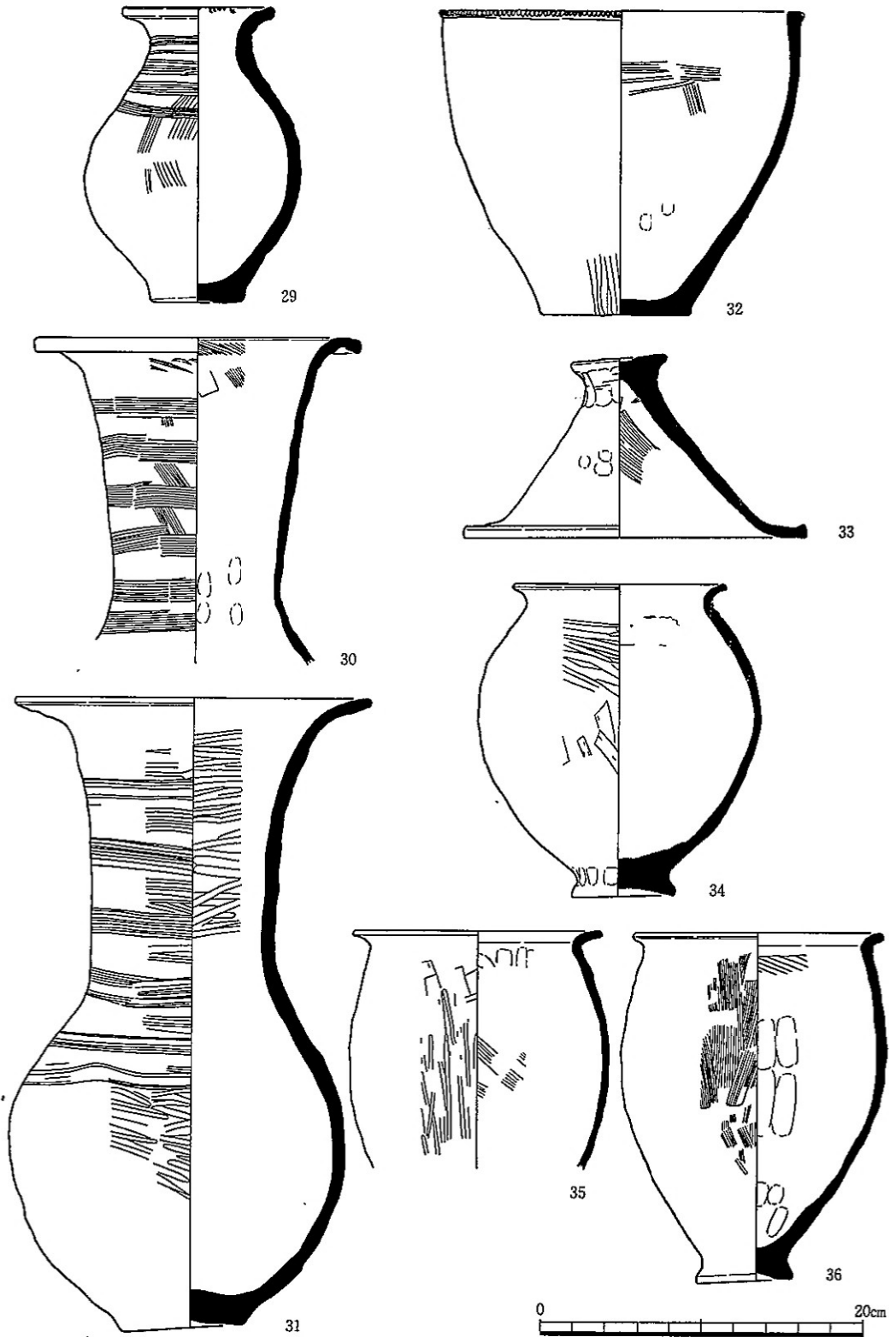
甕形土器（34～36） “く”の字に口縁部が外反するもの（35・36）と丸く胴が張り口縁部が丸く外反するもの（34）等がある。前者が多く、調整方法は「和泉・河内型⁽³⁾」といわれる甕と違って、外面はヘラ削りの後ヘラミガキ、ヘラ削りの後ハケ、ハケのみ、ヘラ削りのみ等である。内面はナデ、ハケ調整が多い。

（34）は口径12.8cm、器高は19.2cmを測る。外面は上半部ヘラミガキ、下半部ヘラ削りの後ナデ、内面はハケ状ナデ調整。外面に一部煤が付着する。（35）は口径15.3cmを測る。外面はヘラ削りの後タテヘラミガキ、内面は上半部指押え及びナデ、下半部ナナメハケ調整。（36）は復元口径15.2cm、現高21.2cmを測る。外面雑なハケ、内面指押え及びナデ調整。外面に煤が付着する。

S K3144 第Ⅲ様式古段階の土器が、完形に近い形で片まって出土した。その中から抽出したが、壺形土器が多いため器種が片寄った感じになった。他の器種は細頸壺・高杯・鉢・甕形土器等がある。なお、焼成後穿孔した土器が多い。

壺形土器（39～47・53） 壺A（39・40・53）、壺B（41・42）、丈高の器体に太い頸部をもち、ななめに開く口縁部をもつ壺C（45・46）、丈高の器体に短く直立する頸部から水平近く外反する口縁部をもつ壺D（43・44・47）に分かれる。（39・42・53）が生駒西麓の胎土である。

（39）は口径23.6cm、器高49cmを測る。口縁端部に8条の波状文と刻目を施し、頸部から胴上半部にかけて8条の雑な直線文を15帯施し、肩部に列点文のような8条の籐状文を1帯施す。底



第119図 S D 3077出土土器実測図 (1/4)

部近くに焼成後、表から穿孔する。外面は頸部ハケ、胴部ヨコヘラミガキ、内面は頸上半部ハケ、下半部ハケ状ナデ、胴上半部指押え及びナデ、下半部タテハケ調整。(40)は口径25.5cm、器高47.3cmを測る。口縁端部に9条の波状文、頸部から胴上半部にかけて9条の直線文を18帯施す。底部近くに焼成後、表から穿孔を施す。外面は頸部から胴上半部にかけてハケ状ナデ、胴下半部ヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ、内面は頸部指押えで一部ハケ又はナデ、胴上半部指押え後ハケ、下半部荒いハケ調整。(53)は口径29.8cmを測る。拡張した口縁部外面に12条の扇形文を4列めぐらし、頸部に11条の直線文を現存4帯施す。外面はハケ、ハケ状ナデ、内面はヨコハケ、タテハケで一部ヘラミガキ調整。

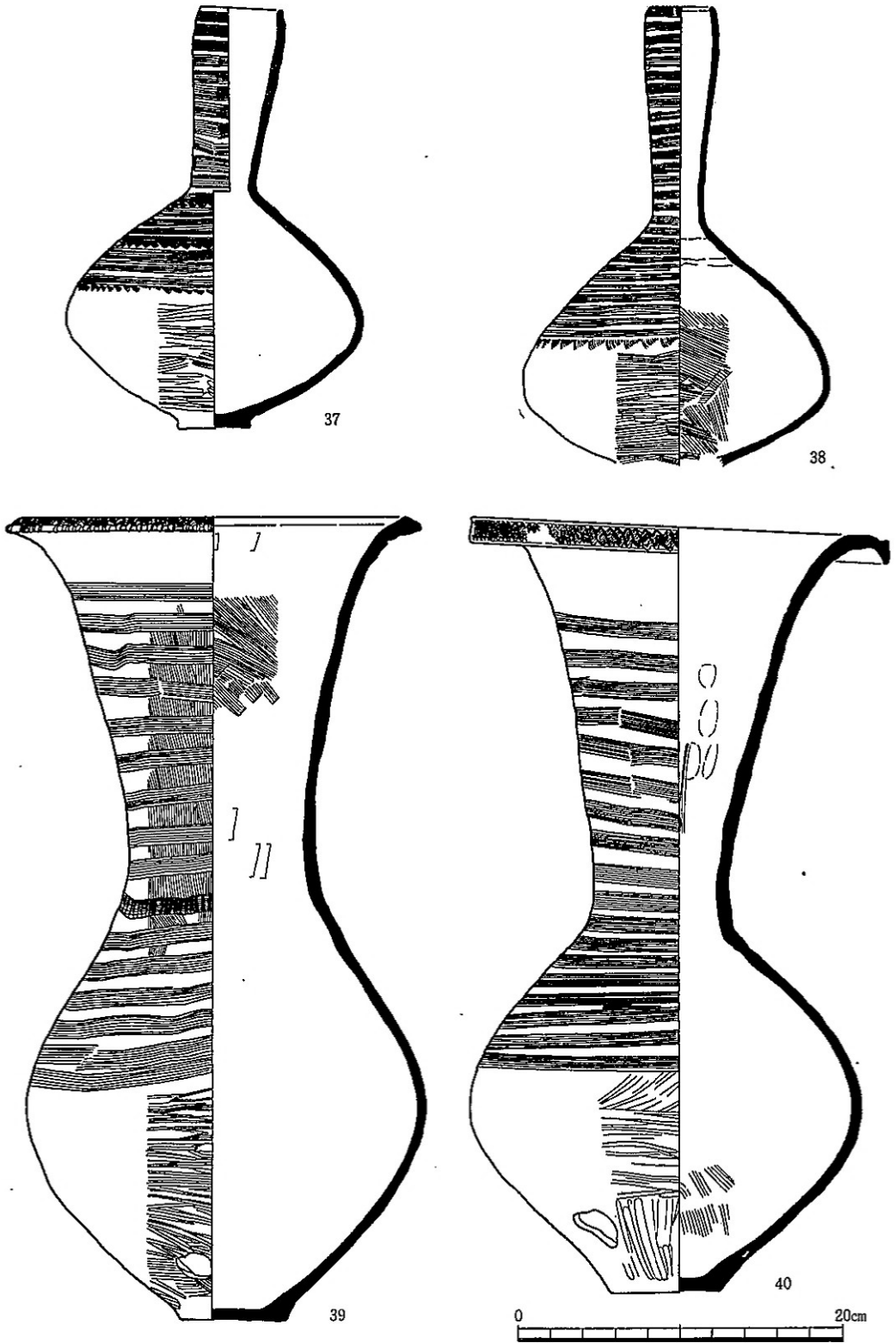
(41)は口径6.6cm、器高18.1cmを測る。口縁端部に6条の籐状文、頸部から胴上半部に9条の直線文を7帯と肩部に10条の雑な籐状文を1帯施す。底部近くに焼成後、表から穿孔を施す。外面は直線文間に1条のヘラミガキ、胴下半部ヨコヘラミガキ、内面は上半部ナデ、下半部ハケ調整。(42)は底径5.4cm、最大腹径19.5cmを測る。頸部に10・11条の籐状文を現存2帯、胴上半部に10・11条の直線文を5帯施す。底部近くに焼成後、表から穿孔を施す。外面は上半部ナデ、下半部ヘラ削りの後ヨコヘラミガキ、内面は上半部指押え及びナデ、下半部ハケ調整。

(45)は口径19.7cm、器高38.5cmを測る。口縁下端部に刻目を施す。胴上半部に9条の直線文を6帯、その上方に9条の籐状文1帯、下方に9条の波状文を1帯施す。底部近くに焼成後、穿孔を施す。外面は胴上半部ハケ、胴下半部ヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ調整。施文後、指がすべったのかナデして文様が消えているところがある。内面は口頸部ヨコナデ、胴部指押え及びナデ調整。外面胴下半部に煤が付着する。(46)は復元口径21.7cm、器高39.2cmを測る。無文である。底部に焼成後、穿孔を施す。外面は口頸部から肩部にかけてハケ状ナデ、胴部ハケの後ヨコヘラミガキ、底部近くはタテヘラミガキ調整。内面は口頸部から肩部にかけてナデ、胴部ハケ調整。胴部外面に一部煤が付着する。

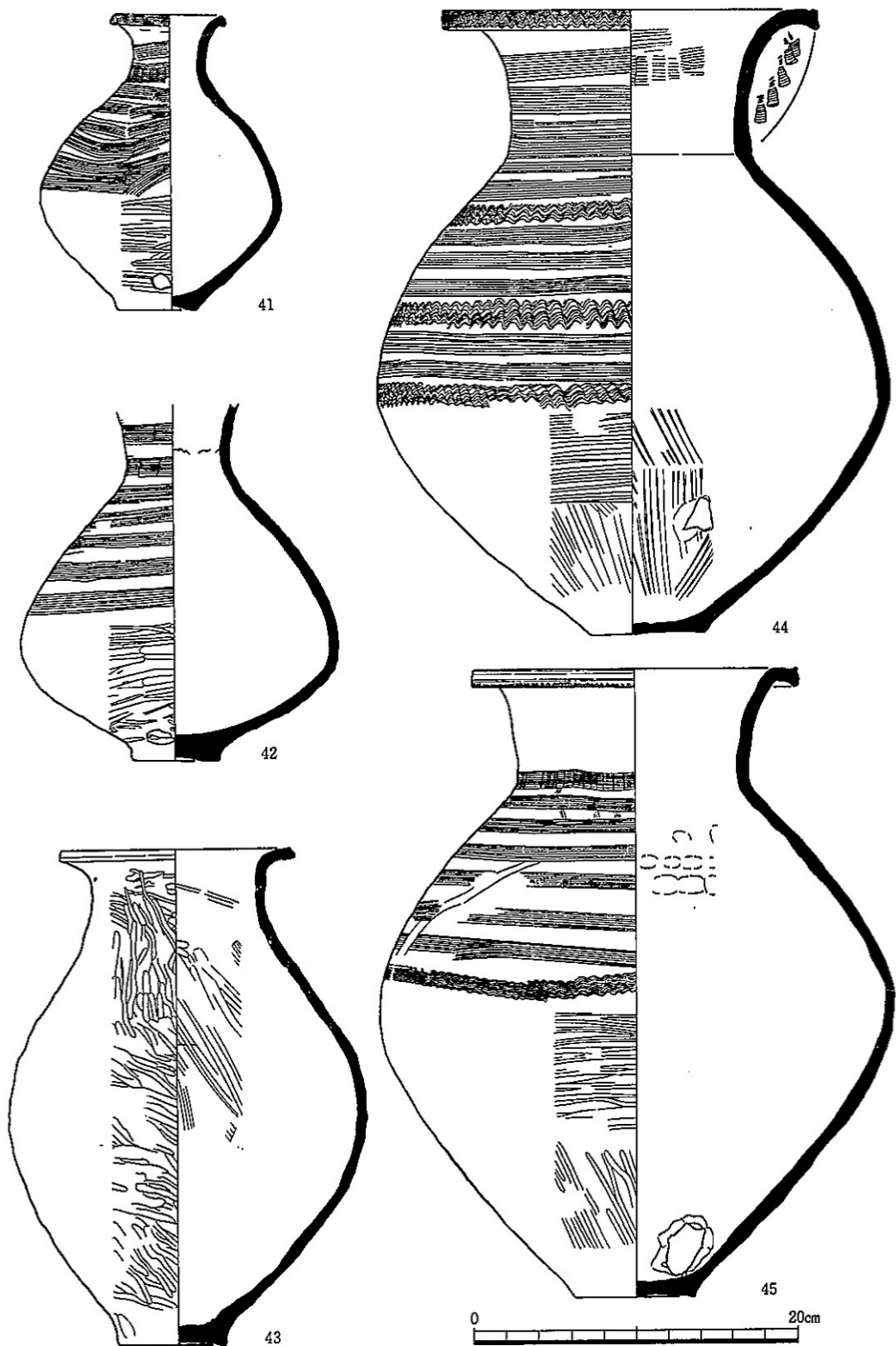
(44)は復元口径23cm、器高39.3cmを測る。口縁部に6～7条の波状文、頸部から肩部にかけて9条の直線文を5帯、胴部に8条の波状文を3帯施し、その間に7条の直線文を3帯と2帯施す。口縁部内面に10条の扇形文を施す。外面は胴下半部ヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ、内面は口頸部荒いヨコハケ、ナデ、胴上半部指押え及びナデ、下半部荒いタテハケ調整。(47)は口径20.3cm、器高35.7cmを測る。外面は頸部から胴上半部タテ及びナメハケ、下半部タテヘラミガキ、内面は口頸部ハケ状ナデ、胴上半部指押え及びナデ、下半部タテハケ調整。(43)は口径14cm、現高30.3cmを測る。外面はアトランダムな太いヘラミガキ、内面はハケ及びナデ調整。外面胴下半部一部に煤が付着する。

細頸壺形土器(37・38)両者とも繊細なつくりの着飾った土器である。

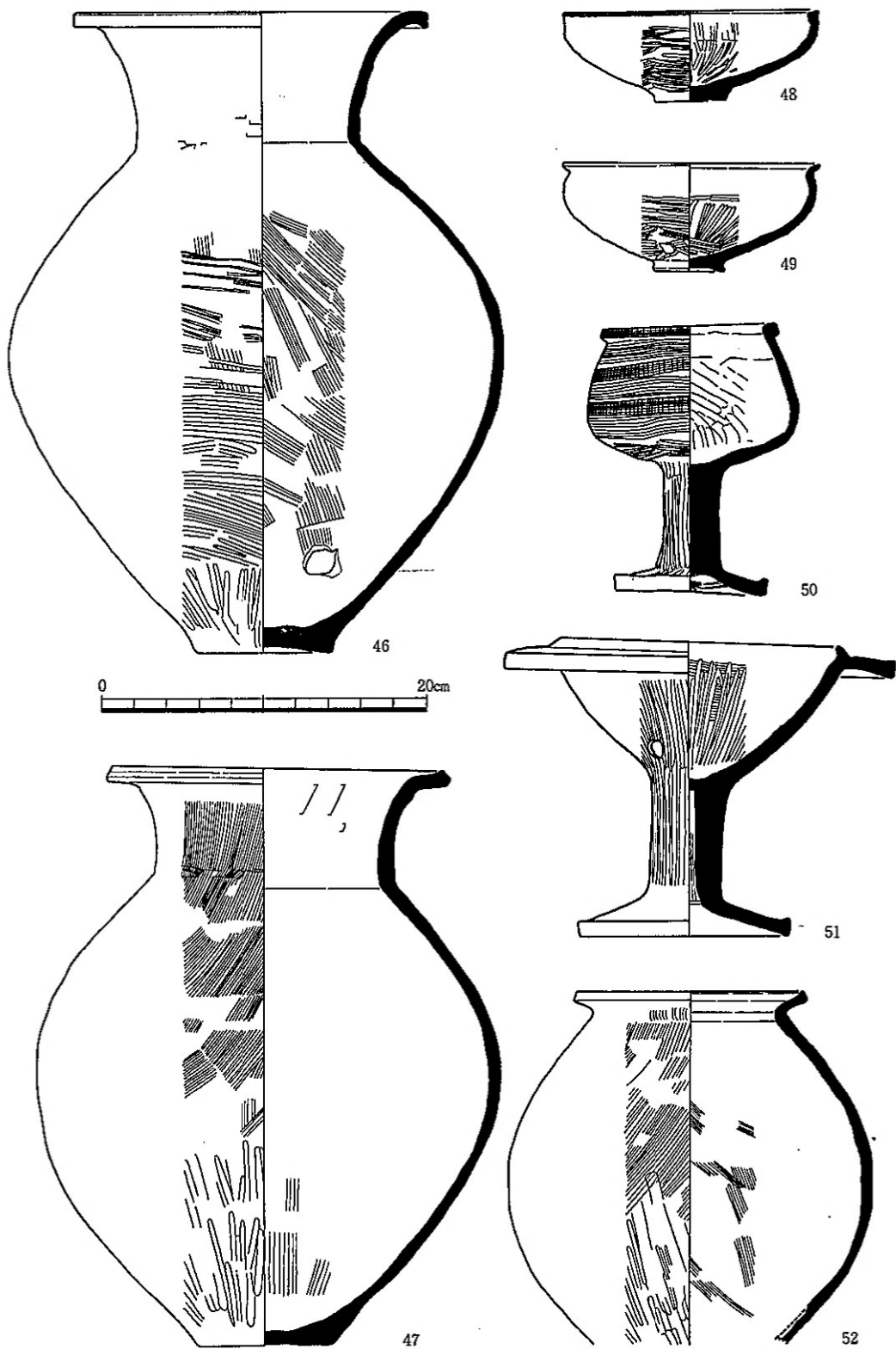
(37)は口径4.9cm、現高25.8cmを測る。口縁部に8条の列点文を3帯、頸部から肩部にかけて8条の直線文を9帯、胴部に8条の扇形文を3帯施し、その間に8条の直線文を4帯と3帯を施す。外面は胴上半部の文様間をヘラミガキ、胴下半部ヨコヘラミガキ、内面は口縁部指押え、



第120図 S K 3144出土土器実測図 (1/4)



第121图 S K 3144出土土器实测图 (1/4)



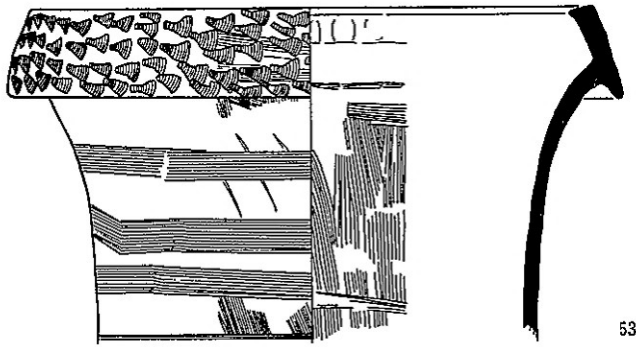
第122图 S K 3144出土土器实测图 (1/4)

頸部にしほり目が見える。胴上半部ナデ、下半部はハケメが残る。(38)は口径3.8cm、最大腹径19cmを測る。口縁部から胴部にかけて6条の直線文を28帯施し、その下に12条の扇形文を飾る。文様間にヘラミガキを施し、それによりしばしば直線文が一部消される。胴下半部外面は丁寧なヨコヘラミガキ、内面は口頸部指押え及びナデ、胴上半部指押え、下半部ハケ調整。

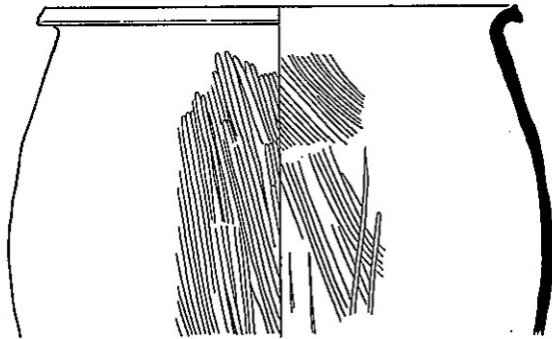
鉢形土器(48~50) 椀形の器体に直口の口縁部をもつ鉢A(48)、腰部に稜をもつ器体に短く外反する口縁部、あるいは段状口縁部をもつ鉢B(49)、台付鉢B(50)がある。(48)(49)ともに浅い形態をもつ。(48)は生駒西麓の胎土。

(48)は口径15.7cm、器高5.6cmを測る。口縁端部に刻目を施す。外面は1/4回転毎にヨコヘラミガキを施し、内面はハケの後タテヘラミガキ調整。(49)は口径15.7cm、器高6.6cmを測る。底部近くに焼成後、穿孔を施す。外面はヨコヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ調整。(50)は口径10.6cm、器高16.3cmを測る。中実の脚部をもつ。段状口縁端部に5条の簾状文、体部に5条の直線文と5条の簾状文を交互に飾る。文様間にヘラミガキを施す。外面は体部下半部ヨコヘラミガキ、脚部タテヘラミガキ、内面は体部ナデ、脚部ヨコヘラミガキ調整。

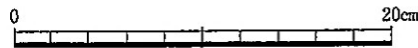
高坏形土器(51)は口径23.6cm、現高18.3cmを測る。外端面は垂下せず柱状の脚部をもつ。坏部に焼成後、表から穿孔を施す。外面はタテヘラミガキ、内面は坏部ヨコハケの後タテヘラミガキ、脚部にしほり目が見られる。



53



54



第123図 S K 3144出土土器実測図(1/4)

甕形土器 (52・54) (52) は復元口径14.0cmを測る。胴の張りが強く、口縁端部は上方に拡張する。外面は上半部ハケ、下半部ハケ状ナデの後タテヘラミガキ、内面は上半部指押え、下半部ハケ調整。外面に薄く煤が付着する。(54) は復元口径24.8cmを測る。口縁端部下方に拡張する。外面はタテヘラミガキ、内面はハケの後、一部タテヘラミガキ調整。生駒西麓の胎土。

SD3012 コンテナ62杯という多量の土器を出土した。第Ⅲ様式である。各器種毎に抽出した。壺・無頸壺・水差・鉢・高坏・蓋・甕・蛸壺形土器、ミニチュア土器等がある。

壺形土器 (55~57) 壺A (55・56) と小形壺 (57) がある。いずれも生駒西麓の胎土。

(55) は復元口径19.6cm、現高34.6cmを測る。口縁端部に12条の籐状文を施し、頸部から胴部にかけて13条の籐状文を9帯と13条の列点文1帯を飾る。文様間はヘラミガキを施す。底部近くに焼成後、表から穿孔を施す。外面は胴部ヨコヘラミガキ、内面は頸部から胴上半部にかけて指押え及びナデ、胴下半部ハケ調整。(56) は復元口径31.6cmを測る。口縁端部は11条の列点文2帯と11条の籐状文1帯を飾る。頸部は11条の籐状文を8帯(若干9帯目が残る)現存する。外面は一部ハケメが残り、内面はヨコヘラミガキ調整。

(57) は復元口径5.7cm、現高14.7cmを測る。外面は頸部タテハケ、胴上半部ヨコハケ、下半部タテハケ、内面は頸部にしぼり目が見られ、胴部はヨコハケ調整。

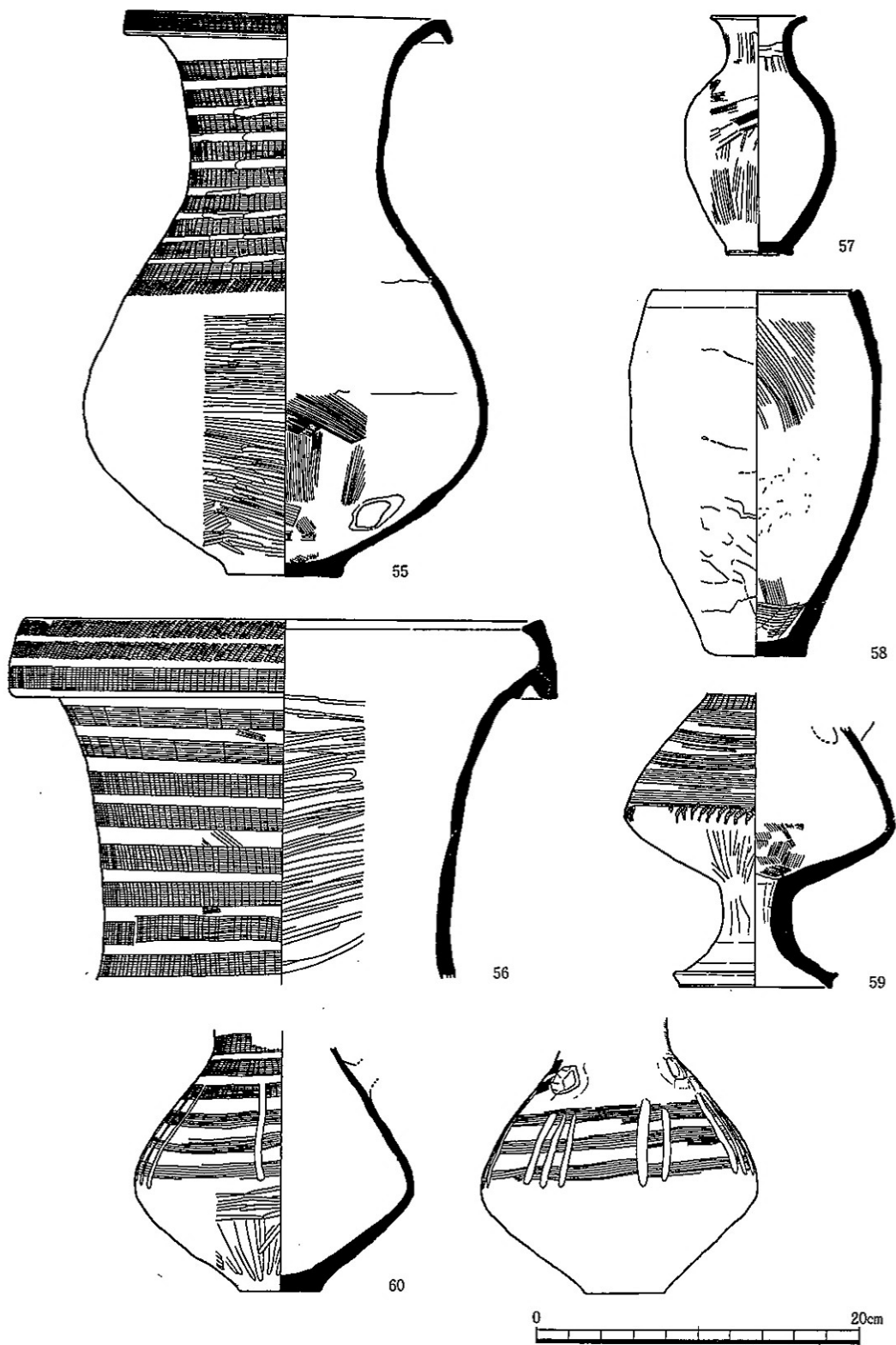
無頸壺形土器 (58) は復元口径12.6cm、現高22.4cmを測る。外面は指押え、内面はハケ、内面が割と丁寧な調整に比べ、外面は粗雑である。内面胴部中央に炭化物が付着している。

水差形土器 (59・60) 台付のもの (59) とそうでないもの (60) がある。

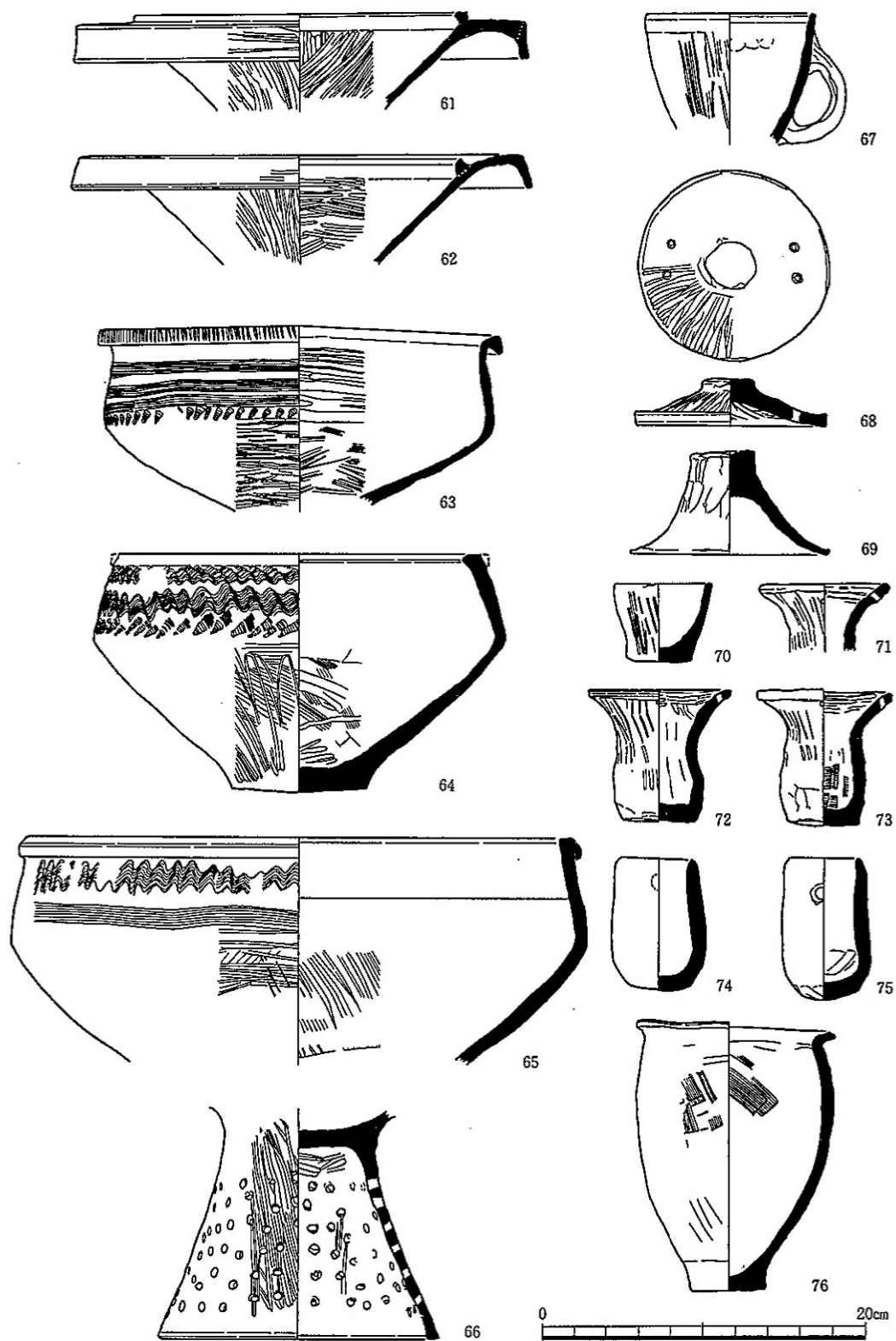
(59) は復元底径9.4cm、復元最大腹径16.6cmを測る。口縁部、把手、胴部と脚部を充填する円板が欠落している。肩部に10+αの籐状文、最大腹径部に8条の列点文、その間に6条の直線文5帯を飾る。外面は、胴下半部タテヘラミガキ、脚部ヘラ削りで一部ハケメがある。内面は、胴上半部ナデ、下半部ハケ、脚部にしぼり目が見られる。(60) は底径5.1cm、最大腹径17.2cmを測る。口縁部と把手を欠失する。肩部に10条の籐状文3帯を施すが、把手側は施していない。胴部に10条の直線文を飾る。文様にヘラミガキを暗文風に施している。外面は胴下半部ヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ、内面は肩部指押え及びナデ、胴部ハケ調整。

鉢形土器 (63~67) 鉢B (63~66)、小形把手付鉢 (67) がある。(63・66・67) は生駒西麓の胎土。

(63) は復元口径24.5cmを測る。口縁端部に刻目、胴部に6条の直線文3帯、6条の直線文3帯、6条の扇形文1帯を飾る。外面は下半部ヨコヘラミガキ、内面は上半部ヨコヘラミガキ、下半部ハケの後細いヘラミガキを荒く施す。(64) は復元口径22.4cm、現高14.7cmを測る。段状口縁部が欠失している。胴部に8条と11条の波状文、11条の扇形文を飾る。外面はハケの後タテヘラミガキ、内面は上半部ナデ、下半部ハケメ及びナデ調整。(65) は復元口径33.2cmを測る。胴部に10条の波状文1帯、9条の直線文を飾る。外面はハケの後ヨコヘラミガキ、内面は上半部ヨコナデ、下半部荒いハケ調整。(66) は復元脚裾径17.4cmを測る脚部片である。1列6個平均で



第124图 S D 3012出土土器实测图 (1/4)



第125图 S D3012出土土器实测图 (1/4)

焼成前に表から穿孔を施す。現存 121 個。外面はハケの後タテヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ調整。

(67) は復元口径10.2cmを測る。外面は雑なタテヘラミガキ、内面は指押え調整。

高坏形土器 (61・62) いづれも水平にひろげた口縁部の内端に凸帯をもち、外端面が垂下する坏部をもつ高坏である。

(61) は復元口径27.6cmを測る。外端面をヨコヘラミガキ、坏部外面タテヘラミガキ、内面は凸帯と外端面間を $\frac{1}{4}$ 回転毎に3.3cm幅だけナメヘラミガキ、坏部ナメヘラミガキ調整。(62) は復元口径27.2cmを測る。外端部をヨコヘラミガキ、坏部外面タテヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキ調整。生駒西麓の胎土と思われるが赤色を呈する。

蓋形土器 (68・69) 壺用 (68)、甕用 (69) がある。(68) は生駒西麓の胎土。

(68) は口径11.6cm、器高2.6cmを測る。焼成前に2個1対で2対穿孔を施す。外面はタテヘラミガキ、内面は荒いハケ調整。(69) は復元口径12.2cm、現高6.5cmを測る。外面はヘラ削り及び指押え、内面はナデ調整。

甕形土器 (76) は口径12.1~12.4cmとかなりゆがみ、器高は16.7cmを測る。外面は上半部ヘラ削り的なハケ、下半部ナデ、内面は上半部ナデ状ハケ、下半部ナデを施すが作りは粗雑である。内外面に煤が付着する。甕形土器の出土少ない。

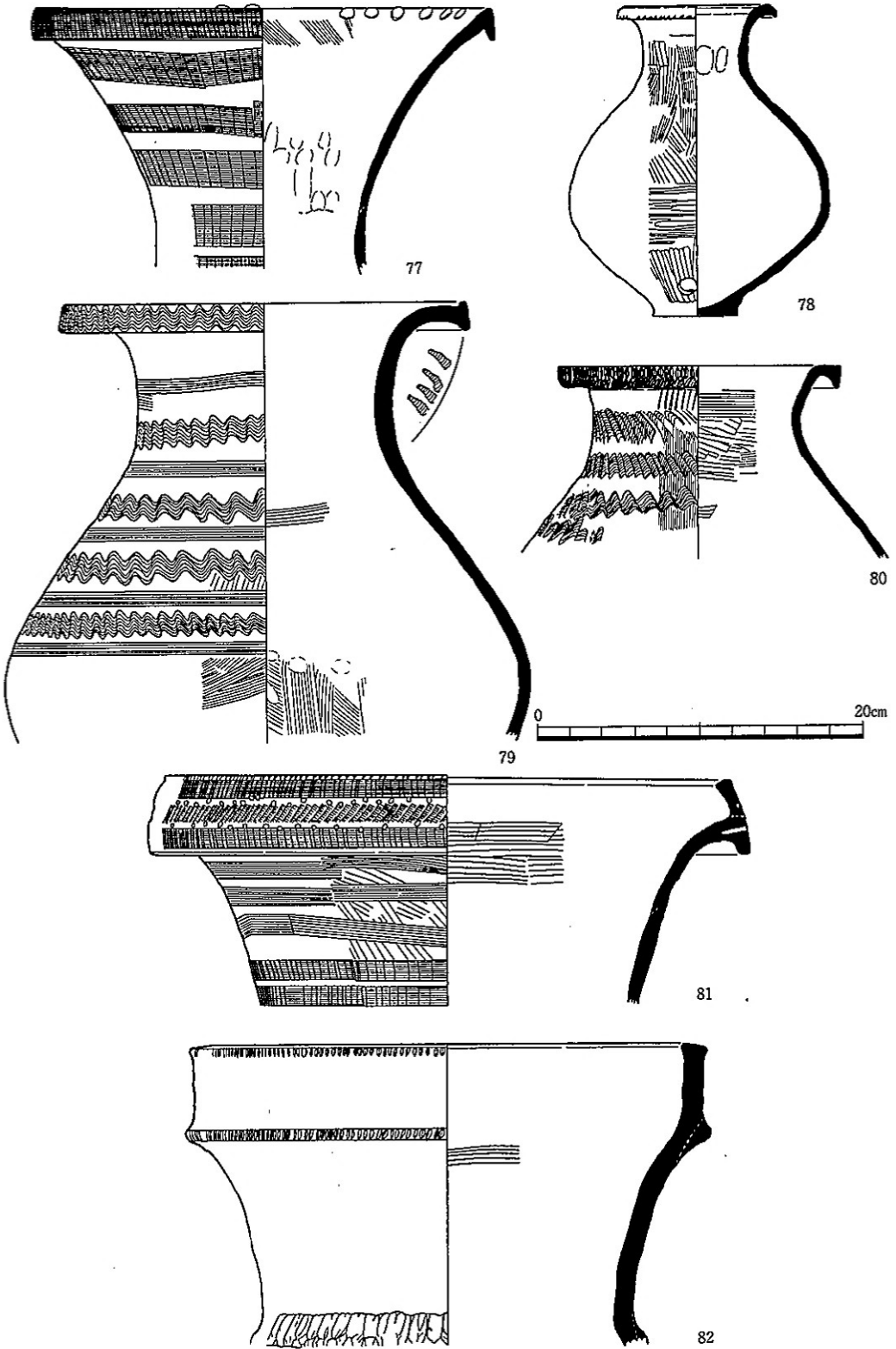
嶋壺形土器 (74・75) (74) は復元口径5.3cm、現高8.2cmを測る。穿孔したと思われる部分が欠失している。外面は器壁の荒れのため調整不明で、内面はナデ調整。(75) は口径3.7~4.1cm、器高8.8cmを測る。焼成前に表から穿孔を施す。内外面は指押え及びナデ調整。

ミニチュア土器 (70~73) 鉢形のもの (70) と特殊な形のもの (71~73) とがある。

(70) は復元口径6cm、現高4.8cmを測る。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。(71) は口径7.5cmを測る。焼成前に2個対称に内から穿孔を施す。外面は荒いハケ、内面は口縁部荒いハケ、胴部ナデ調整。(72) は復元口径8.6cm、現高8.1cmを測る。焼成前に内から穿孔し、1孔残存するが、対称の位置にもう1孔あったと思われる。外面は荒いハケ、内面は口縁部荒いハケ、胴部にしほり目が見られ指押え。この土器はS D3012が埋った状態で出土したものでS D3012出土の土器と言えないが、(71・73) と同形態を示すので図示した。(73) は口径8.0cm、器高8.4cmを測る。焼成前に2個対称の位置に穿孔を施す。外面は上半部荒いハケ、下半部指押え及びナデ、内面は口縁部荒いハケ、胴部しほり目が見られハケ調整。

S D3074 溝がやや埋った頃廃棄された土器群の中から実測可能な各器種を抽出したが壺形土器が多く、必然的に壺形土器に片寄った。S K3144と違ってほとんど口縁部の破片である。第Ⅲ様式である。器種は壺・高坏・甕形土器等がある。

壺形土器 (77~82) 壺A (77・81)、壺B (78)、壺C (79・80) と丈高の器体に外反する頸部がつづき、さらに曲折して上方に向かって立つ受け口状の口縁部をもつ壺F (82) に分かれる。(77・81) は生駒西麓の胎土。



第126图 S D 3074出土土器実測图 (14)

(77) は口径28.2cmを測る。口縁端部に19条の籐状文を施し、頸部に24~26条の籐状文を現存5帯施す。口縁部内面に4個、5個、6個、5個、5個と1連になって円形浮文を飾る。内面は口縁部ハケ、頸部指押えの後ハケ調整。(81) は口径34.3cmを測る。拡張した口縁端部に刻目、10条の籐状文2帯とその間に10条の列点文を施し、籐状文と列点文間に刺突文を施す。頸部に10条の直線文3帯と10条の籐状文2帯を飾る。外面は荒いハケ、内面は口縁部荒いハケ、頸部指押え及びナデ調整。

(78) は口径9.1cm、器高18.8cmを測る。口縁端部に刻目を施す。底部近くに焼成後、表から穿孔を施す。外面は上半部荒いハケとそうでないハケの2種類を使い、下半部はヨコヘラミガキタテヘラミガキ、内面は頸部から肩部にかけて指押え、胴上半部ナデ、下半部荒いハケ調整。

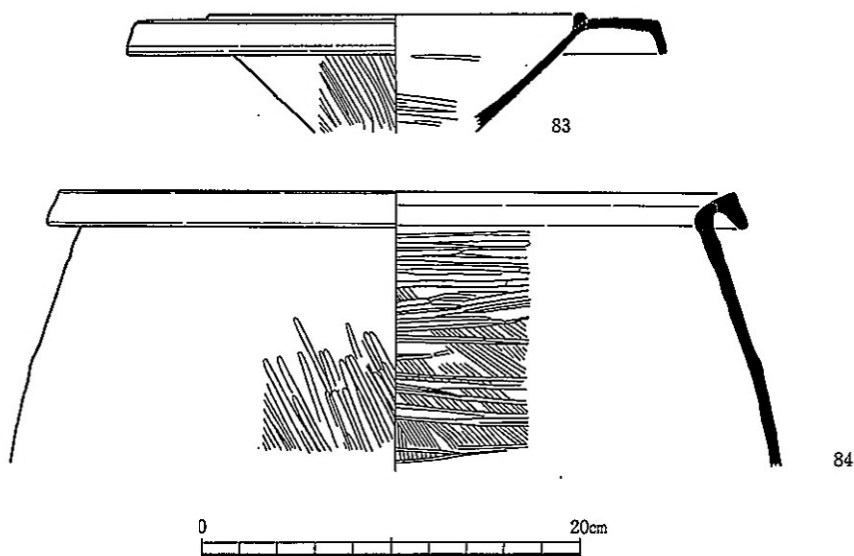
(79) は口径24.5cmを測る。口縁端部に6条の波状文を施し、頸部から胴部にかけて5~6条の直線文と6条の波状文を交互に配している。内外面はハケ調整。(80) は口径17.2cmを測る。口縁端部に2帯の列点文を羽状に配し、頸部から肩部にかけて雑な9条の波状文を現存3帯施す。外面はハケ、内面は荒いハケで一部ナデ調整。口頸部外面に煤が付着する。

(82) は復元口径29cmを測る。口縁部上下に刻目を施す。頸部には指頭圧痕をもつ貼り付け凸帯を施す。外面はナデと思われ、内面は一部ハケメが残る。内面に2次的焼成を受けている。

高環形土器(83) は復元口径27.6cmを測る。外面はタテヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキと思われる。

甕形土器(84) は復元口径35.6cmを測る。口縁端部を下方に拡張する。外面はタテヘラミガキ内面はナナメハケの後ヨコヘラミガキ調整。生駒西麓の胎土。このタイプの甕形土器が多い。

SK3060 コンテナ40杯近くの土器量である。第Ⅱ様式新段階のものが主である。各器種毎に抽出したが、紹介出来なかったものが多い。器種は壺・無頸壺・水差・鉢・高杯・蓋・甕形土



第127図 S D 3074出土土器実測図(34)

器、ミニチュア土器等がある。

壺形土器（85～91） 壺A（85～87・91）と壺B（88～90）がある。（85・87～91）は生駒西麓の胎土。

（85）は口径18cmを測る。口縁端部に10条の簾状文と刻目を施し、頸部から肩部にかけて10条の雑な簾状文を7帯施す。外面はナデ、内面にしほり目が見られる。（86）は口径21.5cmを測る。口縁端部は9条の簾状文を3帯、頸部に9条の簾状文6帯が現存する。外面は口縁部細かいハケ、内面は口縁部に一部ヨコヘラミガキ、内面ナデ調整。（87）復元口径20.4cmを測る。口縁端部は15条の簾状文3帯と刺突文2列を飾る。頸部から肩部にかけて15条の簾状文9帯、胴部に13条の扇形文4帯を施し、その間に15条の簾状文を3帯ずつ飾る。外面は下半部ヨコヘラミガキ、内面は頸部から肩部にかけて指押え及びナデ、胴部指押えの後ハケ調整。（88）は口径10.6cmを測る。口縁端部に8条の簾状文、頸部に13条の簾状文を現存3帯施す。文様間はヘラミガキを施し、そのヘラミガキで上下の簾状文が一部消されている。口縁部内面に円形浮文6個を飾る。内面は口縁部に一部ハケ以外は指押え及びナデ調整。（89）底径4.6cm、最大腹径12.2cmを測る。胴部に6～7条の簾状文と6条の扇形文を交互に配す。外面は下半部ヨコヘラミガキ、内面は上半部指押え、下半部ナデ調整。（90）は復元口径12cmを測る。口縁部は8条の簾状文2帯と列点文1帯を施し、円形浮文を3個1組で5組現存する（本来は7組）。頸部に8条の簾状文を4帯飾る。文様間をヘラミガキする。内面は口縁部ハケ以外は指押え及びナデ調整。（91）は復元口径18.2cmを測る。口縁端部に11条の簾状文を施した後ナデている。頸部に12条の直線文1帯と簾状文3帯を施す。外面はナデ、内面は指押え及びナデで若干ハケメが残る。

無頸壺形土器（92）は復元口径10.8cm、現高13.9cmを測る。2個1対で2対の穿孔を施す。胴部に10条の簾状文を6帯施す。外面は下半部ヨコヘラミガキ、内面は指押え及びナデ調整。

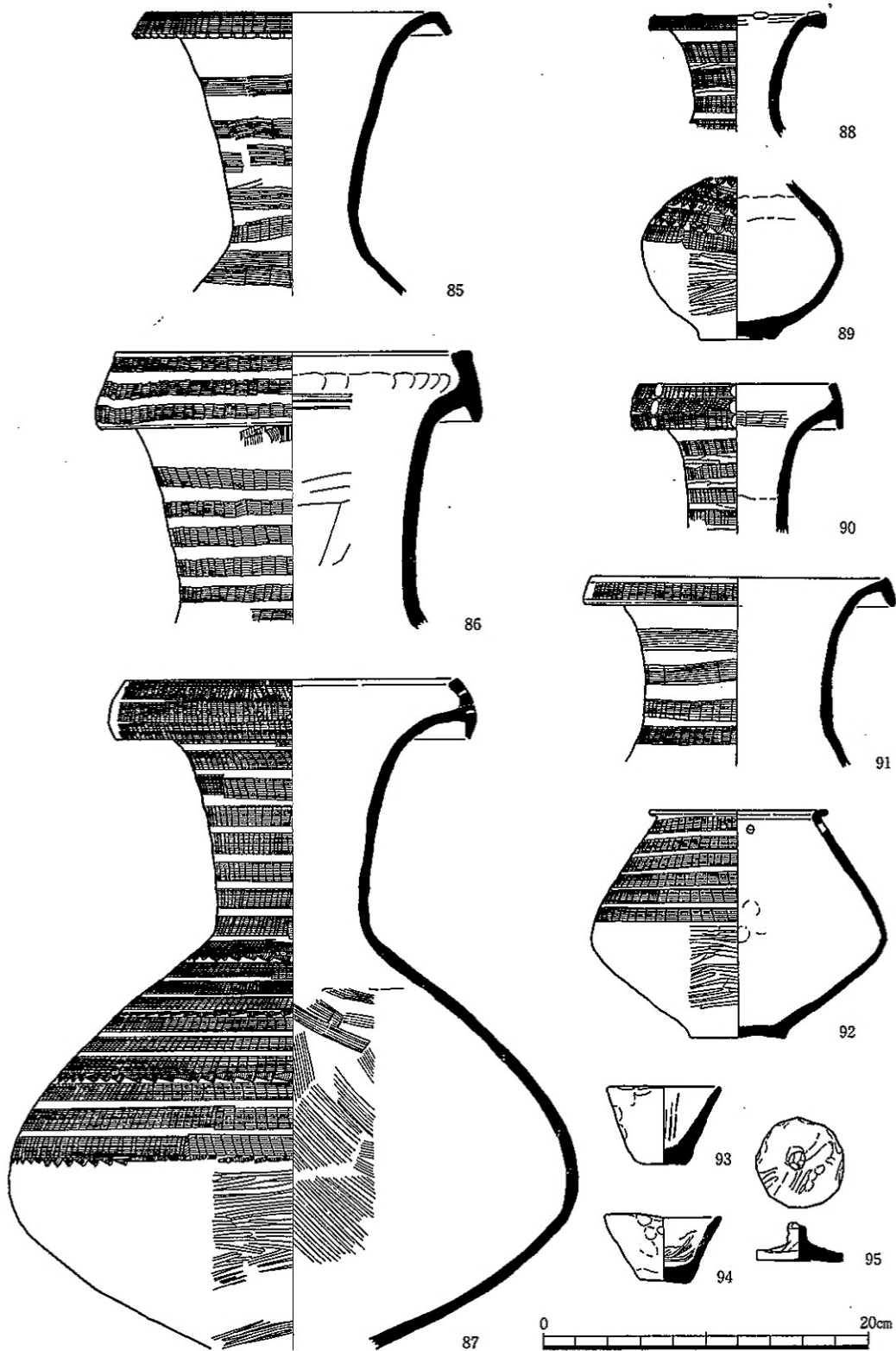
水差形土器（96）は復元口径8.4～9.6cm、現高25.3cmを測る。口縁部は把手側を下げる。口縁端部は7条の列点文、頸部から胴部にかけて6～7条の直線文、一番下に7条の波状文を施す。口頸部の文様は把手側まで施さない。外面は下半部ヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ、内面はナデ調整。

鉢形土器（99・100） どちらも鉢Aである。

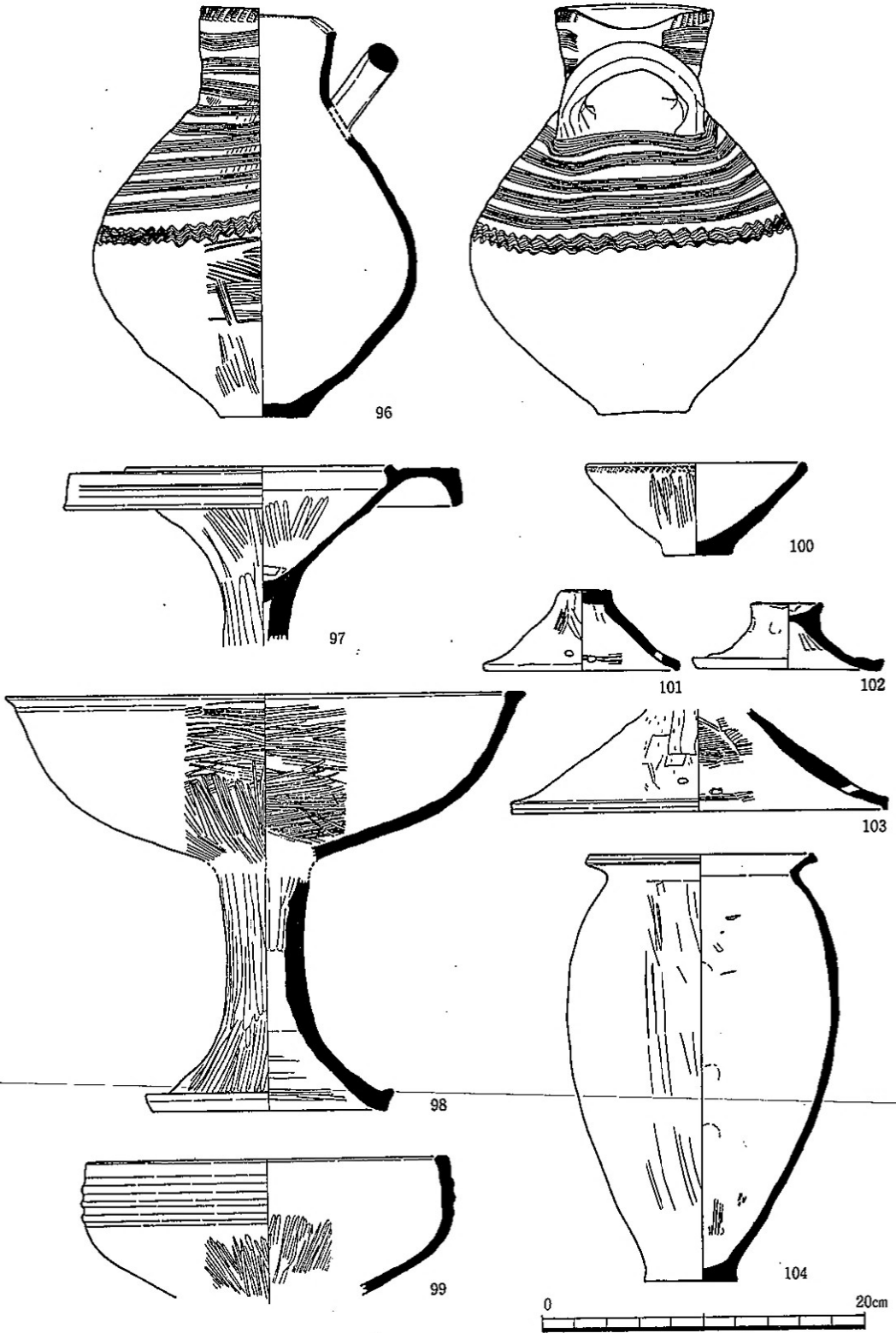
（99）は復元口径22.2cmを測る。口縁部に凹線文を4条施す。外面はタテヘラミガキ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部ハケの後タテヘラミガキ調整。（100）は復元口径13.3cm、現高5.7cmを測る。口縁端部に3条の列点文を施す。外面はタテヘラミガキ、内面はナデ調整。

高坏形土器（97・98） 浅い椀形の坏部をもつ高坏A（98）と高坏B（97）がある。

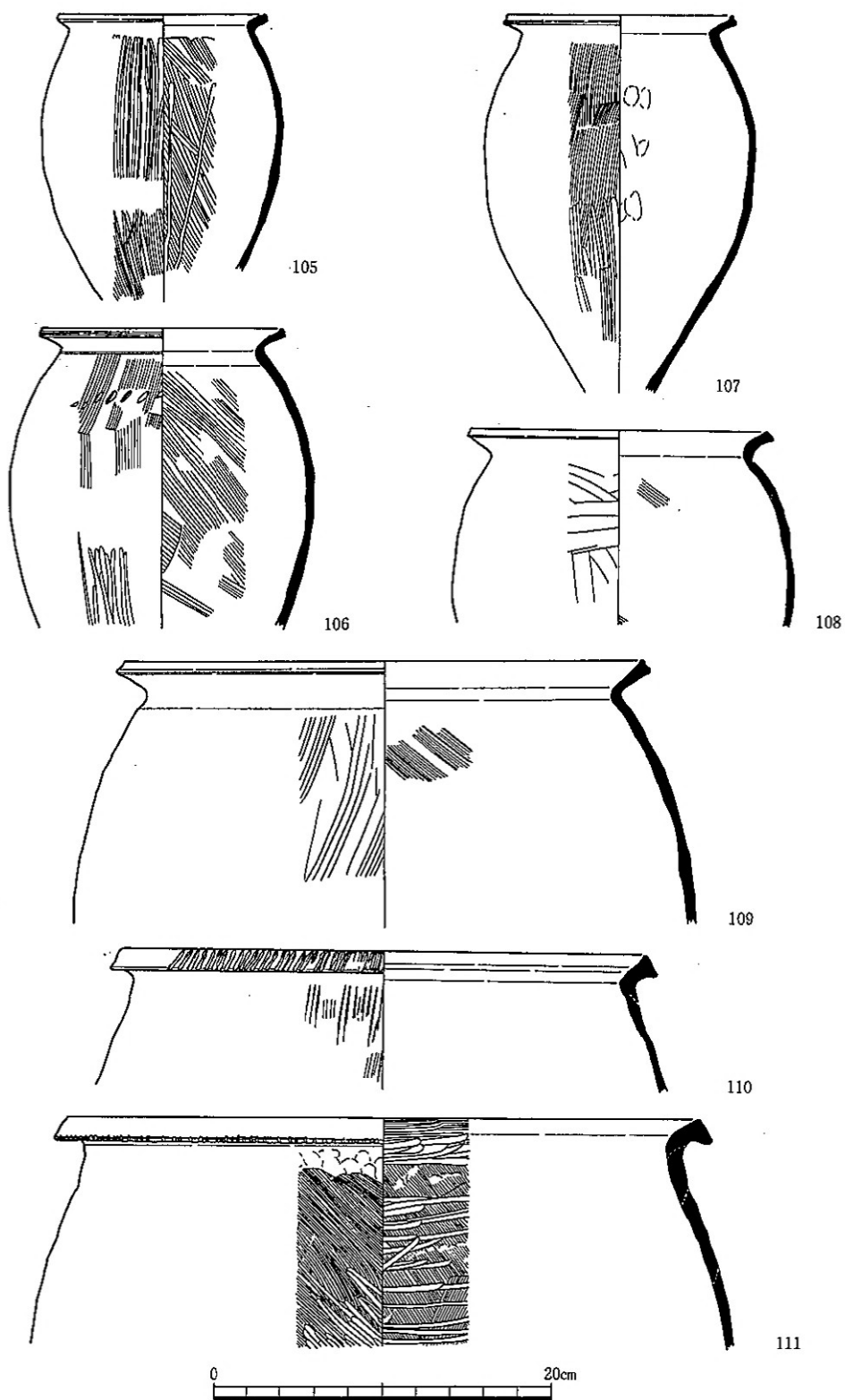
（98）は復元口径32cm、脚底径14.4cmを測る。坏部と脚部は直接接合しないが、同一個体とみなし、実測・復元した。外面は坏上半部ヨコヘラミガキ、下半部タテヘラミガキ、脚部タテヘラミガキ、内面は坏上半部ヨコヘラミガキ、下半部アトランダムなヘラミガキ、脚部はしほり目が見られ、脚端部に荒いハケ調整。



第128图 S K 3060出土土器实测图 (34)



第129图 S K 3060出土土器实测图 (14)



第130图 S K 3060出土土器実測図(4)

(97) は復元口径24cmを測る。外端面に沈線状のものが3条ある。外面はヘラ削りの後タテヘラミガキ、内面は坏底部がヘラ削りのようなヨコヘラミガキでそれ以外はタテヘラミガキ調整。

蓋形土器 (101~103) 壺用 (101・103) と甕用 (102) がある。(101・102) は生駒西麓の胎土。

(101) は復元口径12cm、現高5.0cmを測る。2個1対で2対、穿孔を施す。外面はハケの後ナデ、内面は一部ハケ調整。口縁端部内外に煤が付着する。(103) は復元口径23.2cmを測る。2個1対で2対穿孔を施す。外面はヘラ削りで一部ハケ、内面はハケ調整。口縁部内面に煤が付着する。

(102) は復元口径11.4cm、現高4.1cmを測る。外面は指押え及びナデ、内面はハケメ痕がある。口縁部内面は煤が付着する。

甕形土器 (104~111) 口縁端部を上方につまむもの (104・106・107) と単に終わるもの (105・108) と口径30cmを越える大形で口縁端部を拡張するもの (109~111) がある。前者が多い。

(104) は口径13.8cm、現高26.2cmを測る。外面は上半部ハケの後ハケ状ナデ、下半部ハケ状ナデ、内面は指押え及びナデ調整だがヘラ痕がある。内底面に茎状の炭化物、外面に煤が付着する。(106) は復元口径14.4cmを測る。肩部に刺突文が7点現存する。外面は上半部ハケ、下半部ヘラミガキ、内面はハケ調整。外面に若干煤が付着する。(107) は復元口径13.4cmを測る。外面は上半部ハケ、下半部ヘラミガキ、内面は指押えで一部ハケ調整。内外面に煤が付着する。

(105) は復元口径12.1cmを測る。外面はタテヘラミガキ、内面はハケの後、雑なヘラミガキ調整。内外面に煤が付着する。(108) は復元口径17.7cmを測る。外面はハケナデ、内面は一部ハケ以外はナデ調整。外面に煤が付着する。

(109) は復元口径30.2cmを測る。外面は荒いハケ、内面は指押えの後ハケ状ナデ調整。内外面に煤が付着する。(110) は復元口径30.8cmを測る。口縁端部に刻目を施す。外面は荒いハケ、内面はナデ調整。内面と口縁外面に煤が付着する。(111) は復元口径37.3cmを測る。口縁端部に刻目を施す。外面は指押えの後ハケ、後タテヘラミガキ、内面は口縁部ヨコハケの後ヨコヘラミガキ、胴部指押えの後タテハケ、後ヨコヘラミガキ調整。

ミニチュア土器 (93~95) 鉢形 (93・94) と蓋形 (95) がある。

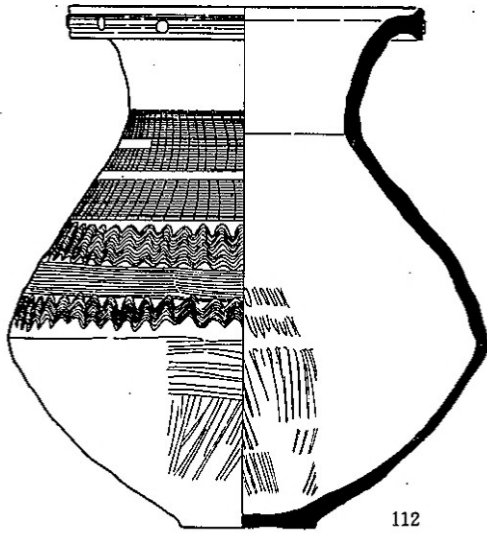
(93) は復元口径7cm、現高4.8cmを測る。外面は指押え、内面はナデ調整。(94) は復元口径7.2cm、現高4.3cmを測る。外面は指押え、内面は指押えで一部ハケ又はヘラでアトランダムに調整。

(95) は口径5.2cm、器高2.3cmを測る。内外面は指ナデで一部ヘラ削り調整。

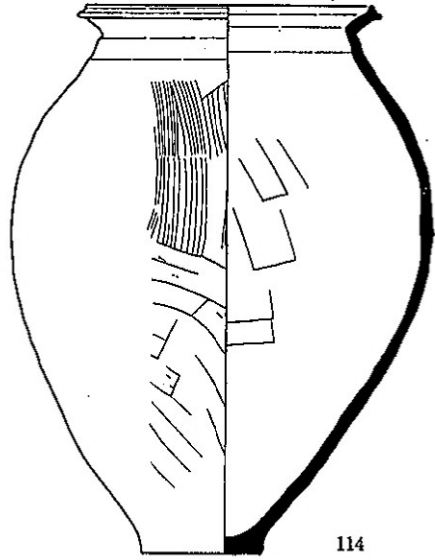
S K3040 第Ⅳ様式の良い一括資料である。器種は壺・鉢・甕形土器がある。

壺形土器 (112・113) 壺C (112)、壺F (113) がある。

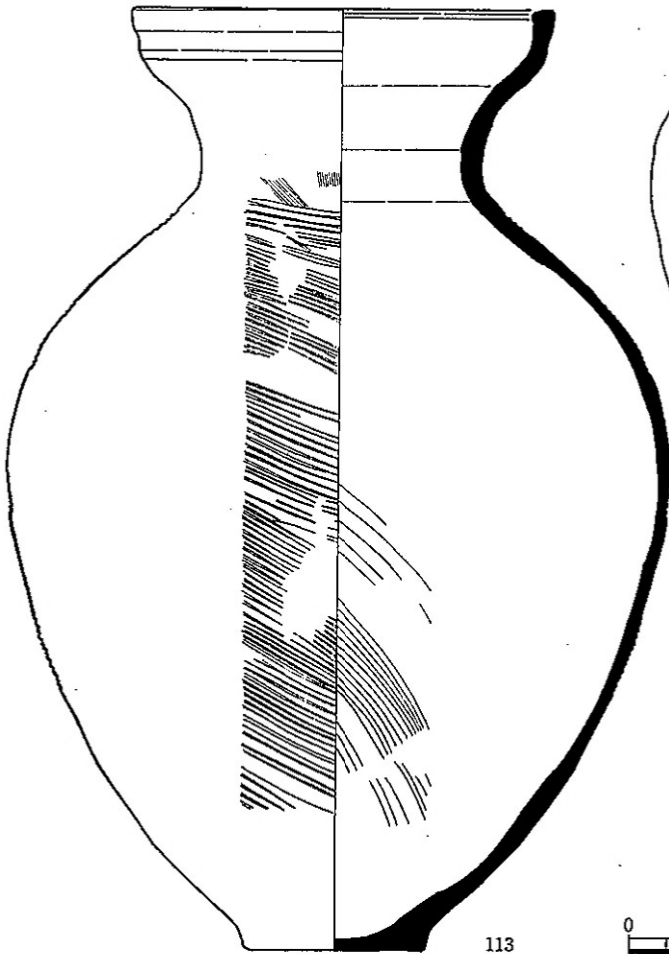
(112) は口径18.6cm、器高27.3cmを測る。口縁端部に3条の凹線文と現存9個の円形浮文(推



112



114



113



115



第131图 S K 3040出土土器实测图 (1/4)

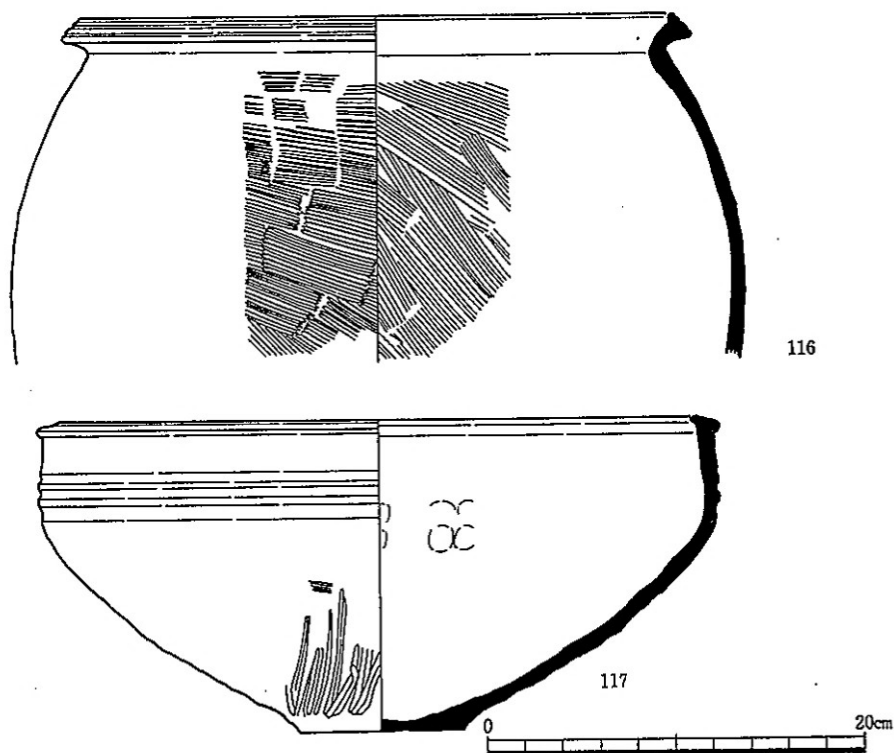
定10個)を飾る。胴部に17条+ α の簾状文(一番上の簾状文は一部分波状文に変わる)、9条と12条の波状文、10条の直線文を飾る。外面は下半部ヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ、内面は口頸部ヨコナデ、胴上半部ナデと指押え、下半部荒いハケ調整。外底面に一部煤が付着する。

(113)は口径22.4cm、現高49.4cmの大形品である。外面は頸部に一部ハケメが残り、胴部タタキ、内面は口頸部ヨコナデ、胴上半部指押え及びナデ、下半部荒いハケ調整。

鉢形土器(117)は復元口径32.8cm、現高16.3cmを測る。口縁端部が内外に拡張する。口縁下に凹線文を3条飾る。外面は上半部ハケ及びヘラ削りの後ナデ、下半部ハケ及びヘラ削りの後タテヘラミガキ調整。内面は口縁部ヨコナデ、胴部指押えの後ナデ調整。

甕形土器(114~116) 端部を上下に拡張するもの(114)としないもの(115)と口径30cmを越え、端部を上下に拡張するもの(116)がある。(116)は生駒西麓の胎土。

(114)は復元口径15.2cm、現高28.8cmを測る。外面は上半部荒いハケ、下半部ヘラ削り、内面は上半部ハケ状ナデ、下半部指押え及びナデ調整。外面下半部に煤が付着する。(115)は復元口径13.8cm、現高22.7cmを測る。外面は肩部荒いハケ、胴部ヘラ削り、内面は指押えの後ハケ状ナデ調整。外面と内面下半部一部に煤が付着する。(116)は復元口径31.4cmを測る。口縁端部に凹線文3条を施す。外面は細かいタタキ、内面は荒いハケ調整。



第132図 S K 3040出土土器実測図(1/4)

後期 第Ⅶ様式を前半と後半に分けるとすると、S D3104、S E3027が前半、S D3008、S D3010が前半～後半にかけての時期で、N R3001、S D3067が後半になる。

S D3104 2段掘りになっている2段目に片まって出土した土器群の中から実測出来るものを抽出した。第Ⅶ様式前半でも古い方に入ると思われる。器種は長頸壺・高坏・器台・甕形土器等がある。

長頸壺形土器(119)は口径11.7cm、器高29.1cmを測る。外面はタテヘラミガキ、内面は口頸部指押え及びナデ、胴部ナデ調整。

細頸壺形土器(118)は口径8.2cm、器高16.9cmを測る。最大腹部に凸帯を施す。肩部に4条の波状文と3条の直線文を施し、凸帯部上下に刻目を施す。頸部から肩部にかけてと胴部に重弧文状にベンガラを塗る。又、凸帯上にもベンガラを塗る。外面はヘラミガキ、内面はハケメが一部残る以外調整不明。

高坏形土器(120・121) どちらも曲折してたつ口縁部をもつ高坏A2である。

(120)は口径21.9cmを測る。脚部を欠損する。外面は口縁部ナデ、坏部ヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ、内面は口縁部ヨコナデ、坏部タテヘラミガキ調整。(121)は口径23.2cmを測る。外面は口縁部ヨコナデ以外はタテヘラミガキ、内面は口縁部ヨコナデ、坏部タテヘラミガキ、脚部ヨコ方向のヘラ削り及びナデ調整。

器台形土器(122)は口径16.8cm、器高14.7cmを測る。外面は口縁部ヨコナデ、胴上半部ナデ、下半部にヘラ痕と思われるものがある。内面は口縁部ヨコナデ、胴部ナデと指押え調整。

甕形土器(123~126) 受け口状の口縁部をもつもの(126)とそうでないもの(125)と小形のもの(123・124)がある。

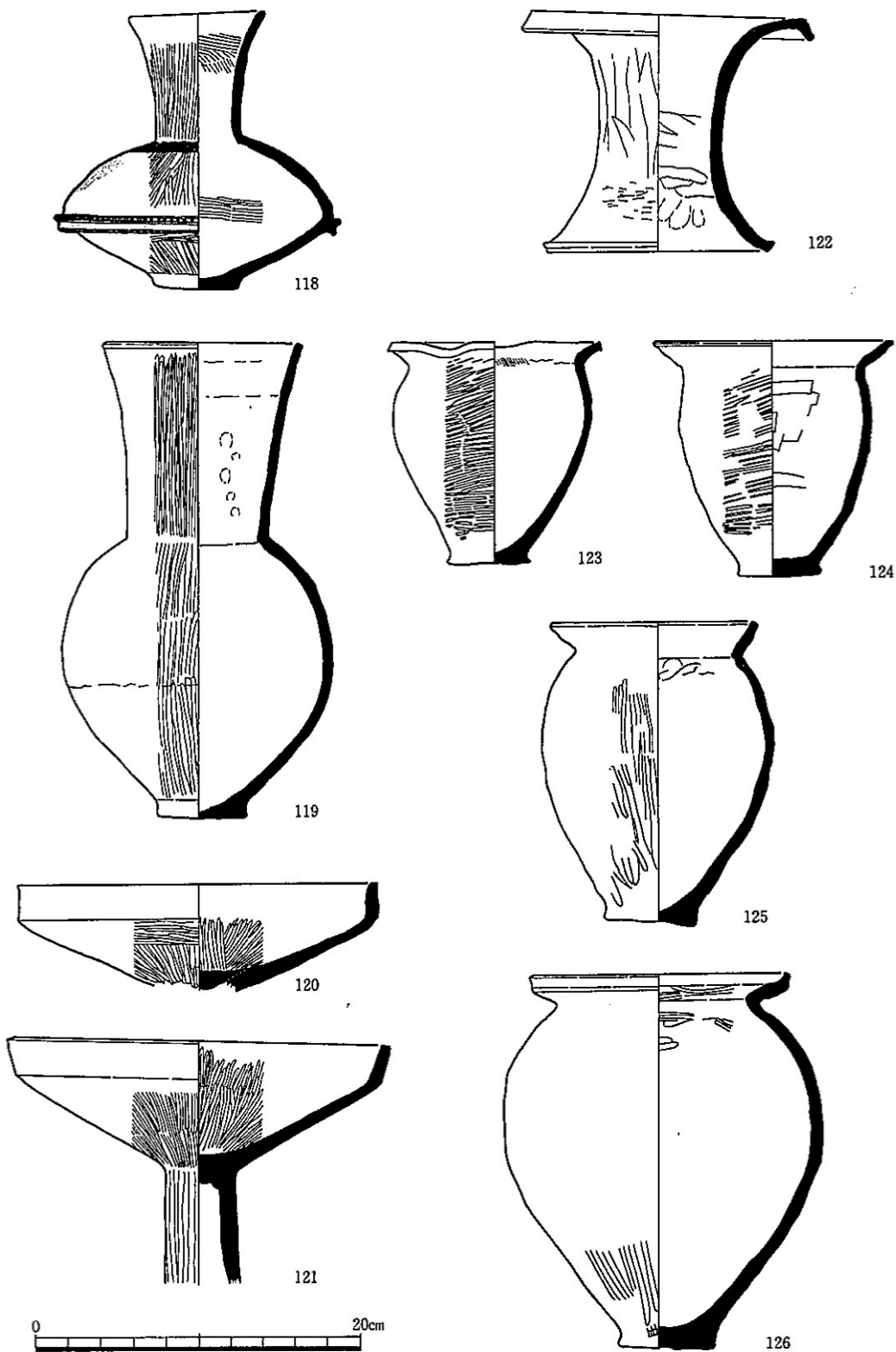
(125)は復元口径12cm、現高18.4cmを測る。外面は胴部タテヘラミガキ、内面はナデ調整。内外面に煤が付着する。

(126)は口径15.5cm、器高23.0cmを測る。外面は煤が厚く付着しているため調整不明だが、下半部はタテヘラミガキで一部ハケメが残っている。内面は口縁部一部ヨコヘラミガキ、胴上半部ヨコヘラミガキ、下半部ナデ調整。

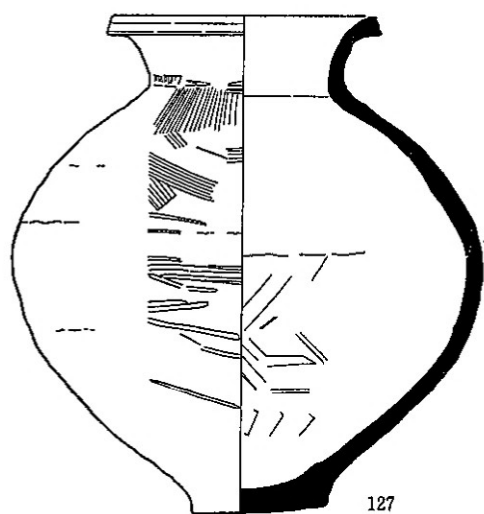
(123)は口径12.6cm、器高13.5cmを測る。口縁部3ヶ所が片口状に下がっているが成形の際のゆがみと思われる。外面は平行タタキ(口縁部にも一部タタキメが残る)、内面はナデ調整。外面に煤が付着する。(124)は復元口径14.7cm、現高14.4cmを測る。外面は平行タタキ、内面はヘラナデとナデ調整。

S E3027 井戸内から一括で出土した。すべて完形及び完形に近いもので全ての土器を図示した。器種は壺・長頸壺形土器がある。

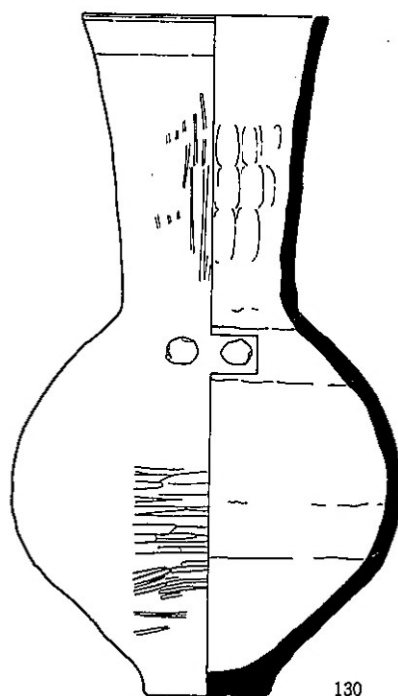
壺形土器(127)は口径14.0cm、器高26.3cmを測る。口縁端部に1条の凹線文が残る。外面は胴上半部ハケ、下半部ヘラミガキと指押え、内面は胴上半部指押え、下半部ヘラナデ及びハケ調整。生駒西麓の胎土。



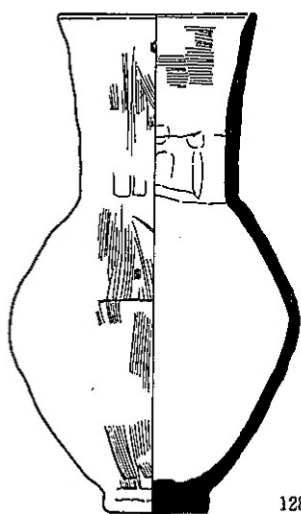
第133图 S D3104出土土器实测图(1/4)



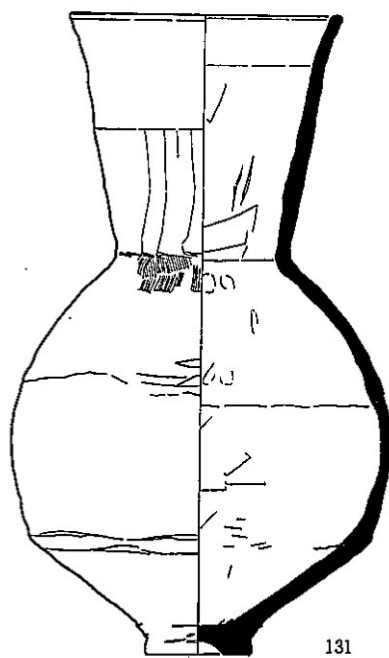
127



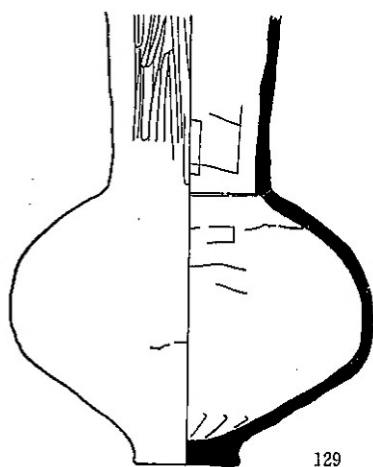
130



128



131



129



第134图 S E 3027出土土器实测图 (1/4)

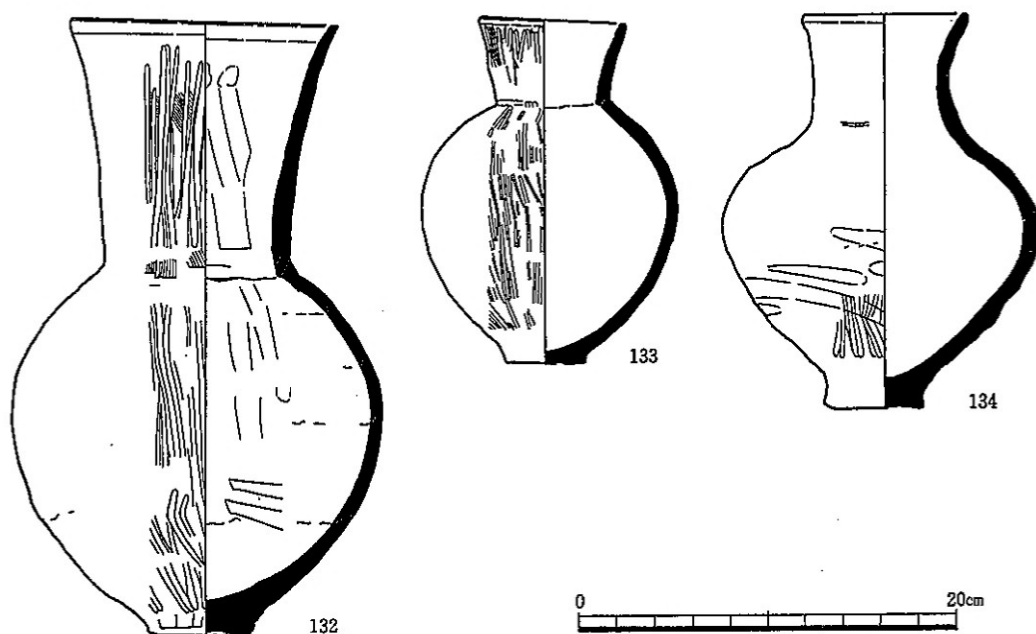
長頸壺形土器 (128~132) 5種5様の形態をもつ。(130)は生駒西麓の胎土。

(128)は口径10.5cm、器高26.3cmを測る。焼成前に表から穿孔を施す。外面はハケ、内面は口縁部ハケ、頸部指押え及びナデ、胴部指押えとハケ調整。(129)は底径5.7cm、最大腹径19.3cmを測る。外面は最大腹部ヨコヘラミガキ以外タテヘラミガキ、内面は頸上半部指押え及びナデ、下半部ハケナデ、胴上半部指押え及びナデ、下半部ハケナデ調整。(130)は口径15cm、器高35.8cmを測る。肩部に円形浮文2個1対で2対施す。外面は口頸部から肩部にかけて板状のナデの上をまばらなヘラミガキ、胴下半部太いヨコヘラミガキ、内面は指押え及びナデ調整。(131)は復元口径14.4cm、現高34.1cmを測る。外面は口頸部ヨコナデとハケ状ナデ、胴上半部ハケ状ナデ、下半部指押え及びナデ、内面は口頸部ハケ状ナデ、胴上半部指押え及びナデ、下半部ハケ状ナデ調整。(132)は口径14cm、器高32.3cmを測る。外面は口頸部ハケの後タテヘラミガキ、胴部タテヘラミガキ、内面は指押え及びナデ調整。

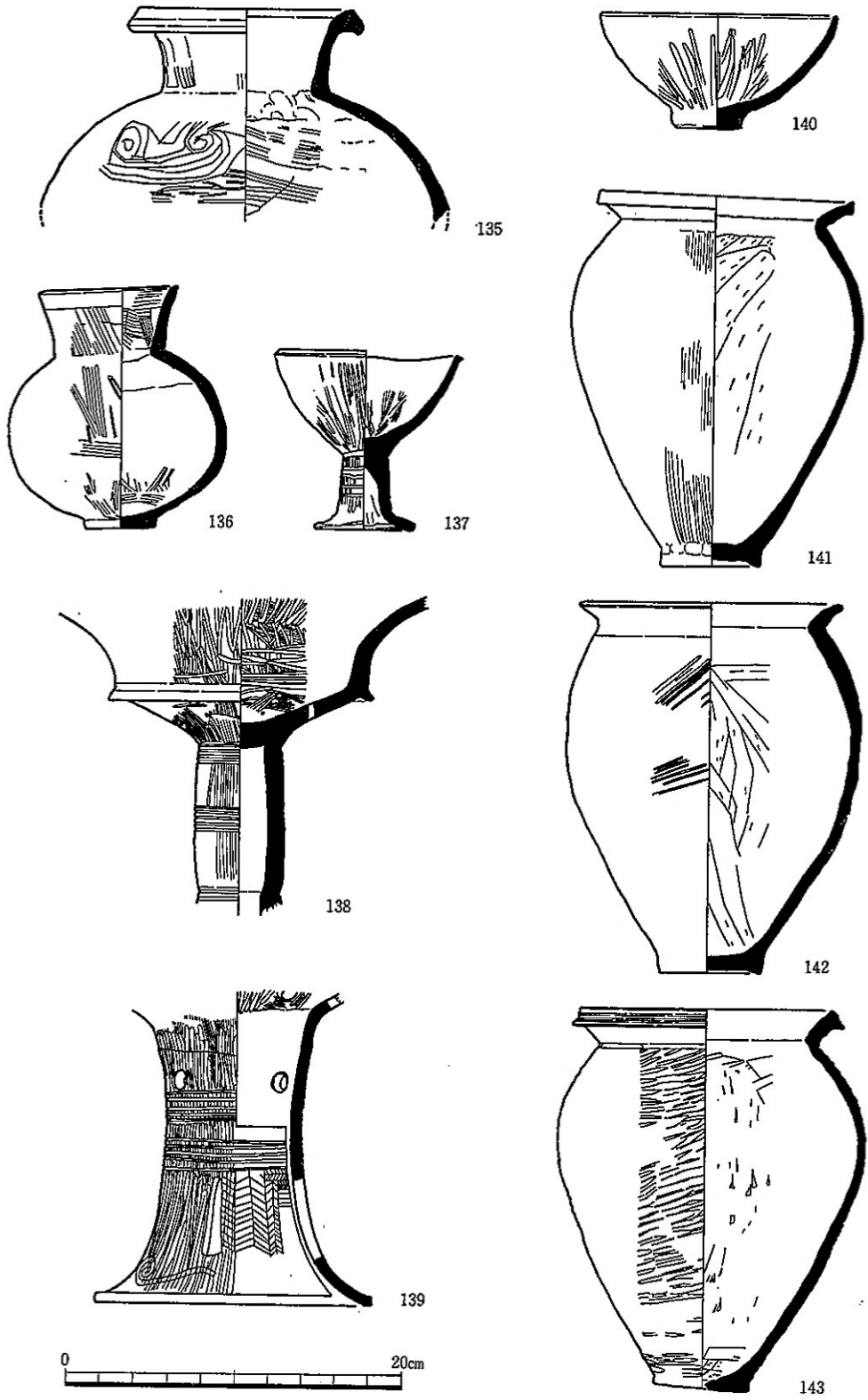
短頸壺形土器 (133・134) 張った肩部からなだらかなカーブで口縁部が外反するもの (134) と丸みをもつ胴部にやや外傾して直口する口縁部をもつもの (133) がある。

(133)は口径7.6cm、器高18.3cmを測る。外面は密なヘラミガキ、内面は胴部ヘラ状ナデ調整。(134)は口径8.6cm、器高20.6cmを測る。外面はヘラミガキと思われるが器壁の荒れ著しく調整不明、ヘラ痕が一部残る。内面は口頸部指押え及びナデ、胴上半部指押え、下半部雑なハケ調整。

SD3010 上層、下層に分けて遺物に取り上げられ、下層は前半の土器で、上層になると後半の土器が混ってくる。上下層合わせてコンテナ31杯という多量の遺物である。その中の下層の土器から抽出した。器種は壺・短頸壺・鉢・高坏・器台・甕形土器等がある。



第135図 SE3027出土土器実測図 (1/4)



第136图 S D 3010出土土器实测图 (1/4)

壺形土器(135)は復元口径12.5cmを測る。肩部に双頭渦巻文を複雑にしたような絵画(?)文を施す。その文様に直接接合しないが、同様な文様の破片があり、対称の位置に描かれていたと思われる。外面は口頸上半部ナデ、下半部ハケ、胴部ヘラミガキ、内面は口頸部ヨコナデ、肩部指押え、胴部ハケ調整。

短頸壺形土器(136)は口径8.2cm、現高14.4cmを測る。外面は頸部ハケ、胴上半部ハケの後一部ヘラミガキ、下半部ヘラミガキ、内面は頸部ハケ、胴上半部指押え及びナデ、下半部ハケ調整。

鉢形土器(140)は小形の直口鉢で鉢Aである。復元口径14.0cm、現高6.8cmを測る。内外面はタテヘラミガキ調整。

高環形土器(137・138) 椀形の坏部をもつ高環A₁(137)、きつく外反する口縁部にエンタシス状の脚部をもつもの(138)がある。

(137)は口径10.5cm、器高10.7cmを測る。脚部に5条の沈線文を施す。外面は坏部ヘラミガキ、脚部ハケの後ヘラミガキ、内面は坏部雑なヘラミガキ、脚部にしほり目が見られる。(138)は口縁部も脚部も欠くものである。坏部は第Ⅶ様式後半の様相を示すが、脚部は中期から残る前半の様相を示す。坏底部に焼成前に内から小孔を穿つ(現存21個)、脚部に4~5条の沈線を施す。外面は口縁部ハケの後ヘラミガキ、坏底部ハケの後一部ヘラミガキ、脚部ハケ、内面は坏部ハケの後ヘラミガキ、脚部横方向のヘラ削り調整。外見はベンガラを塗ったような赤褐色を呈する。

器台形土器(139)は底径16.3cmを測る。3段に4ヶ所ずつ透しを施す。最下段の透しは隅丸三角形である。胴部に5条の沈線文を2帯施す。裾部に渦巻文と縦方向、横方向の綾杉文を記号文のように描いている。綾杉文と対称の位置に“Q”の文様がある。外面はハケの後ヘラミガキ、内面は口縁部ハケの後ヘラミガキ、胴部ヨコヘラ削り、裾部ヨコハケ調整。

甕形土器(141~143) 口縁端部を肥厚するもの(141・143)、しないもの(142)があり、この他に受口状の口縁部をもつものもある。

(141)は口径15cm、器高22cmを測る。外面はハケ、内面はヘラ削り調整。外面に煤が厚く付着する。(142)は口径15.7cm、器高21.9cmを測る。外面は上半部浅いたタキ、下半部ナデ、内面はヘラ削り調整。外面に厚く煤が付着する。(143)は復元口径15.2cm、現高22.6cmを測る。口縁端部に擬凹線文3条を施す。外面はタキ、底部近くでタキの後ハケ調整、内面は肩部、底部ヨコヘラ削り、胴部タテヘラ削り調整。底部に焼成後両面から穿孔を施す。内外面に煤が付着する。

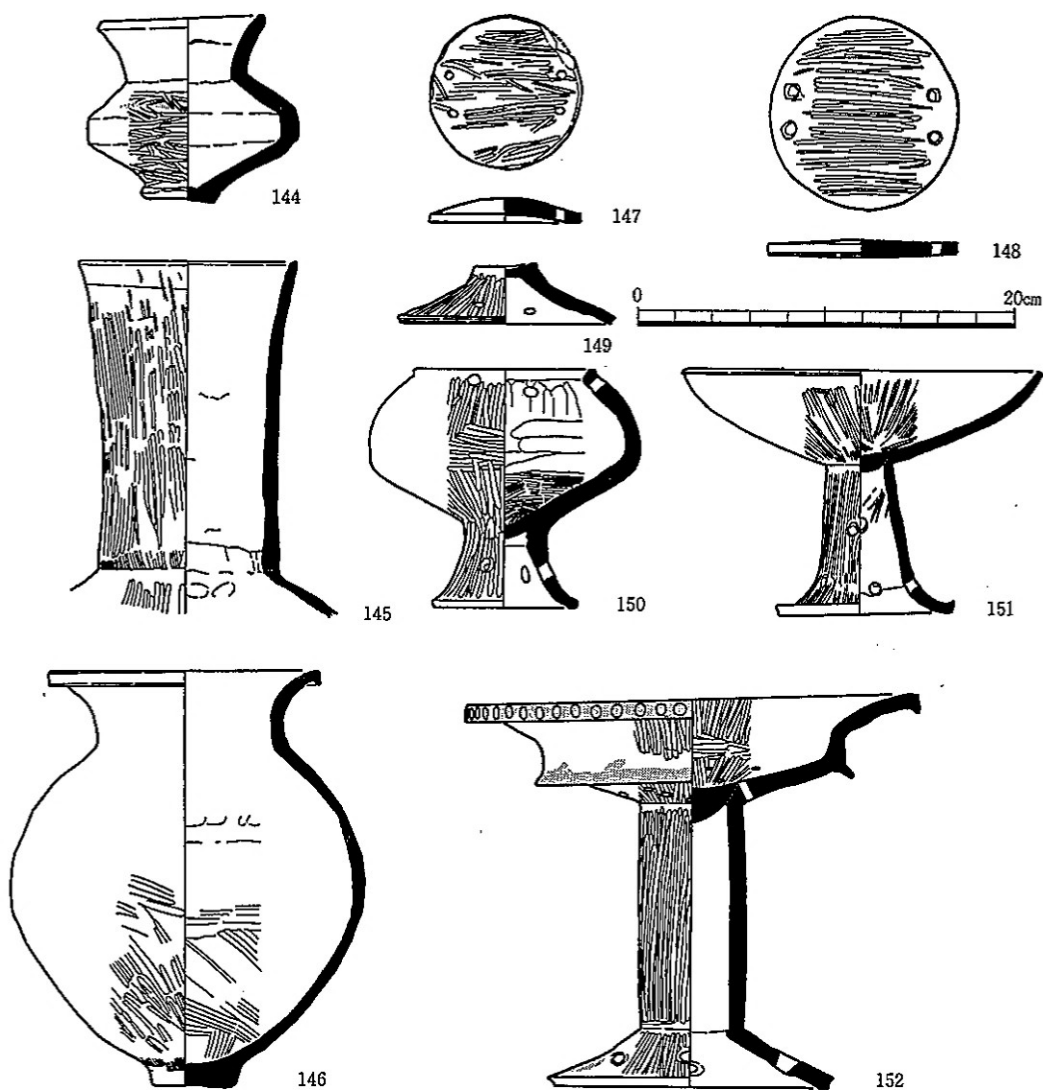
SD3008 上層・下層に分かれるが、遺物はどちらも前半も後半も含む。上・下層合わせてコンテナ28杯の多量の土器の中から抽出した(144・146が上層出土)。器種は壺・長頸壺・小形壺・無頸壺・高環・蓋形土器等である。器種は不揃いだが、前記のSD3010の土器と同じような時期として並べて見て頂きたい。

壺形土器 (146) は復元口径 14.2cm、現高 22cm を測る。口縁端部を下にやや拡張する。外面は器壁の荒れ著しく上半部調整不明、下半部ヘラミガキで底部近くハケ調整。内面は口頸部ヨコナデ、肩部指押え及びナデ、下半部ハケ調整。生駒西麓の胎土と思われるが 5mm 大の赤色砂粒を含む。

長頸壺形土器 (145) は口径 11.4cm を測る。外面はヘラミガキで頸胴部の境のみハケ、内面は指押え及びナデ調整。

小形壺形土器 (144) は復元口径 8.5cm、現高 9.7cm を測る。外面は口頸部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、内面は口頸部ヨコナデ、胴部ナデ調整。肩部にベンガラが残存する。

無頸壺形土器 (150) は口径 9.5cm、器高 12.6cm を測り、台付である。口縁部に 2 個 1 対で 2 対穿孔を施し、脚部に透し 5 個を施す。外面はヘラミガキ、内面は坏上半部ナデ、下半部ハケ調



第137図 S D 3008出土土器実測図 (1/4)

整。(149)の蓋とペアである。

高坏形土器(151・152) 高坏A₁(151)とつよく外反する口縁部とエンタシス状の脚部から斜めに開く裾部をもつもの(152)がある。

(151)は口径18.5cm、器高13.0cmを測る。透しは2段に分かれ、上段に4個、下段に5個施す。外面は坏部ハケの後ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ、内面は坏部ヘラミガキ、脚部ヘラ削り調整。

(152)は復元口径23.8cm、現高20.8cmを測る。口縁端部に竹管文を飾る。SD3010の(138)と同じく坏底部に小孔を穿つ(現存10個)。脚裾部に透しを6個施す。口縁端部、凸帯、裾部の透し間に円形にベンガラを塗る。外面はヘラミガキ、内面は坏部ヘラミガキ、脚柱部ヘラ削り、裾部ナデ調整。

蓋形土器(147~149) いずれも壺用である。円板状のもの(147・148)と笠状のもの(149)がある。(148)は生駒西麓の胎土。

(147)は口径8cm、器高1.3cmを測る。2個1対で2対穿孔を施す。外面はヘラミガキ、内面は雑なヘラミガキ調整。(148)は口径10.1cm、器高1.0cmを測る。2個1対で2対穿孔を施す。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。

(149)は口径11.1cm、器高3.3cmを測る。2個1対で2対穿孔を施す。外面はハケ状ナデの後ヘラミガキ、内面は指押え及びナデ調整。

NR3001 e・f 40~43地区にまとまりをもちつつ平面的に出土した土器群の中から各器種を抽出した。今回紹介する以外にも完形又は完形に近いものが多い。第Ⅴ様式後半として扱えた。器種は壺・長頸壺・鉢・高坏・器台・甕形土器等がある。甕形土器が全体の半数以上を占める。

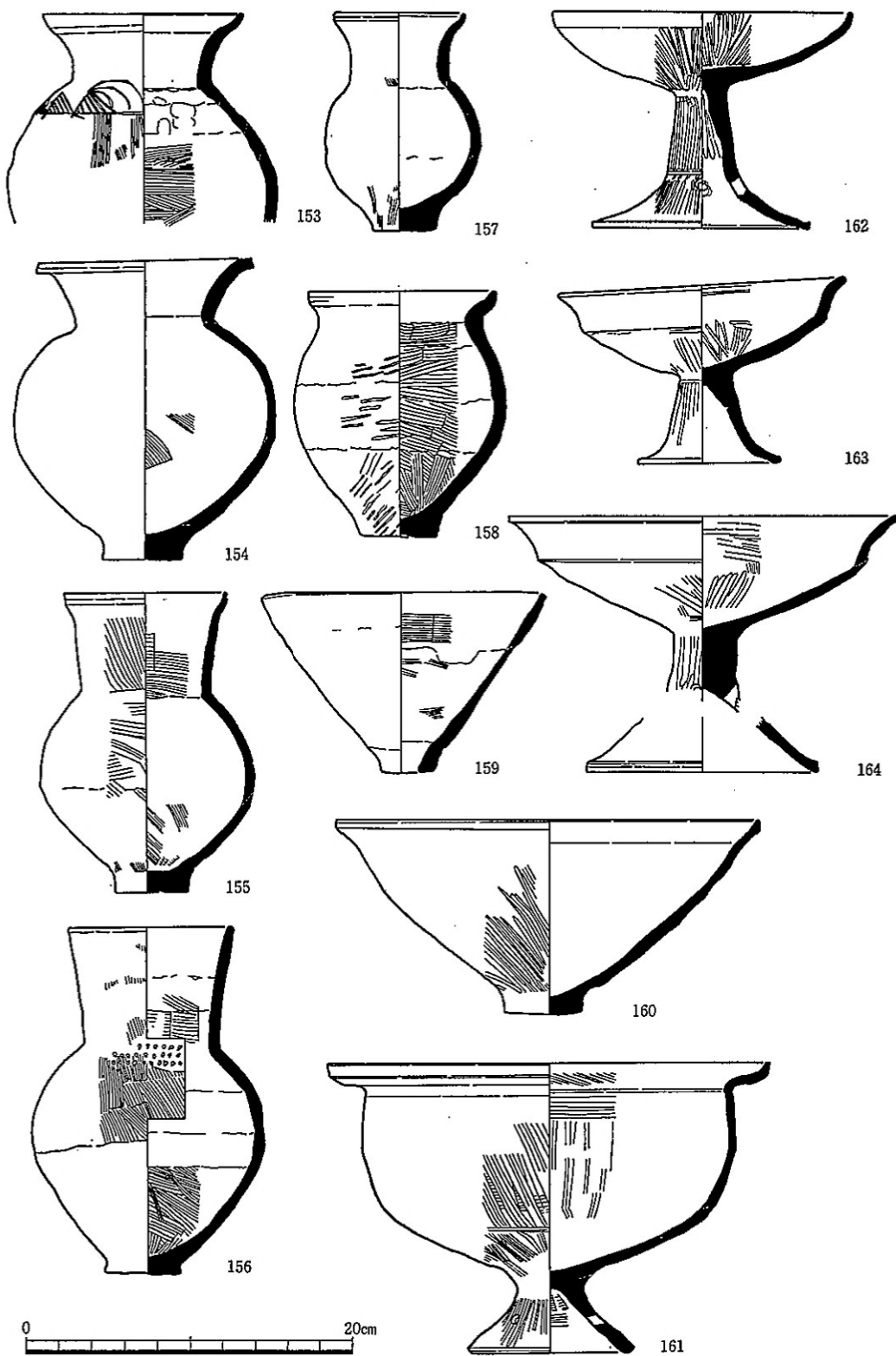
壺形土器(153・154) (153)は口径12.1cmを測る。やや受口状の口縁部をもつ。肩部に篋で鋸歯文と重弧文(?)を描く。外面は口頸部ヨコナデ、胴部ハケ、内面は口頸部ナデ、肩部指押え、胴部ハケ調整。(154)は口径13.0cm、器高18.3cmを測る。外面は器壁の荒れのため調整不明、内面はハケメが一部に残る。

長頸壺形土器(155~157) いずれも口頸部がやや短いものである。口縁部が直口するもの(156)とやや受口状になるもの(155・157)がある。

(156)は口径10cm、器高21cmを測る。肩部に刺突文を並べた記号文をもつ。外面は口頸部ヨコナデ、胴上半部ハケ、下半部雑なナデ、内面は口頸部ヨコナデとハケ、胴上半部ナデ、下半部ハケ調整。

(155)は口径9.8cm、器高18.2cmを測る。口縁端部に退化した凹線文が2条残る。外面は口頸部から胴上半部にかけてハケ状ナデ、下半部指押えで一部ハケ、内面は口頸部ヨコナデとハケ、胴部ハケ調整。(157)は口径8.1cm、器高13.2cmを測る。外面は口頸部ヨコナデで一部ハケ、胴上半部ナデ、下半部ハケ、内面は口頸部ヨコナデ、胴部ナデ調整。

鉢形土器(159~161) 鉢A(159)と外反する口縁部をもつ鉢B(160・161)があり、(161)



第138图 NR 3001出土土器实测图 (14)

は台付である。

(159) は口径17.5cm、現高11.1cmを測る。焼成前に底部穿孔を施す。外面は未調整、内面はハケ調整。

(160) は口径25.7cm、現高12.0cmを測る。口縁部の外反は弱い。外面はハケの後ヘラミガキ、内面は器壁の荒れ著しく調整不明。外面と内底面一部に薄く煤が付着する。(161) は復元口径27cm、現高17.7cmを測る。口縁部は外反して内湾している。脚部に3個透しを施す。外面は口縁部ヨコナデ、胴部ハケの後ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ、内面は口縁部ヘラミガキ、胴部ハケの後丁寧なヘラミガキ、脚部ハケ調整。

高環形土器 (162~164) 高環A₁ (162) と高環A₂ (163・164) がある。

(162) は口径18.2cm、器高13.1cmを測る。脚部に沈線2条と刺突文、裾端部に刻目を施す。脚部に透し4個を施す。外面はヘラミガキ、内面は坏部タテヘラミガキ、ヨコヘラミガキ、脚部しほり目が見られナデ調整。

(163) は口径17.5cm、器高11.4cmを測る。外面は口縁部ヨコナデ、胴部以下ヘラミガキ、内面は口縁部ヨコヘラミガキ、胴部ヘラミガキ、脚部若干のしほり目が見られヨコナデ調整。

(164) は口径23.6cmを測る。口縁端部に擬凹線文1条を施す。半中実の脚部に透し3個を施す。外面は口縁部ヨコナデの後一部ヘラミガキ、胴部以下ヘラミガキ、内面は口縁部ヨコヘラミガキ、胴部との境がハケ、胴部タテヘラミガキ調整。

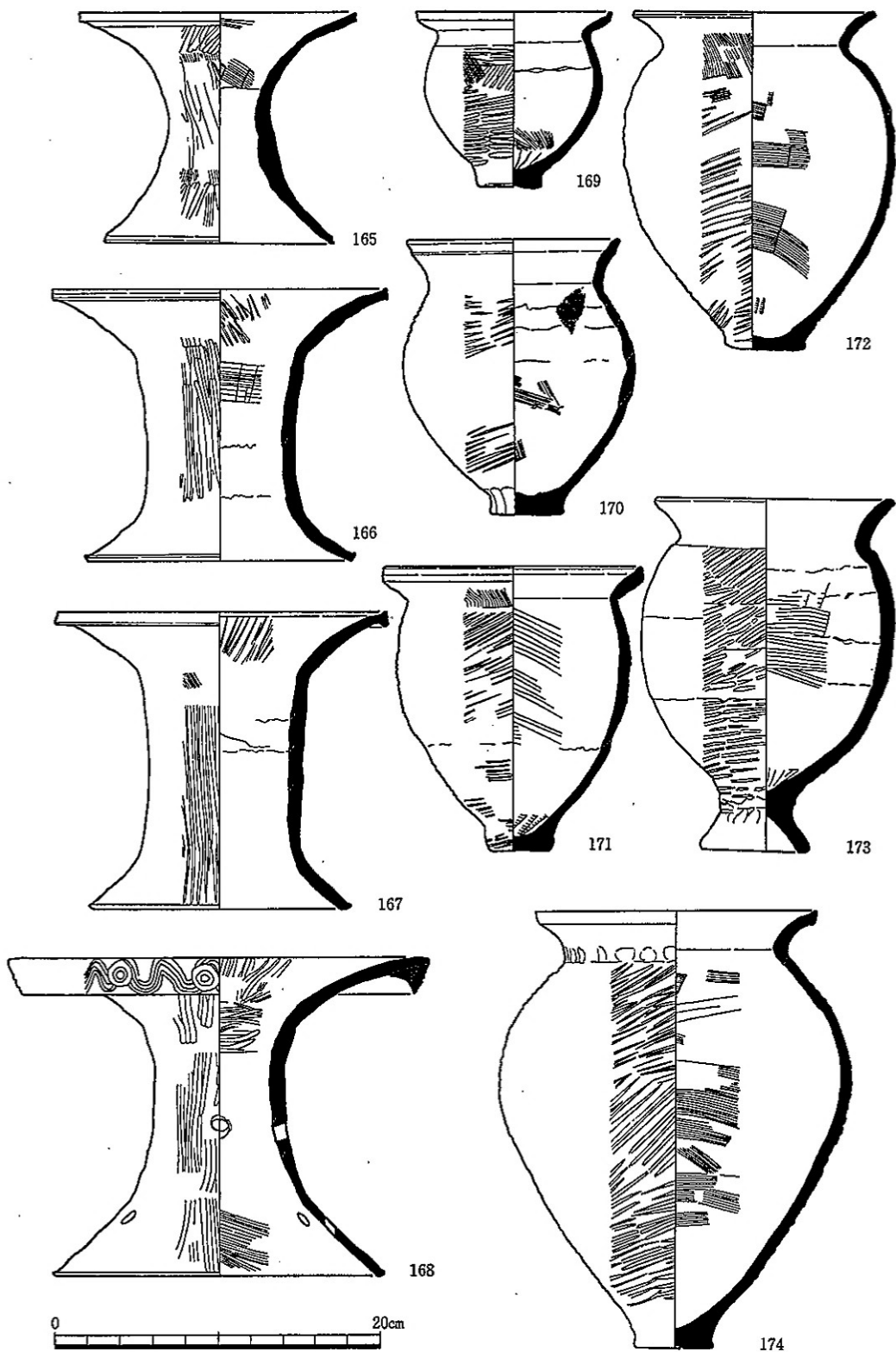
器台形土器 (165~168) 口縁部・胴部・裾部が曲線をなすもの (165・168) と口縁部・胴部・裾部がそれぞれ屈折して接合するもの (166・167) がある。

(165) は口径17.0cm、器高14.1cmを測る。口縁端部と脚裾端部に擬凹線文を施す(前者はナデによる)。外面はハケの後ヘラミガキ、内面は口縁部ハケの後ヘラミガキ、胴部指押え及びナデ、裾部ナデ調整。(168) は復元口径25.6cm、現高14.4cmを測る。拡張した口縁端部に4条の拙い波状文を施し、その上に円形竹管浮文を飾る。透しは上下2段にあり、上段は4個、下段は6個である。外面はヘラミガキ、内面は口縁部タテヘラミガキ、ヨコヘラミガキ、胴部ナデで一部ハケ、裾部ハケ調整。

(166) は復元口径20.4cm、現高16.5cmを測る。外面は口縁部・裾部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、内面は口縁部ヘラミガキ、胴部ハケと指押え、裾部ナデ調整。(167) は口径20.1cm、現高20.2cmを測る。口縁端部がやや肥厚する。外面は口縁部ハケの後ヨコナデ、胴部・裾部ヘラミガキ、内面は口縁部ヘラミガキ、胴部指押え、裾部ナデ調整。

甕形土器 (158・169~174) 小形のもの (158・169~171) と普通のもの (172・174) と台付のもの (173) がある。

(158) は壺のような形態をもつ。口径11.3cm、器高15.1cmを測る。外面はタタキで、その上を指で押えている。内面はハケ調整。外面に煤が付着する。(169) は口径11.8cm、器高10.8cmを測る。外面はタタキで一部ハケ、内面はナデで底部近くにハケ状の痕跡がある。2次焼成のた



第139图 N R 3001出土土器实测图 (14)

め、全体が赤く変色している。外面に煤が付着している。(170)は復元口径13cm、現高16.8cmを測る。外面は最大腹部がナデ以外タタキ、内面は上半部ナデ、下半部ナデと一部ハケ調整。内外面に煤が付着する。(171)は復元口径15.6cm、現高14.4cmを測る。外面は口縁部から肩部にかけてハケ、胴部タタキ、内面は荒いハケ調整。外面に煤が若干付着する。

(172)は復元口径14.6cm、現高20.6cmを測る。端部は丸いまま終わる。外面は口縁部から肩部にかけてハケ、胴部はタタキ、内面は口縁部ヨコナデ、肩部ハケ状ナデ、胴部ハケ調整。内外面に煤が付着する。(174)は口径17.3cm、器高26.7cmを測る。口縁端部を上方につまむ。この形態のものが多し。(173)は口径14.3cm、器高21.4cmを測る。外面はタタキ、内面はハケ調整。内外面に煤が付着する。

SD3067 溝中にぎっしりとつまった土器、コンテナ数にして60数杯の多大な量の土器の中から各器種毎に抽出した。小形化した壺・鉢形土器が多い。第Ⅴ様式後半の土器である。器種は壺・長頸壺・短頸壺・鉢・高坏・器台・蓋・甕形土器等がある。

壺形土器(175)は口径16cmを測る。やや受口状の口縁部をもつ。外面は頸部ハケの後ナデ、胴部雑なヘラミガキ、内面は口頸部ヨコナデ、胴部荒いハケ調整。

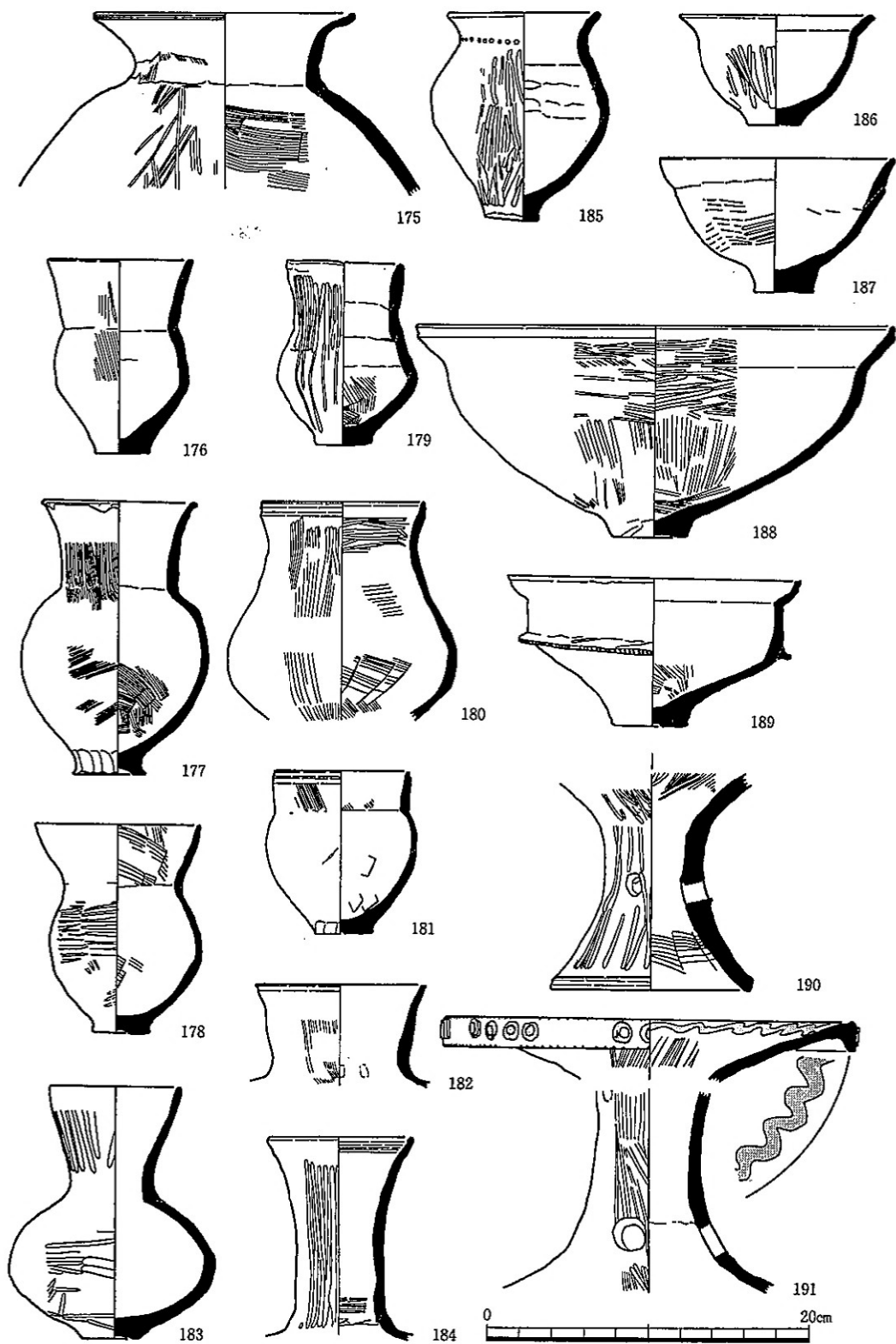
長頸壺形土器(176~180)いずれも長頸壺といい難いほど口頸部は短い、退化したものとみなした。(179・180)は胴部から口縁部にかけてなだらかに移行する。

(176)は口径8.8cm、器高12cmを測る。口頸部に篋で1本、線を施している。記号文と思われる。外面は口縁部ハケの後ヨコナデ、頸部ハケ、胴上半部荒いハケ、下半部指押え調整。内面は口頸部ハケの後ヨコナデ、胴部指押え及びナデ調整。(177)は口径9.2cm、器高16.9cmを測る。口縁端部に粘土のはみ出しがある。外面は口縁部ハケの後ヨコナデ、頸部から胴部ハケ、内面は口頸部ヨコナデ、胴部ハケ調整。(178)は復元口径10.1cm、現高12.9cmを測る。外面は口頸部ナデ、胴上半部タタキ、下半部タタキの後ナデ、内面は口頸部ハケ、胴上半部ナデ、下半部ハケ及びナデ調整。

(179)は口径7.2cm、器高11.4cmを測る。外面は口頸部から肩部ヘラミガキ、胴上半部ハケの後ヘラミガキ、下半部ナデの後一部ヘラミガキ、内面は口頸部から胴上半部ナデ、下半部ハケ調整。(180)は復元口径10cmを測る。口縁端部に擬似凹線文2条、沈線文1条を施す。外面はヘラミガキ、内面は口縁部から肩部ヘラミガキ、胴上半部ハケ調整。

短頸壺形土器(181・182・185) (181)は口径8.4cm、器高10cmを測る。口縁部に擬似凹線文2条を施す。外面は頸部ハケの後ナデ、肩部ハケ、胴部ナデ、内面は口縁部ハケの後ヨコナデ、胴部ナデ調整。(182)は口径10.6cmを測る。外面は口縁部ヨコナデ、頸部ハケの後ヨコナデ、内面は口頸部ヨコナデ、肩部指押え調整。(185)は口径9.6cm、器高12.9cmを測る。頸部に刺突文を飾る。外面は口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、内面は口縁部ナデ、胴上半部指押え及びナデ、下半部ナデで一部ハケ調整。

細頸壺形土器(183・184) (183)は口径8.1cm、器高15.6cmを測る。外面は口頸部タテヘラ



第140图 S D 3067出土土器实测图 (4)

ミガキ、胴上半部ヨコヘラミガキ、下半部雑なヘラミガキ、内面は口頸部指押え及びナデ、胴部は指押え及びナデ調整と思われる。(184)は復元口径10.6cmを測る。外面は口頸部ヘラミガキ、内面は口頸部ヨコナデで一部ハケメが残る。

鉢形土器(186~188)鉢A(187)と鉢B(186・188)がある。

(187)は口径14.4cm、器高8.3cmを測る。外面は口縁部ナデ、胴部タタキ、内面ナデ調整。

(186)は口径12cm、現高6.8cmを測る。外面は口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部アトランダムなヘラミガキ調整。(188)は口径29.2cm、器高13.2cmを測る。口縁端部に擬似凹線文(?) (ナデによる)を施す。外面は口縁部から胴上半部ハケの後ヨコヘラミガキ、下半部タテヘラミガキ、内面は口縁部から胴上半部ヨコヘラミガキ、下半部タテヘラミガキ調整。

手胎形土器(189)は復元口径18.1cm、現高9.1cmを測る。覆いのとれた様子を示している。凸帯部に刻目を施す。外面は指押え及びナデの雑な調整。内面は胴上半部ヨコナデ、下半部ハケ調整。

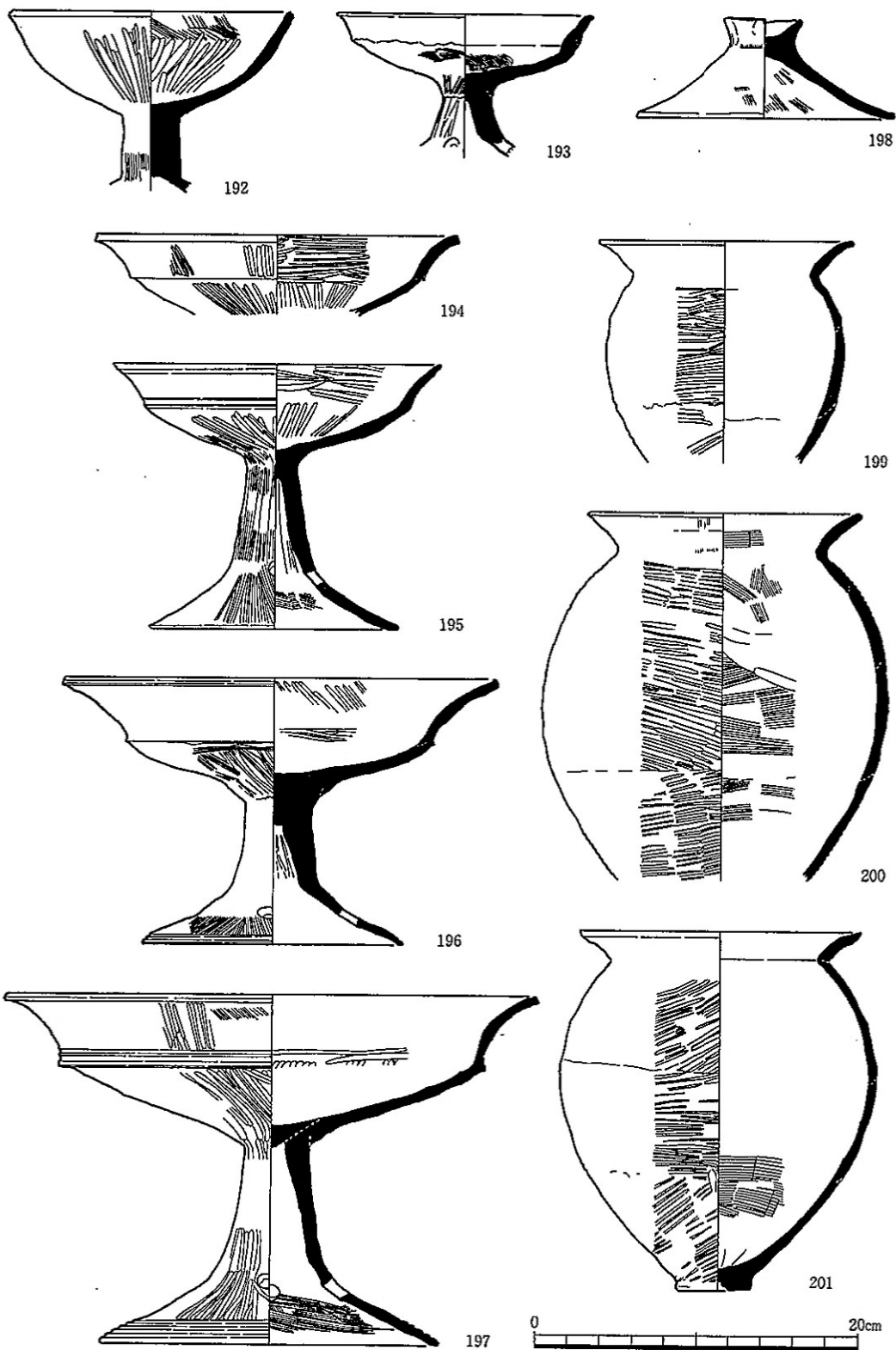
高環形土器(192~197)高環A₁(192)と高環A₂(193~197)がある。

(192)は復元口径17.6cmを測る。中実の脚である。外面は坏部ヘラミガキ、脚部ハケ及びナデ、内面は口縁部ハケ、胴部ヘラミガキ、裾部ナデ調整。

(193)は口径15.7cmを測る。脚部の透しを3個施す。外面は口縁部ヨコナデ、胴部ハケ、脚部ハケ状ナデ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部ハケ、脚部ナデ調整。(194)は復元口径22cmを測る。外面は口縁部ヨコナデの後、部分的にヘラミガキ、胴部ヘラミガキ、器壁の荒れ著しいが、口縁部ヨコヘラミガキ、胴部タテヘラミガキ調整。(195)は復元口径20.2cm、現高16.3cmを測る。口縁部上下に擬似凹線文を2条ずつ施す。脚部の透しは現存3個(本来は4個)である。外面は胴部ハケの後、全体の $\frac{1}{2}$ をヘラミガキ、脚部ハケ、内面は器壁の荒れ著しいが、坏部ヘラミガキ、脚部しほり目が見られ、裾部ハケとヨコナデ調整。(196)は復元口径26.4cm、現高16.4cmを測る。口縁部・裾部に擬似凹線文2条を施す。脚部の透しは4個である。外面は口縁部タテヘラミガキ、胴部ヨコヘラミガキ、細いタテヘラミガキ、脚部はヘラミガキと思われ、裾部ハケ調整。内面は口縁部タテヘラミガキ、胴部との境がヨコヘラミガキ、胴部ヘラミガキと思われ、脚部にしほり目が見られ、裾部ヨコナデ調整。外面に煤が付着している。(197)は復元口径23.4cm、現高21.5cmを測る。口縁部上下に1条と3条、裾端部に5条の擬似凹線文を施す。脚部の透しは4個である。外面は口縁部ヘラミガキとハケ、胴部・脚部ヘラミガキ、内面は口縁部ナデ、胴部との境がヨコヘラミガキ、胴部タテヘラミガキ、脚部ナデ、裾部ハケ調整。

器台形土器(190・191) どちらも口縁部・胴部・裾部がなだらかなカーブを描くものである。

(190)は底部12.4cmを測る。裾端部に擬似凹線文2条を施す。透しは3個である。外面は雑なヘラミガキ、内面は口縁部ヘラミガキ、胴部指押え及びナデ、裾部荒いハケ調整。(191)は



第141图 S D 3067出土土器实测图 (1/4)

復元口径25.3cmを測る。拡張した口縁部上下に刻目を施し、ベンガラを塗った円形竹管浮文を4個1組で8組施す。口縁部内面にベンガラで波状文を描く。透しは上下2段で下段は3個である。外面はヘラミガキ、内面は口縁部ヘラミガキ、胴部ナデ、裾部ハケ調整。

甍形土器 (199~201) 小形のもの (199) とそうでないもの (200・201) がある。後者は口縁端部を丸く終わるもの (200) と上方にややつまみあげるもの (201) がある。

(199) は復元口径 15.6cm を測る。外面は口縁部ヨコナデ、胴部タタキ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部ナデ調整。外面に煤が付着する。

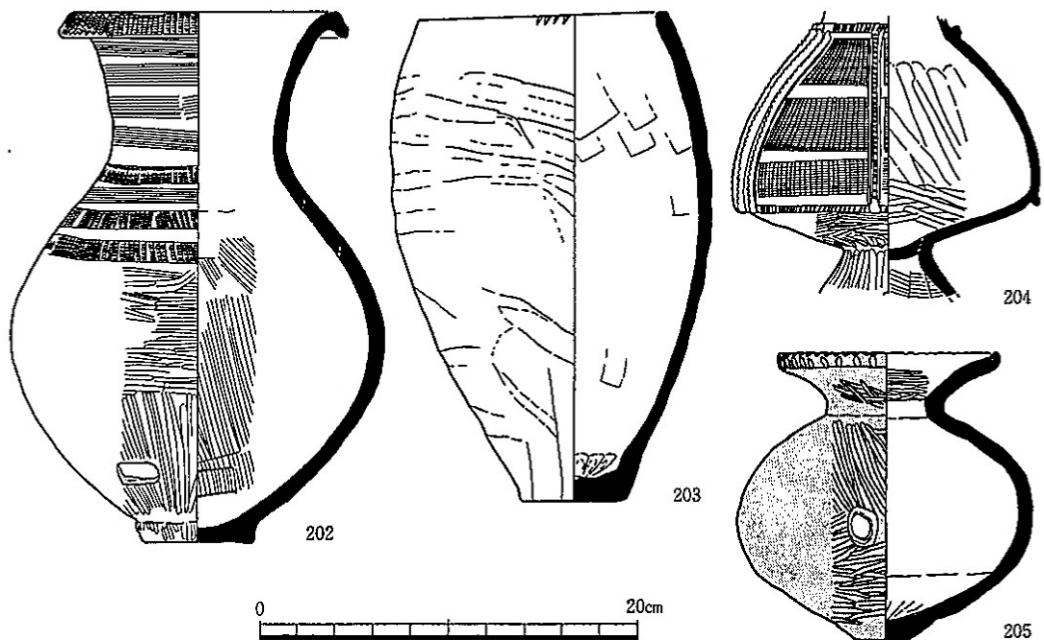
(200) は復元口径 16.5cm を測る。外面は口縁部ハケの後ヨコナデ、胴部タタキ、内面は口縁部ハケ、胴部ハケ及びナデ調整。外面と内面下半部に煤が付着する。

(201) は復元口径 17.4cm、現高22cmを測る。外面は口縁部ヨコナデ、胴部タタキ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部上半部ナデ、下半部ハケ調整。外面に煤が付着する。

その他の遺構出土土器

S D3081 (202) のみ実測可能な遺物である。(202) は復元口径 13.9cm、現高 27.9cm を測る壺形土器である。口縁端部に7条の簾状文を施し、途中から波状文にかわる。頸部に7条の直線文を4帯、肩部に7条の簾状文3帯と直線文1帯を施す。底部近くに焼成後、穿孔を施す。外面は胴部ヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ、内面は口頸部器壁の荒れ著しく調整不明、胴部ハケ調整。

S K3199 (203) は第Ⅲ様式の無頸壺形土器である。口径13.2cm、器高25.6cmを測る。口縁端部に一部刻目を施す。外面は未調整、内面はハケ状ナデ調整。外面は胴部全体に2次的に火を



第142図 その他遺構出土土器実測図 (1/4)

受けた痕跡があり、胴部中央部一部に煤が付着している。

SK3142 (204)のみ出土した。(204)は最大腹径15.7cmを測る台付水差形土器である。肩部と最大腹部に刻目を施した凸帯を施し、胴部に刻目を施した棒状浮文3条1組で5組施す。外面はヘラミガキ、内面は胴部ヘラ状ナデ、胴部ハケ調整。外面の最大腹径部一部分に煤状のものが付着している。

SK3124 (205)のみ出土した。(205)は口径11.4cm、器高15.2cmを測る。口縁端部に刻目を2帯施す。腹部に焼成後、穿孔を施す。外面はヘラミガキ、内面は口縁部ヘラミガキ、胴部ナデ調整。胴部内面を除く全体にベンガラを塗布している。

以上、今回は資料紹介ということで、長々と土器の説明してきた。各時期・各器種を取り揃えることを目的としたが、多量の遺物に加え、時間的余裕もなく不十分なものになってしまった。

亀井遺跡出土の土器は、長吉ポンプ場の分、平野川河川改修の分合わせて、資料としては充分すぎるものと思う。今後は、本報告に向けて、先学の型式分類・編年観を参考にしつつ、亀井遺跡出土土器の型式分類・編年観をうちたて、集落の推移を考えていきたい。(畑)

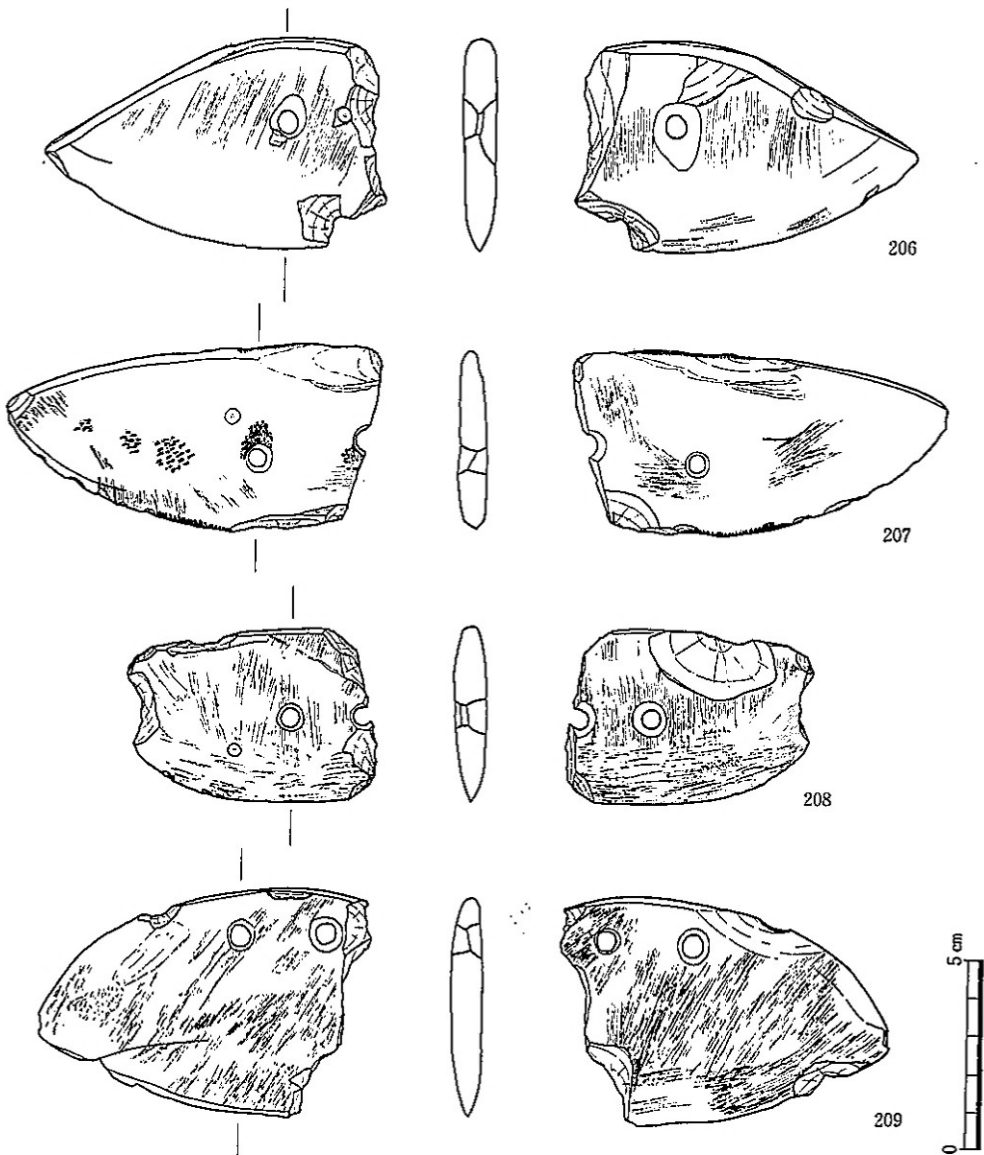
第2項 石器 (第143~156図)

石庖丁 (206~213) (206~208)は刃部が外湾刃で両刃のものである。(206)はSK3151出土。全体の2分の1程を欠いている。現存長8.7cm、幅5.5cm、厚さ0.8cmをはかる。平面形は杏仁形態で、端部のつくりがシャープである。中央部背寄りに紐孔が1つ残る。また、A面中央の折断部付近に未通の穿孔痕がある。紐孔周縁には、A、B面ともに紐擦れと考えられる摩滅痕が顕著に認められる。石質は少しホルンフェルス化したシルト質泥岩である。(207)はSD3077出土。全体の2分の1弱を欠いている。現存長9.7cm、幅4.8cm、厚さ0.75cmをはかる。平面形は杏仁形態であるが、背部はかなり直線的である。刃は端部側3分の1程を除き刃潰れが著しい。また、背部中央付近は2次的に敲打された可能性が強い。中央刃部寄りに2つの紐孔があるが、1つは折断部にかかっている。A面左側紐孔の背寄りに未通の穿孔痕が1つある。この紐孔の背側には2次的な敲打痕が認められる。石質は玄武岩である。(208)はSX3010出土。両端部を欠いており、全体の3分の1程が残っているにすぎない。現存長6.2cm、幅4.6cm、厚さ0.8cmをはかる。平面形は(207)に近い。中央付近に紐孔が2つあるが、1つは切断部にかかっている。石質は流紋岩である。

(209)は刃部が外湾刃で片刃のものである。SD3008出土。全体の2分の1程を欠いている。現存長8.0cm、幅6.0cm、厚さ0.8cmをはかる。平面形は杏仁形態である。刃部は両刃気味であるが、刃部稜線はA面でのみ認められる。中央背寄りに紐孔が2つある。石質は石墨片岩である。

(210~213)は刃部が直線刃ないし内湾刃で片刃のものである。平面形は(211)を除き半月形態である。(210)はSK3135出土。全体の2分の1程を欠いている。現存長8.1cm、幅3.8cm、厚さ0.8cmをはかる。刃部には部分的に刃こぼれがみられる。背部には全体に2次的な敲打痕が顕著にみられる。中央やや背寄りに2つの紐孔があるが、1つは折断部にかかっている。紐孔の

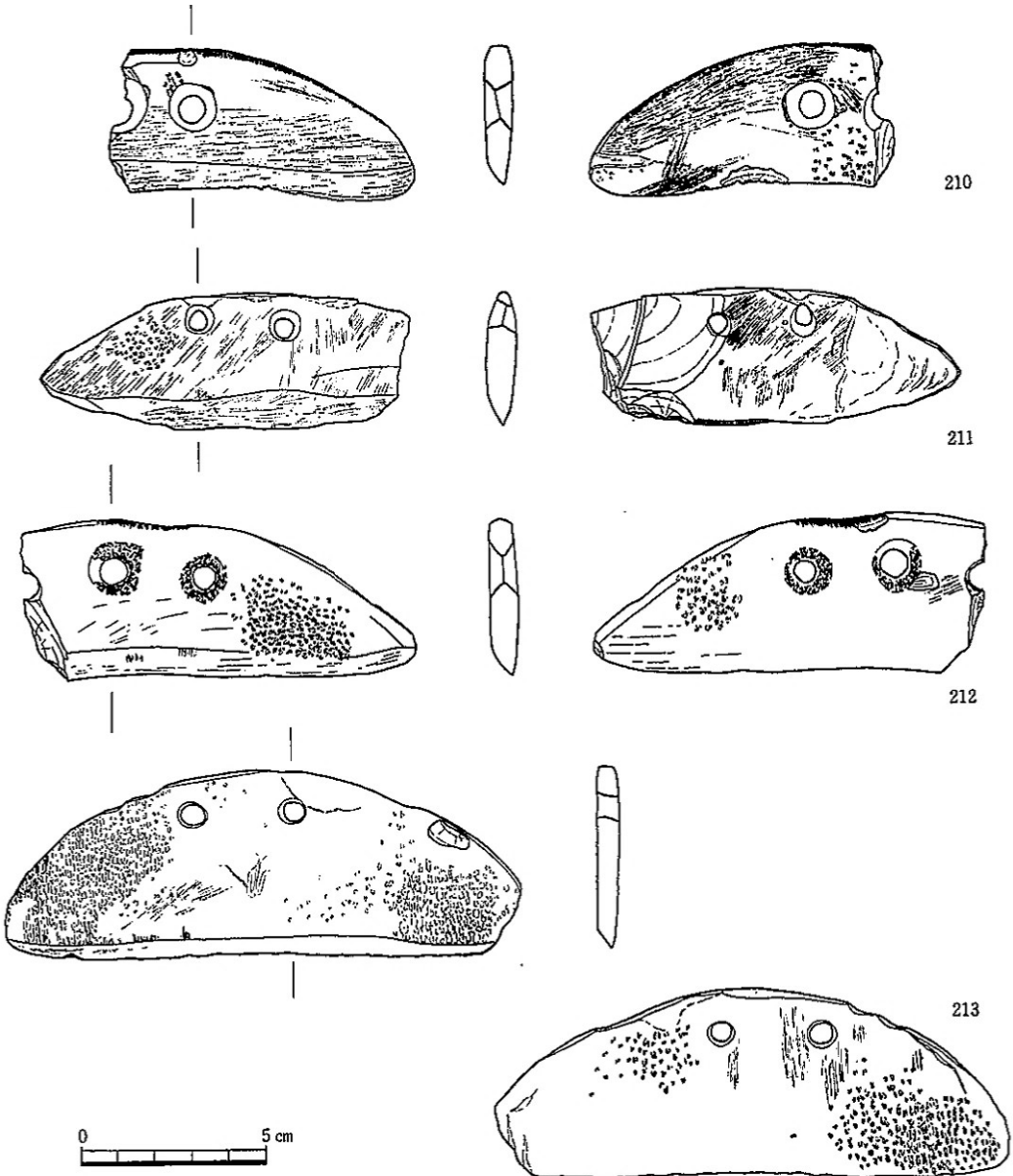
周縁には紐擦と考えられる摩滅痕が認められる。石質は緑泥片岩である。(211)はSD3012出土。全体の3分の1程を欠いている。現存長9.6cm、幅3.7cm、厚さ0.8cmをはかる。平面形は杏仁形態に近いが、刃部は直線的である。中央やや左側の背寄りに2つの紐孔がある。A面左側の紐孔の背側が背部近くまで摩滅している。A面端部近くには2次的な敲打痕が認められる。石質は頁岩である。(212)はSK3060出土。全体の3分の1程を欠いている。現存長10.7cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmをはかる。背部中央付近は長さ2.5cm程にわたって2次的な敲打によって潰れている。中央背寄りに3つの紐孔がある。紐孔側面には敲打痕が認められる。A・B面とも端部近くに2次的な敲打痕がみられる。石質は緑泥石石墨片岩である。(213)はSK3060出土。長さ13.7



第143図 石器実測図 石庖丁(1/2)

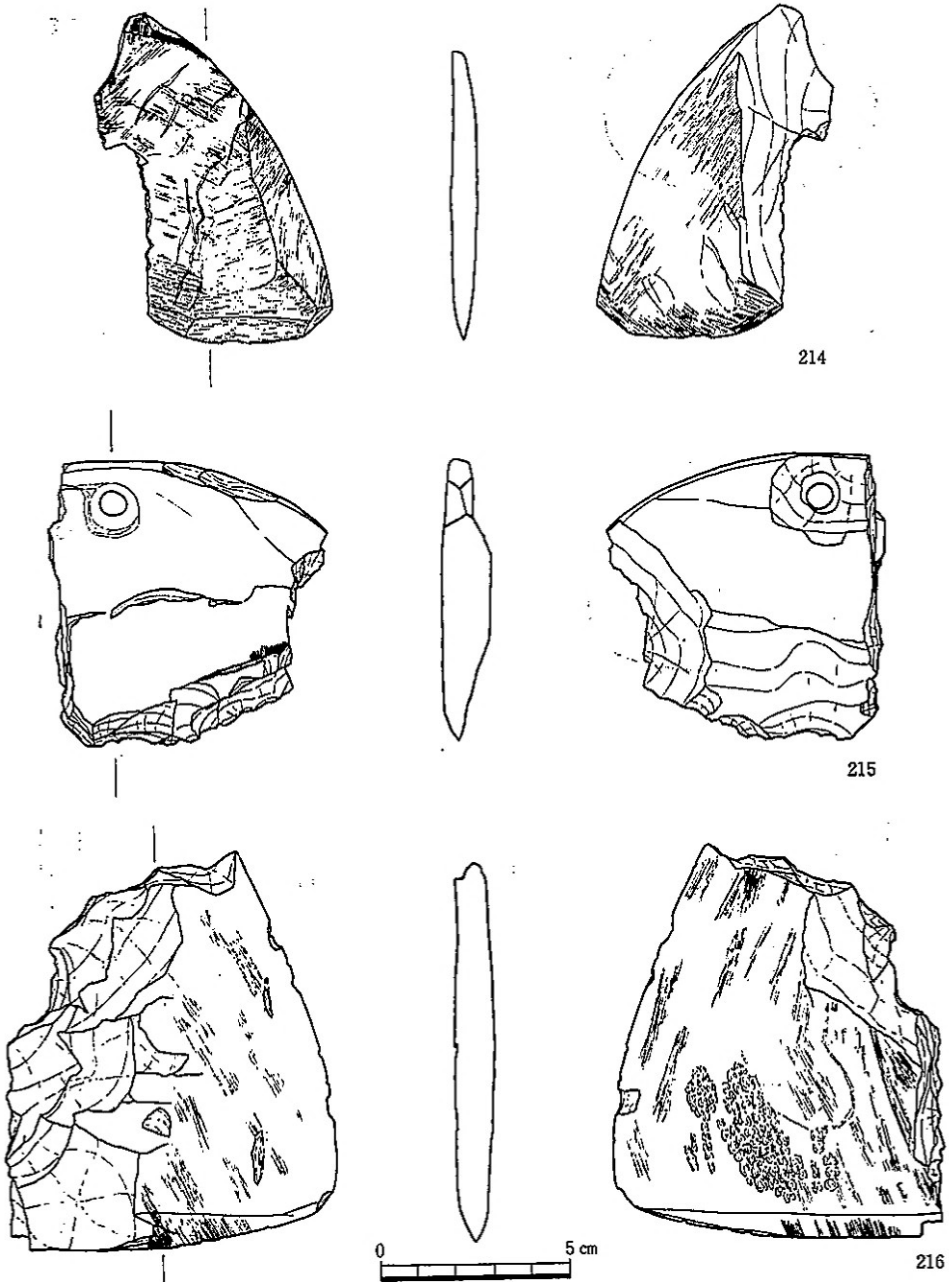
cm、幅5.1cm、厚さ0.6cmをはかる完形品である。刃部には刃こぼれが目立つ。中央背寄りに2つの紐孔がある。紐孔周縁には紐索と考えられる摩滅痕が認められる。A・B面とも端部近くで2次的な敲打痕が顕著である。石質はホルンフェルスである。

大形石庖丁 (214~216) 3点とも小破片である。(214)はS D3074出土。現存長4.9cm、幅8.0cm、厚さ0.7cmをはかる。全体の3分の2以上を欠いている。刃部は外湾し、背部は弧状を呈する。A面刃部には刃と平行する方向の擦痕がみられるのに対し、B面刃部には刃と直交する方向の擦痕が残っている。擦痕の状況からは片刃と考えられる。石質は頁岩である。(215)はS K

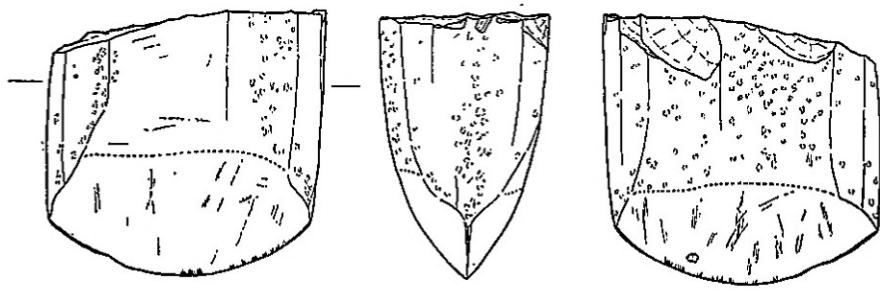


第144図 石器実測図 石庖丁 (1/2)

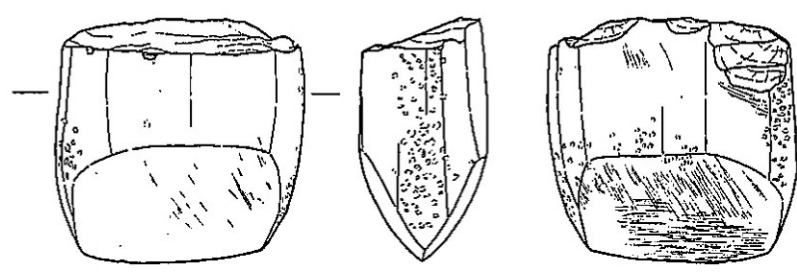
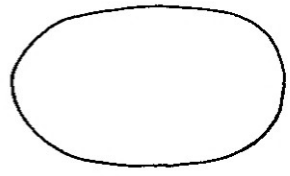
3060出土。紐孔を含む背部の小片である。現存長7.2cm、幅7.4cm、厚さ1.3cmをはかる。中央背寄りに紐孔がある。石質は緑泥石石墨片岩である。(216)はNR3001出土。現存長8.7cm、幅10.0cm、厚さ1.0cmをはかる。刃部は外湾し、背部は弧状を呈する。刃部は両刃で刃こぼれが目立つ。背部も平坦面とはならず刃部のように鋭利につくられている。B面刃部寄りに2次的な敲打痕がみられる。石質は緑泥石石墨片岩である。



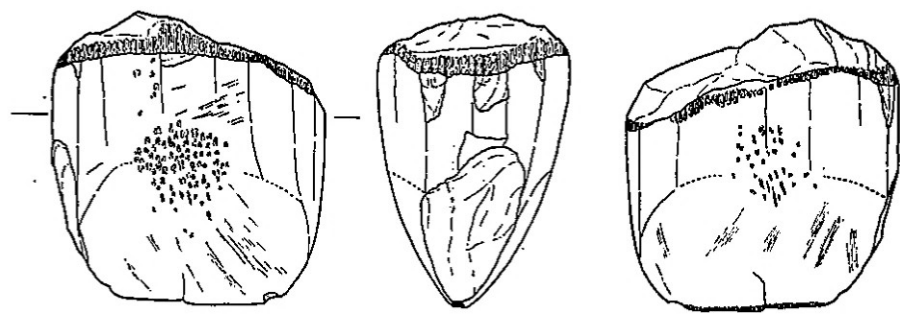
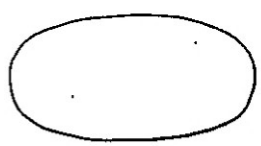
第145図 石器実測図 石庖丁(1/2)



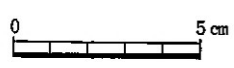
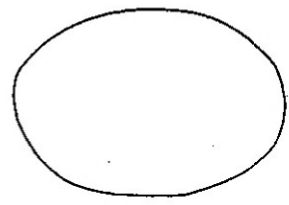
217



218



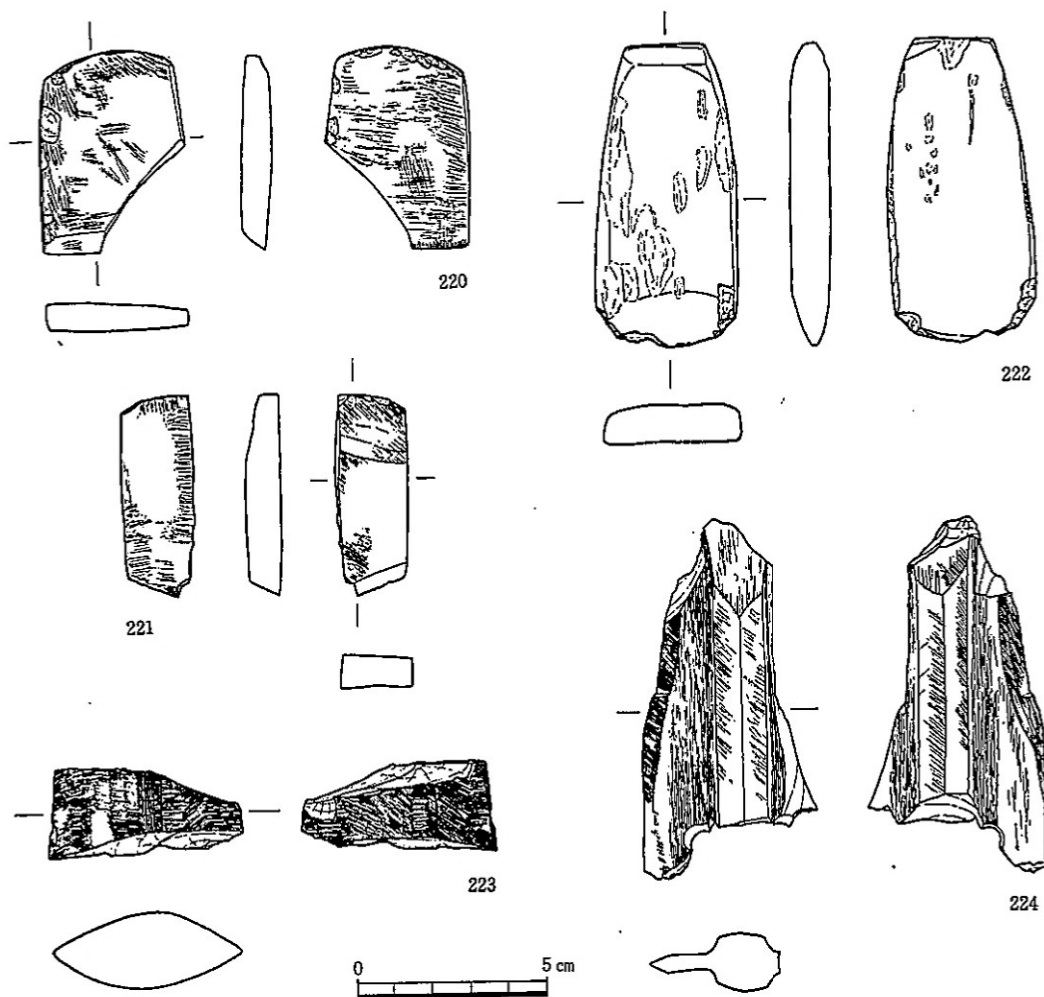
219



第146图 石器实测图 磨製石斧 (3/4)

大型蛤刃石斧(217~219) (217)はSD3104出土。基部側2分の1程を欠いている。現存長6.8cm、幅7.2cm、厚さ4.5cmをはかる。刃部と体部の境があまり明確ではないが、A面のほうがB面よりも刃部が長い。刃先はやや摩滅しているが、刃潰れ等は認められない。体部の敲打痕はすべて1次的なものである。石質は輝緑岩である。(218)はSK3060出土。基部側2分の1程を欠いている。現存長6.4cm、幅6.5cm、厚さ3.3cmをはかる。刃部の長さはA・B面でほぼ等しい。刃先には摩滅痕、刃潰れ等はほとんど認められない。体部の敲打痕はすべて1次的なものである。石質は輝緑凝灰岩である。(219)はSD3012出土。基部側の2分の1程を欠いている。現存長7.0cm、幅7.2cm、厚さ5.1cmをはかる。刃部と体部の境はあまり明確でないが、刃部の長さはA・B面でほぼ等しい。刃先は敲打により全面潰れている。体部の折断面周縁及び体部と刃部の境付近にも2次的な敲打痕が認められ、とくに、折断面では細かく丹念な敲打が行なわれている。半折し敲石に転用されたものと考えられる。石質は変輝緑岩である。

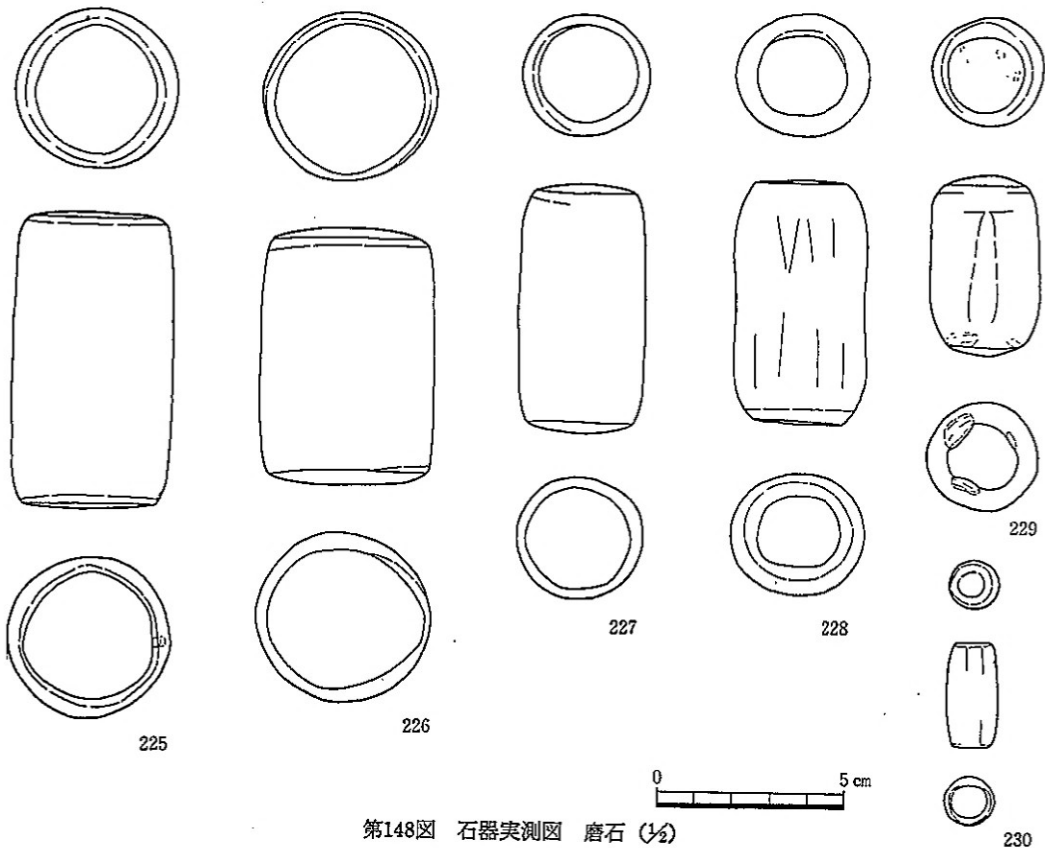
扁平片刃石斧(220~222) (220)はSD3104出土。刃部の2分の1程を欠いている。長さ



第147図 石器実測図 磨製石斧・磨製石剣 (1/2)

5.2cm、幅3.8cm、厚さ0.8cmをはかる。刃先はやや摩滅している。体部はA・B面ともよく研磨されているが、A面の背寄りの1部、B面中央部の1部に未研磨部分が残る。基端は外湾している。石質はホルンフェルスである。(221)はNR3001出土。縦に割れ全体の2分の1程を欠いている。長さ5.2cm、現存幅1.9cm、厚さ0.9cmをはかる。刃部は左下がり、基端は左上がりとなっている。刃先は刃こぼれが著しい。A面中央背寄りに大きな未研磨部分が残る。石質はシルト岩である。(222)はSD3055出土。刃先がすべて剝離しているが、ほぼ完形である。長さ8.0cm、幅3.2cm、厚さ1.0cmをはかる。基端は平坦につくられており、基端近くのA・B面が基端に続く傾斜面となっている。B面の刃部側も刃先に向かって緩く湾曲している。石質は石墨片岩である。

磨製石剣(223・224) (223)は刃部の小破片である。NR3001出土。現存長2.3cm、幅5.1cm、厚さ2.05cmをはかる。A・B面ともに横及び斜め方向の細かな擦痕が顕著に認められるが、A面の一部に未研磨部分を残している。石質は泥岩である。(224)はSE3016出土。有樋式石剣の破片である。現存長8.1cm、同幅4.6cm、厚さは刃身で0.5cm、鏑で1.6cmをはかる。関側の折断面には2個の透孔があり、鏑の先端部は斜めに磨り落されている。また、刃身も途中から鉦側に向かって幅を狭めており、刃先の途中には1カ所に抉り込みがある。樋と鏑の先端部には縦方向の、刃先と鏑には斜め方向の細い擦痕が認められる。鉦側は再加工されている可能性があ

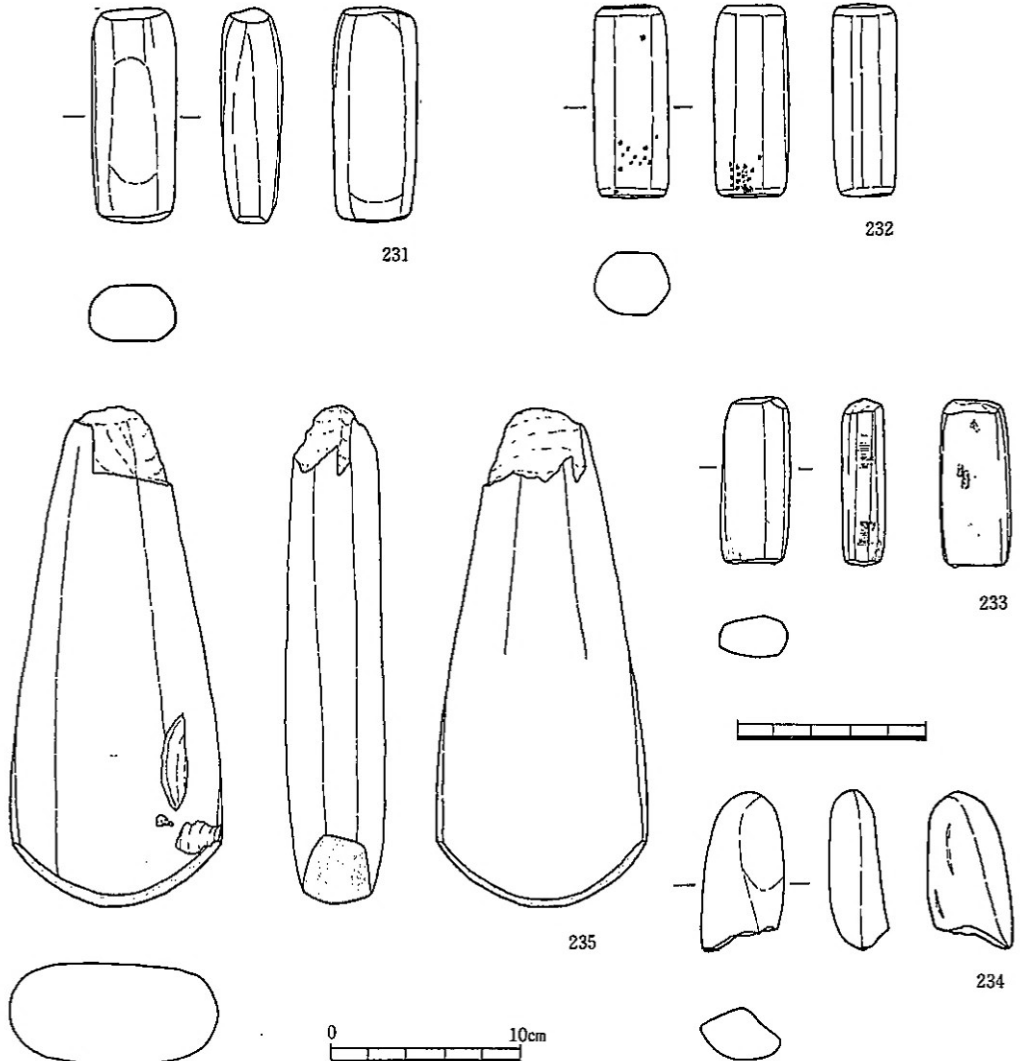


第148図 石器実測図 磨石 (1/2)

る。

磨石 (225~234) 用途不明石器 (235)、砥石 (236、237) とともに SK3165 から一括出土した。すべて完形品である。その形態から、円柱状のもの (225~230)、やや扁平な柱状のもの (231~233)、不整形のもの (234) の3種に分類できる。(225~228) の4例について、いずれも一方の端面のみ研磨による光沢が認められないという共通点があり、この面が他のものに擦られた可能性が考えられる。他の例にはそのような特徴は認められないが、ここでは一括して磨石として扱っておきたい。

円柱状のものなかでは、(225) が長さ7.3cm、径4.2~4.3cm、(226) が長さ6.8cm、径4.5~4.7cmをはかり、最も大形である。(227)、(228) は、それよりやや小形で、(227) は長さ6.6cm、径3.4cm、(228) は長さ7.0cm、径3.2~3.6cmをそれぞれはかる。(228) は中央部がわずかに窪んでいる。(229) は長さ4.8cm、径2.9cmをはかり、端面が前4例にくらべ丸味をもっている。



第149図 石器実測図 磨石・用途不明石器 (1/2・1/4)

(230) は円柱状のものなかでは最も小形で、長さ2.8cm、径1.3~1.4cmをはかるにすぎない。

やや扁平な柱状を呈する(231~233)では、(231)が長さ5.7cm、幅2.2cm、厚さ1.5cm、(232)が長さ5.5cm、幅2.0cm、厚さ1.7cmと相似た大きさであるのに対し、(233)は長さ4.4cm、幅1.8cm、厚さ1.1cmをはかり、前2例よりやや小形である。この3例では、平面、側面に研磨によって平坦面がつくられている。

(234) は自然礫のような形態であるが、割れ口部分も平滑になっており、他の例と同様に完成品と考えられる。長さ3.8cm、幅2.2cm、厚さ1.4cmをはかる。

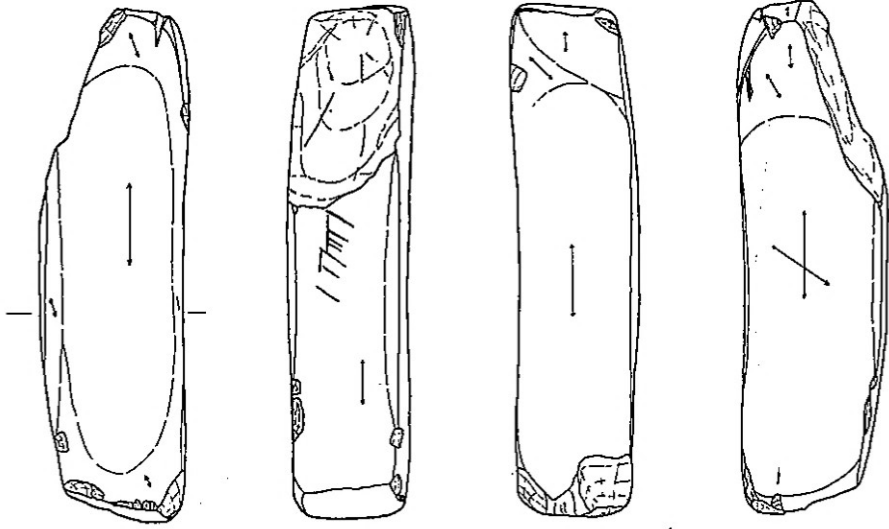
なお、上述の磨石の石質は、(234)がチャートである以外は、すべて和泉砂岩である。

用途不明石器(235) SK3165出土。一方の端部をわずかに欠いているが、現存長26.1cm、最大幅11.0cm、厚さ5.2cmをはかる。平面形は幅の狭い扇形を呈する。全体に丁寧に研磨されて仕上げられており、幅の広いほうの端面と平面、側面とは明瞭な稜によって分けられている。この端面には一面に朱が塗布されている。全体の形状から、本来の用途としては幅の広いほうの端面を使用面とする磨石のようなものと推定されるが、その面に朱の塗布されていることからすれば、儀器化したものと考えられる。石質は和泉砂岩である。

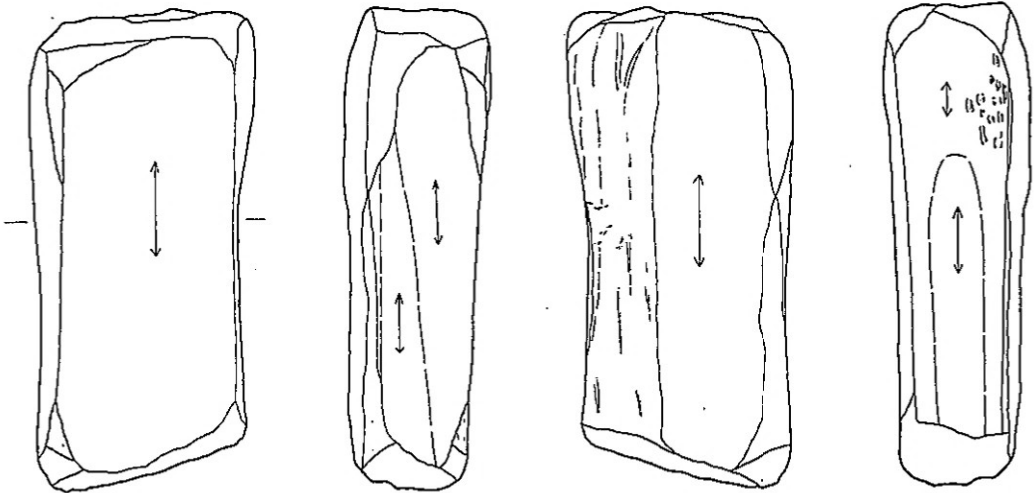
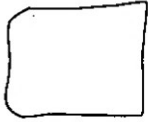
砥石(236~239) (236・237)はSK3165出土。2例ともほぼ完形である。(236)は長さ13.6cm、幅3.6cm、厚さ3.0cmをはかり、長方体状を呈する。使用面は5面で、平面・側面はいずれも凹面となっている。使用面すべてに強い擦痕が残る。石質はシルト岩である。(237)は長さ12.3cm、幅5.9cm、厚さ3.0cmをはかり、長方体状を呈する。使用面は4面で端面は使われていない。使用面のうち3面はわずかに凹面となっているが、擦痕はいずれの面も弱い。石質は片麻岩である。(238)はSD3069出土。平面楕円形状の石材の一方の平面だけを利用しては、縦に割れて一方の側面を欠いている。長さ16.2cm、現存幅9.0cm、厚さ5.7cmをはかる。使用面は凹面となっており、擦痕が顕著に残る。石質は含ザクロ石安山岩である。(239)はSD3009出土。ほぼ完形である。平面形は五角形を、断面形は長方形を呈する。長さ14.1cm、幅7.0cm、厚さ4.4cmをはかる。使用面は3面でいずれも凹面となっている。使用面には強い擦痕が残る。石質は礫灰岩である。

叩石(240・241) 2例とも平面形が長楕円形状を呈する河原石の長軸の一端に敲打痕を残すものである。(240)はSD3104出土。長さ13.4cm、径3.0~4.3cmをはかる。(241)はSD3074出土。長さ12.7cm、径3.5~5.6cmをはかる。石質は2例とも和泉砂岩である。

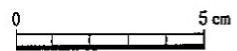
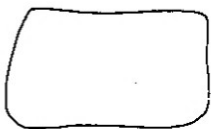
調整石器(242~245) 扁平な河原石の側縁に長軸と直交する方向の擦痕を残すものを調整石器として分類した。ただし、(242)は石庖丁を転用したものである。(242)はSD3012出土。長さ10.7cm、幅2.7cm、厚さ0.8cmをはかる。刃部、背部ともに著しく擦潰れており、平面の刃部寄りには斜め方向の強い擦痕が残る。また、平面には2次的な敲打痕も認められる。石質は緑簾石緑泥岩である。(243)はSK3143出土。長さ9.5cm、幅5.0cm、厚さ1.9cmをはかる。両側縁に



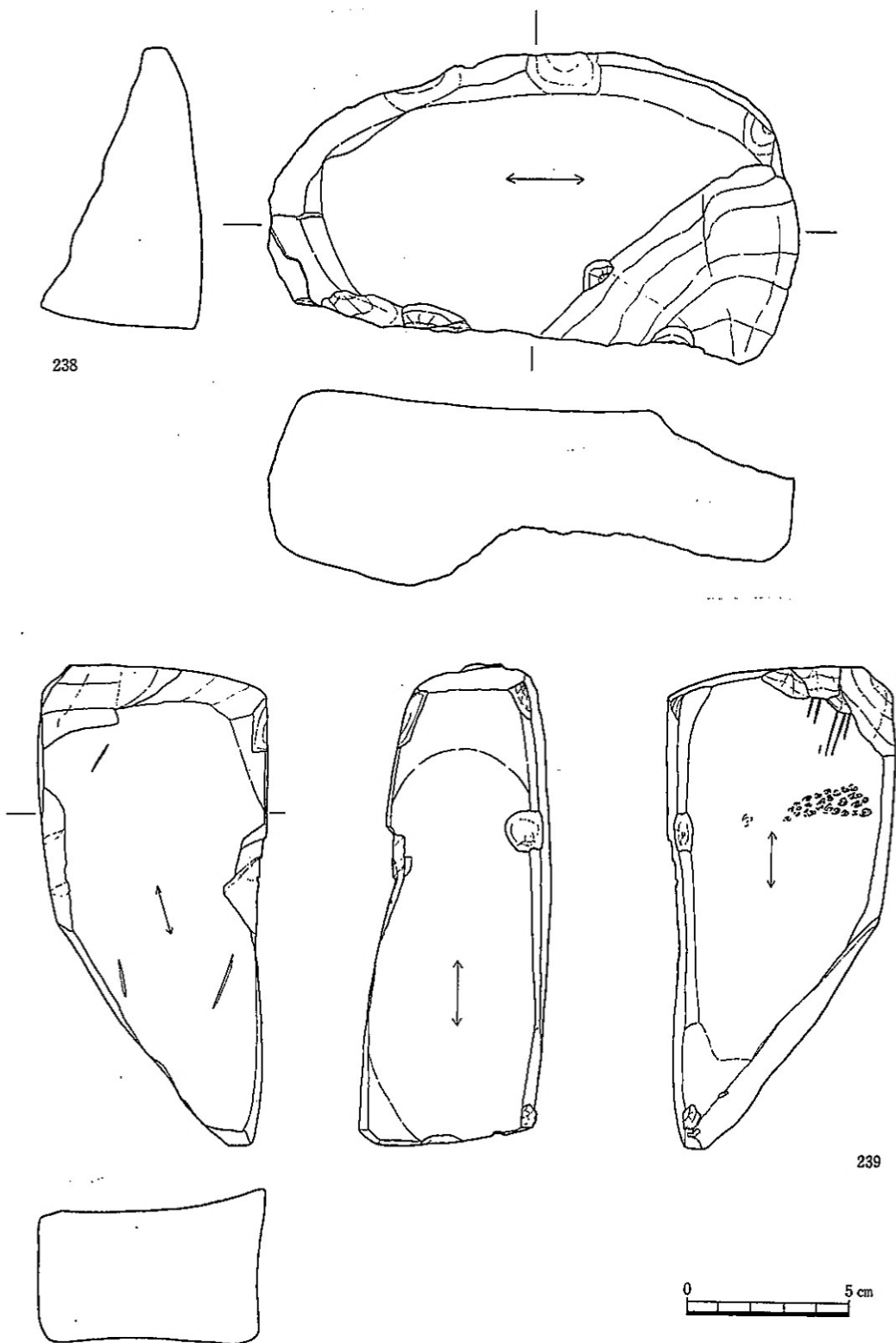
236



237



第150图 石器实测图 砥石 (1/2)



第151図 石器実測図 砥石 (分)

擦痕が残り、使用面は平坦化している。(244)はSK3113出土。長さ11.1cm、幅5.6cm、厚さ2.3cmをはかる。両側縁に擦痕が残り、使用面は平坦化している。また、平面にも一部に擦痕が残り、敲打痕の認められるところもある。(245)はSD3012出土。長さ9.4cm、幅5.7cm、厚さ2.5cmをはかる。一方の側縁にのみ擦痕が残り、他方の側縁には研磨痕が認められる。また、一方の平面の中央部は敲打により窪んでいる。以上の3例の石質は、いずれも和泉砂岩である。(高島)

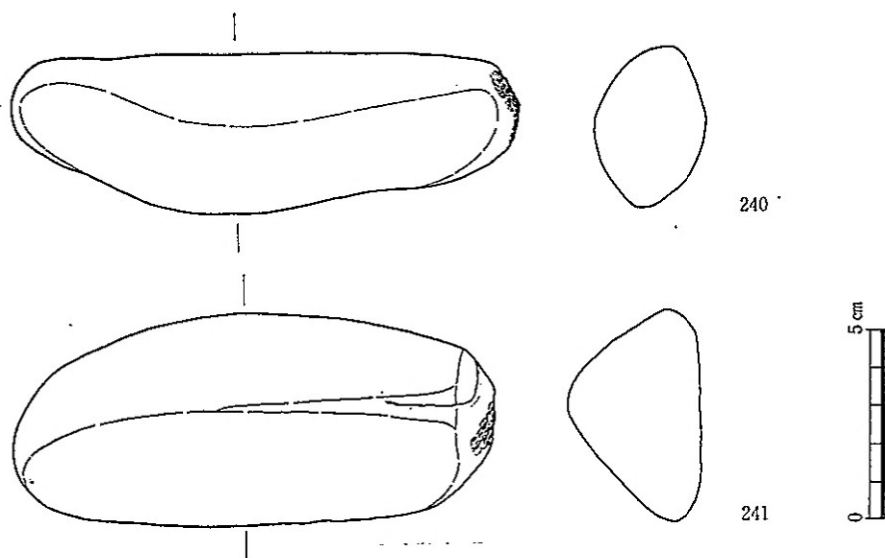
石鏃(246~251) 円基無茎式、凸基有茎式、凹基有茎式等の石鏃がある。⁽⁴⁾

円基無茎式(246・247) (246)はSK3167より出土した。長さ2.9cm、幅1.55cm、厚さ0.4cmを測り、両側縁より緻密な調整剝離を施している。石質はサヌカイトである。(247)はSE3017より出土した。長さ4.0cm、幅1.65cm、厚さ0.45cmを測る。両側縁より緻密な調整剝離を施しているが、b面中央には素材の剝離面を残している。石質はサヌカイトである。

凸基有茎式(248~249) (248)はNR3003より出土した。長さ5.55cm、幅1.9cm、厚さ0.45cmを測る。両側縁より緻密な調整剝離を施しているが、b面中央には素材の剝離面と考えられる、ネガティブな剝離面を残している。石質はサヌカイトである。(249)は包含層上面P-24より出土した。長さ5.3cm、幅1.7cm、厚さ0.5cmを測る。両側縁より緻密な調整剝離を施している。石質はサヌカイトである。

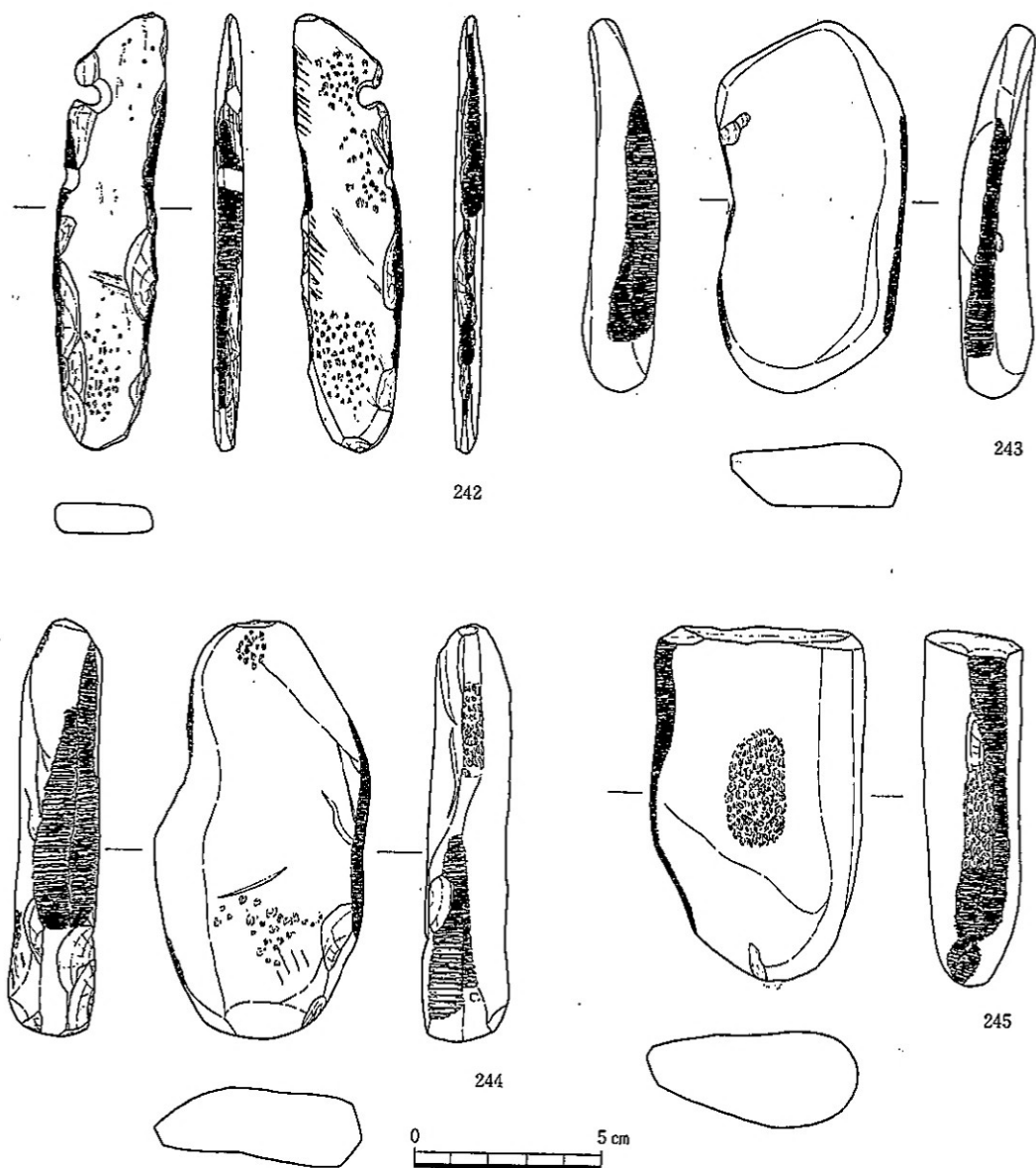
凹基無茎式(250~251) (250)はSD3008より出土した。長さ4.0cm、幅1.8cm、厚さ0.65cmを測るが、先端及び逆刺先端を、わずかに欠損している。調整は両側縁より緻密な調整剝離を施している。(251)はSK3157より出土した。長さ3.3cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。両側縁より緻密な調整剝離を施している。石質はサヌカイトである。

石錐(252~255) 棒状の頭部下端がすぼまって錐になるタイプ(252)、不整形な頭部の下端



第152図 石器実測図 叩石(1/2)

を調整して錐部をつくり出すタイプ(253)、不整形の頭部に棒状の錐部がつくタイプ(254~255)がある。(252)は、SK3154より出土した。長さ4.7cm、基部幅1.25cm、錐部幅0.5cm、基部厚さ0.4cm、錐部厚さ0.4cmを測る。両側縁の調整剝離により、先端部を棒状に突出させている。またa・b両面の基部には、各々ネガティブ・ポジティブな素材の剝離面を残している。石質はサヌカイトである。(253)は、SD3074より出土した。長さ3.55cm、基部幅1.65cm、錐部幅0.45cm、基部厚さ0.6cm、錐部厚さ0.35cmを測る。両側縁より調整剝離を施し、錐部を突出させている。b面には素材の剝離面を残している。石質はサヌカイトである。(254)は、Cトレンチ、fライン(38区)Ⅷ層より出土した。長さ4.3cm、基部幅1.8cm、錐部幅0.4cm、基部厚さ1.05cm、

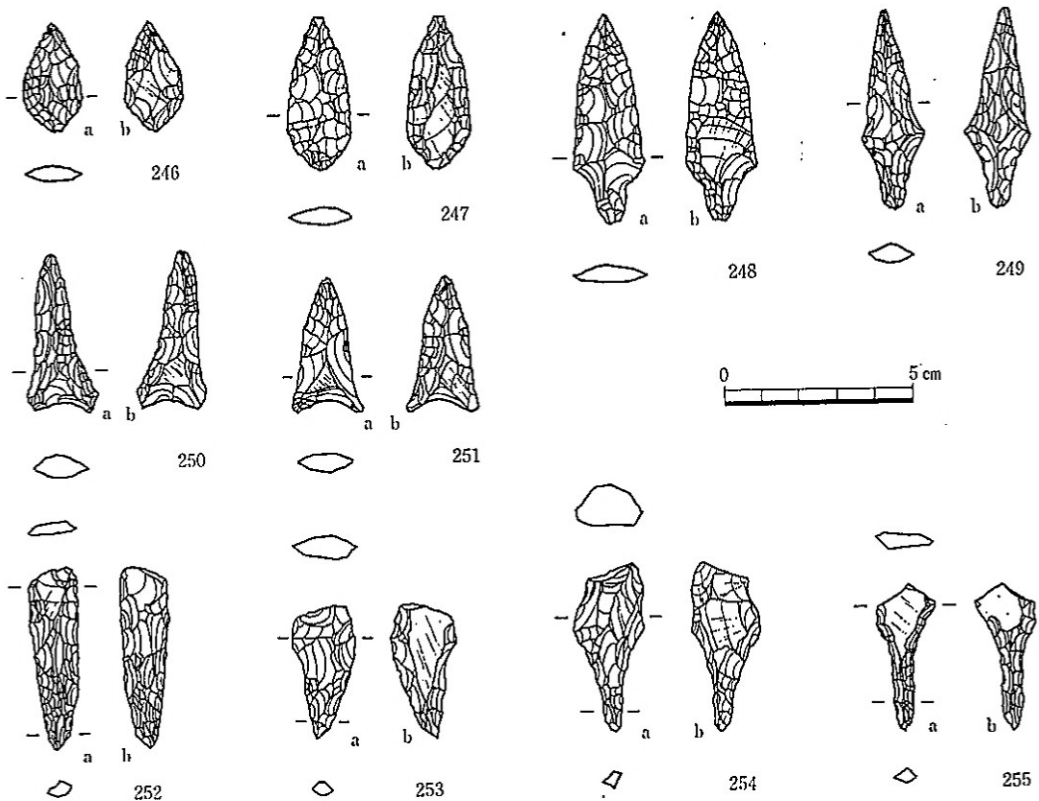


第153図 石器実測図 調整石器 (1/2)

錐部厚さ0.5cmを測る。肉厚な剝片を素材に用い、両側縁よりの調整剝離により錐部を棒状に突出させている。b面中央には素材の剝離面を残している。石質はサヌカイトである。(255)は、SK3148より出土した。長さ3.9cm、基部幅1.5cm、錐部幅0.5cm、基部厚さ0.4cm、錐部厚さ0.4cmを測る。両側縁よりの調整剝離により錐部を棒状に突出させている。そしてa・b両面の基部には各々ネガティブ・ポジティブな素材の剝離面を残している。石質はサヌカイトである。

石槍 (256~259) (256)、(257) は、石槍の先端部である。(256)は、SD3011より出土した。現長6.6cm、幅3.5cm、厚さ1.5cmを測り、両側縁より緻密な調整剝離を施している。石質はサヌカイトである。(257)は、SD3074より出土している。現長9.5cm、幅2.8cm、厚さ1.4cmを測る。両側縁より緻密な調整剝離を両面に施している。石質はサヌカイトである。

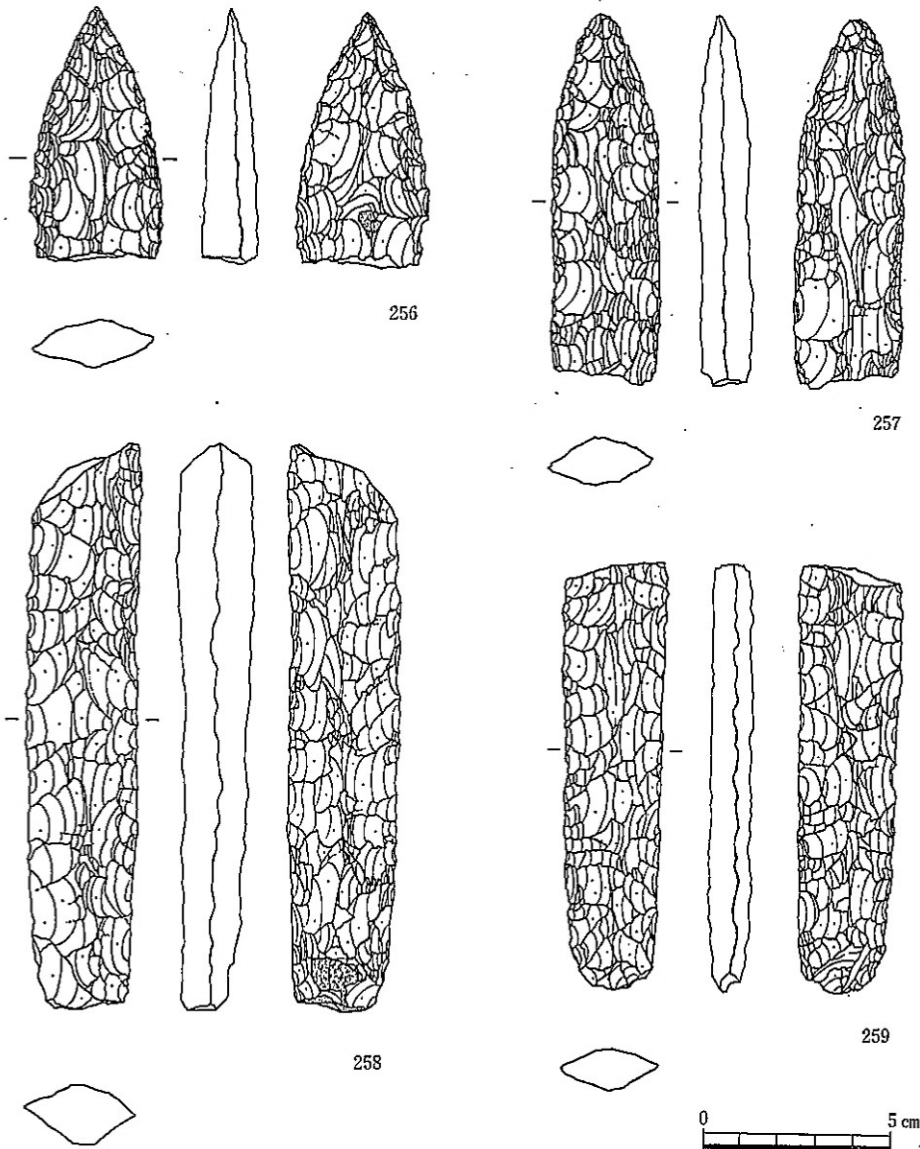
(258)、(259) は、先端部を欠いている石槍である。(258)は、SK3060より出土している。現長14.45cm、幅2.9cm、厚さ2.05cmを測り、両側縁より調整剝離を施しているが、基部に礫面を部分的に残している。側縁には刃潰痕が、わずかに認められる。石質はサヌカイトである。(259)は、SD3034より出土している。現長11.25cm、幅2.7cm、厚さ1.1cmを測る。両側縁より調整剝離を施しているが、基部に礫面を残している。側縁には刃潰痕が認められる。石質はサヌカイトである。



第154図 石器実測図 石鏃・石錐 (1/2)

石核 (260~261) (260)、(261) の石核は、各々の a・b 面を剥片剥離作業面とし、c 面には節理に直交する剥離平坦打面を持つ。また打面転位により剥離平坦打面に対応する礫面上とも打面とし剥離作業を行っている石核である。

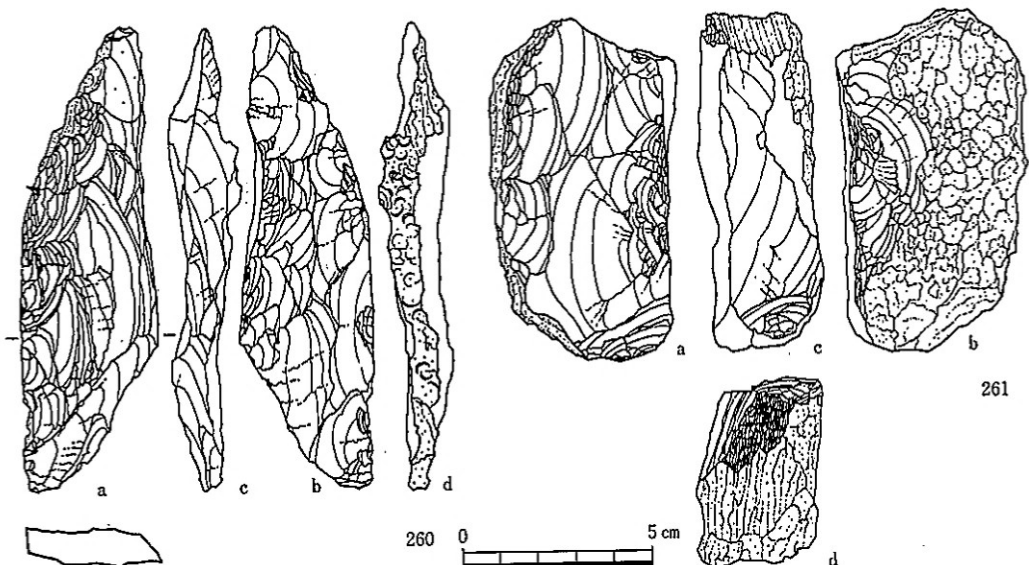
(260) は、S D 3012 より出土したサヌカイトの石核である。形状より素材を推定できないほど、剥離作業の進行した残核である。表・裏面の関係にあたる a・b 面は剥片剥離作業面であり、各々 c・d 面を打面として剥離作業を行っている。a 面に施された剥離作業は、礫面上を打面としている d 面より加撃されたものであり、加撃点は理想的なところを探すように、縁辺部を移動している。加撃点付近は、階段状に止まる小刻みな剥離が顕著に認められる。b 面に施さ



第155図 石器実測図 石核 (1/2)

れた剥離作業痕には、c面を打面とした剥離面と、d面を打面とした剥離面の両者が中央で切り合っていて、剥離の新旧関係をみれば、c面からの剥離が新しくd面からの剥離を切り込んでいる。また加撃点は、a面同様に理想的なところを探すように縁辺部を移動している。c面に僅かに残る剥離平坦打面は、a面方向よりのかなり大きな加撃により剥離されたものである。このように表・裏の関係にあるa・b面を各々作業面として剥離作業を進めているため、残核の形態は断面長方形を呈する扁平な板状を呈している。(261)は、包含層Ⅷ層より出土したサヌカイトの石核である。またd面には敲打痕が明瞭に残っていて、最終的には叩き石として転用された石核である。形状より推定すれば分割礫を素材とした石核である。石核としての構成は、(260)同様、表・裏の関係にあたるa・b面を剥片剥離作業面として、c面には同作業面より剥片を剥ぎ取るために設けられた、剥離平坦打面を残している。a面に残る剥離作業痕は、c面を打面とした剥離面と、c面に対応する礫面上を打面として加撃した剥離面の両者が切り合っていて、剥離の新旧関係は、c面からの剥離が古く、礫面上からの剥離により切り込まれている。また加撃点は縁辺部を移動している。b面に残る剥離作業痕はc面を打面として行われた作業である。b面はc面からの加撃による僅か数面の剥離面と、礫面よりなり、剥離面はb面全体に及んでいない。そのためb面の剥離作業は作業面作成のための剥離作業と考えられる。c面に残る節理に直交するように加撃された剥離平坦打面は、a面方向よりのかなり大きな加撃により剥離されたものである。残核の形態は、(260)の石核にくらべ剥離作業がさほど進行していないために、肉厚な直方体を呈している。

以上、今回紹介したような特徴を持った石核を整理してみたい。①打面転位を顕著に行っている。②剥離平坦打面を持つ。③打点は各々打面の縁辺を並列ぎみに移動し、剥離作業を行っているため、剥離方向は作業面の長軸線に対し直交するように加撃されている。等の共通事項による。



第156図 石器実測図 石核(分)

り、両石核は同じ剥片生産技術を示す石核といえる。これらの石核に類似するものは、既に亀井遺跡に報告されている石核Ⅲ⁽⁵⁾にあたる。(西村)

第3項 木製品

弥生時代の木製品は、A～Dの各調査区にわたって、土坑・井戸・溝・自然流路等の遺構から多種多様なものが出土した。総数は約80点にのぼる。各調査区における出土の比率はやはり遺構の集中するBトレンチが最も多い。また製品ばかりでなく、各種の未製品も含んでいる。時期は中期と後期のものがほとんどである。ここでは、Bトレンチ出土のもののうち中期の環濠SD3011・3012、中期の土坑SK3060、後期の環濠SD3008・3010出土の木製品のなかから代表的なものを報告する。なお、各木製品の木取りは、実測図中で断面図に木理を示した。断面図に木理の表現のないものは心持材である。

SD3012 (第157～158図、図版85～86)

着柄鋤(262) 長さ30.0cm、最大幅20.2cm、刃部幅10.5cm、着柄部の厚さ2.1cmを測る完形品である。基部から刃部にかけて少しずつ幅、厚さとも減じ、刃部は直線的である。基部に2.0×5.0cmの長方形の着柄孔を穿つ。着柄孔の横断面は台形を呈しており、柄のずれない工夫がされている。柄は身に対して水平に近い角度で装着されていたと考えられる。非常にていねいな作りで、遺存状態も良好である。カシ材。

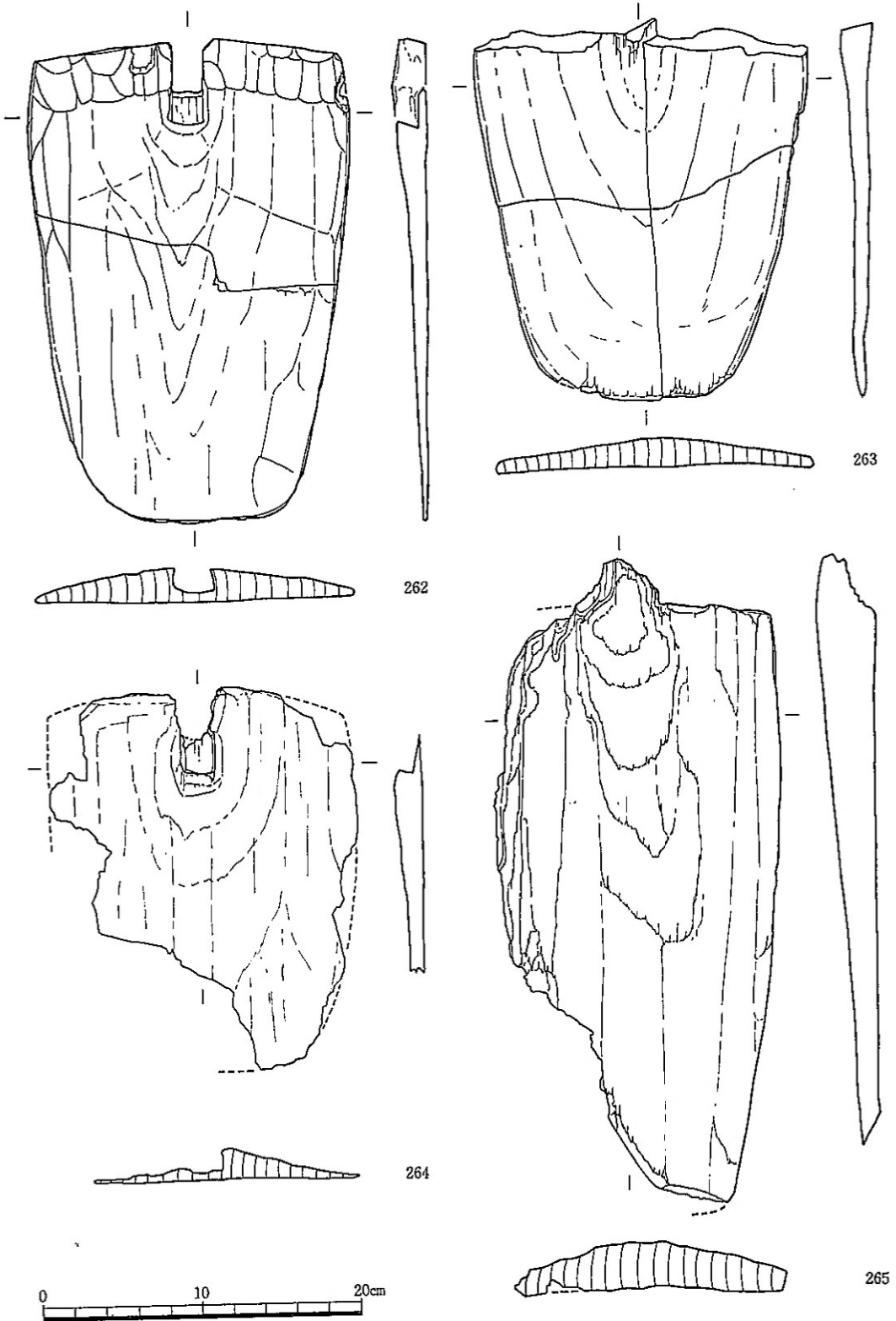
鋤(263) 基部を欠く。現存長23.9cm、最大幅20.9cm、刃部幅11.0cm、現在最大厚1.8cmを測る。基部から刃部にかけて少しずつ幅、厚さとも減じ、刃部はやや摩滅しているが本来は直線的だったと考えられる。(262)と同様の形態をしていることから着柄鋤であると考えられる。腐蝕しているが作りはていねいである。カシ材。

着柄鋤(264) 基部と側縁及び刃部の一部を欠く。長さ24.0cm、最大幅19.1cm、着柄部の厚さ1.8cmを測る。(262)と同様の形態を有し、基部に2.2×5.2cmの長方形の着柄孔を穿つ。腐蝕が著しいため加工痕は不明瞭である。また、着柄角も正確には測定しえないが身に対して水平に近い角度であったと推定される。カシ材。

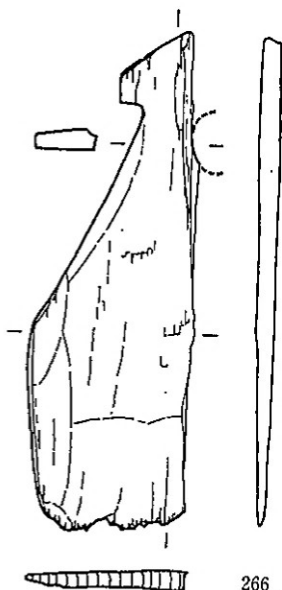
鋤未製品(265) 片方の側縁と刃部を欠く。現存長40.4cm、現存幅18.0cm、最大厚3.8cmを測る。基部に2.5cmほど突起が残っていることから、柄・身一体の鋤の未製品であろう。著しく腐蝕しているため加工痕は不明である。カシ材。

広鋤(266) ほぼ縦半分に破損している。長さ26.0cm、現存最大幅8.5cm、最大厚1.1cmを測る。基部の左右に三角形の造り出しを有する。側縁は中ほどまで扇状に広がり、そこからほぼ垂直になる。着柄孔はごく一部が残存するのみで大きさ、着柄角等は不明である。着柄孔の周囲はわずかな高まりとなっているだけで、明瞭な舟形突起は認められない。遺存状態は良好で、側縁の加工痕がよく観察できる。カシ材。

狭鋤(267) 長さ27.2cm、最大幅7.6cm、刃部幅3.2cm、最大厚2.8cmを測るほぼ完形品である。厚さが最大になる部分に3.1×3.7cmの円形の着柄孔を穿つ。基部から刃部にかけて少しずつ



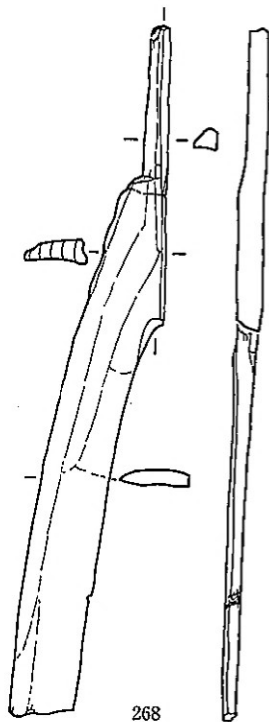
第157图 S D3012出土木製品実測图 (1/4)



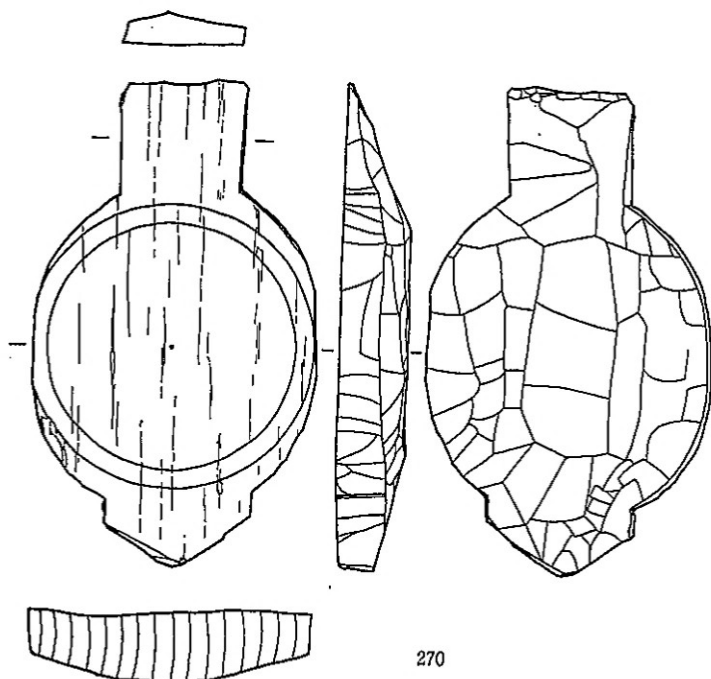
266



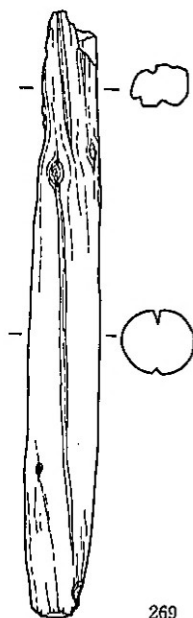
267



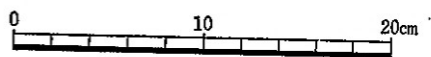
268



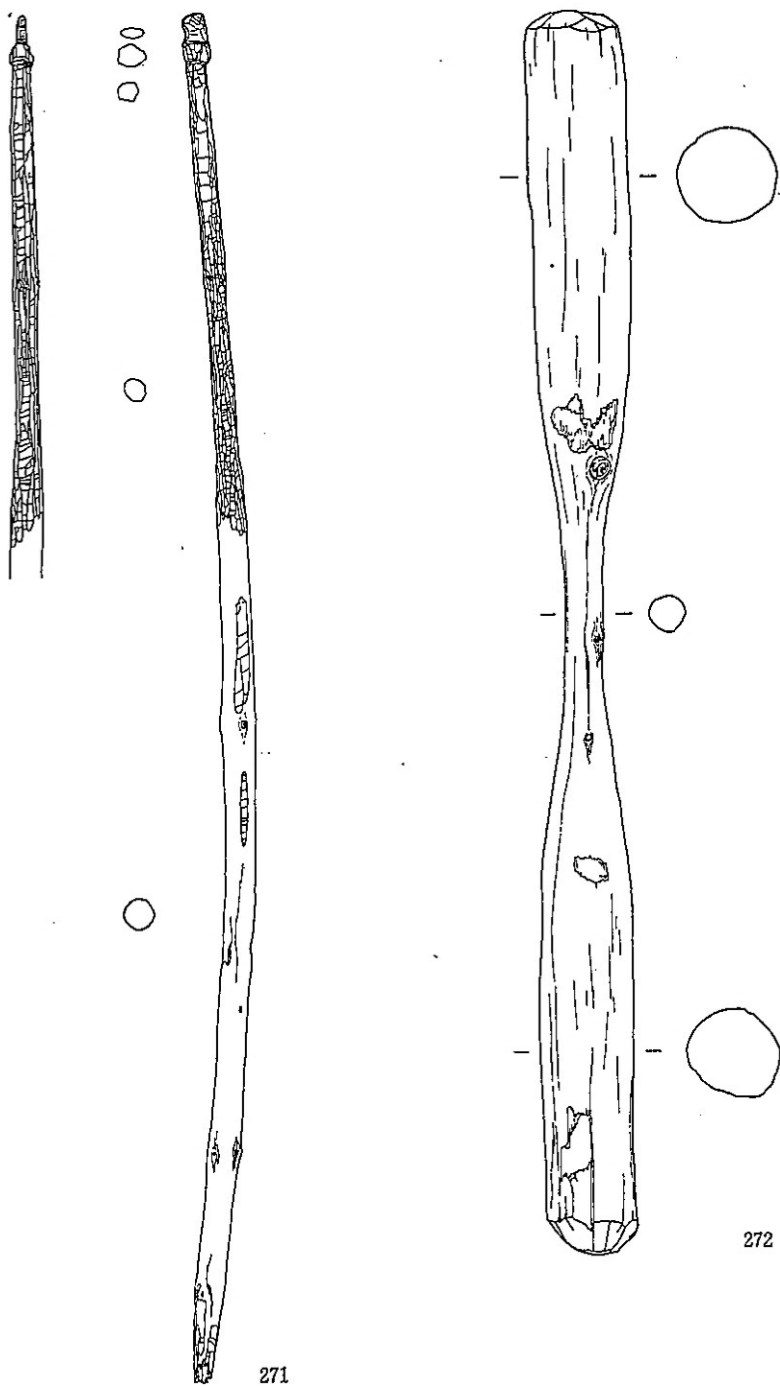
270



269



第158图 S D 3011 · 3012出土木製品実測图 (34)



第159図 S D3012出土木製品実測図 (1/6)

幅を減じ、また、着柄孔の部分から基部、刃部両側にかけて厚さを減じる。着柄角は約61度である。腐蝕が著しい。カシ材。

二又鉞または二又着柄鋤 (268) はほぼ縦半分に破損し、刃部の先端も欠く。現存長37.1cm、刃部幅3.9cm、刃部厚0.9cm、基部最大厚1.4cmを測る。扁平で細長い二又の刃部を有し、基部には長さ7.7cmで断面半円形の着柄部を造り出す。着柄部の一面が平坦であることからここに柄を緊縛して装着したものと思われる。この形態からは膝柄の鉞、直柄の鋤両方の用途が推定できるが、いずれとも決しがたい。ていねいな作りで遺存状態も良好である。カシ材。

棒状木製品 (269) 握部の一部を欠く、現存長32.1cm、最大径3.9cmを測る。中ほどが最も大きく握部と先端は少し細くなる。何条かのひび割れが見られるがそれほど腐蝕しておらず、表面はかなり光沢を持っている。先端に何かを搗いたような痕跡は認められないので小形の杵とは考えられない。あまり重量を必要としない砧、あるいは楯棒などの用途が想定できる。広葉樹材。

弓 (271) 一端を欠く。現存長109.8cmを測る。中ほどの約63cmは樹皮を剥いだままほとんど加工を施さないが、先端から42cmほどの間は鋭利な工具で細かく削って一段細くしている。弓管に近い部分の断面形は1.5×1.4cmの方形に近い多角形を呈する。弓管は幅1.7cmの一段太い部分の先に1.8×0.8cmのだ円形の絃かけ突起を造り出し、絃をかける部分は少しえぐり込んである。弓のちょうど中ほどの直径は2.4cmで、この部分に使用中に生じたと考えられる亀裂が見られる。この亀裂の位置と絃かけのえぐり込みの向きからこの弓は、絃を張るときとは逆に曲げ撓めていたことがわかる。張力を増すための工夫であろう。弓身のところどころに曲げるときについたと思われる焦げめが見られる。遺存状態は非常に良好で現在も強い弾性を有している。樹種未鑑定。

杵 (272) 完形品。長さ99.6cm、最大径7.5cm、握部の直径2.9cmを測る。搗面は一端が半球形、一端は平坦に近い半球形を呈する。全体にかなり腐蝕しているが搗面の加工痕は比較的よく観察できる。加工痕が摩滅してしまうほどは使い込まれていないということであろう。広葉樹材である。搗面の形態のちがいは池上、瓜生堂などの遺跡出土の完形の杵でもよく見られる。なんらかの使いわけがなされていたものと思われる。

S D 3011 (第158図、図版92)

横柄杓未製品 (270) 長さ25.9cm、最大幅15.0cm、柄になる部分の幅6.6cm、最大厚3.7cmを測る。原材は2個以上連続して製作されたものらしく、先端部は両側縁から切り込みを入れて切断している。上面は平坦で直径13.1cmと15.1cmの二重の円が刻み込まれている。円の中心には直径0.2cmの小穴がみられることと描かれた円が正円に近いことからブンマツシを用いたことが推定される。加工を進めるにあたって削り込む部分と縁として残す部分を表示したものである。下面は全体に荒削りを施してあり、半球形を呈する。側面も荒削りを施してほぼ円形に整形している。柄になる部分は長さ約6cmの造り出しになっている。加工痕は1単位がかなり大きく、また、非常にシャープであることから、用いられた工具は鉄製の縦斧ではないかと推定する。遺存

状態は非常に良好である。広葉樹材。

SK3060 (第161~162図、図版87~89)

着柄鋤 (273) 基部と側縁の一部を欠く。長さ33.7cm、推定最大幅20.0cm、刃部の幅約11.0cm。着柄部の厚さ2.5cmを測る基部から刃部にかけて少しづつ幅、厚さとも減じ、刃部は直線的である。基部に2.1cm×4.6cmの長方形の着柄孔を穿つ。着柄孔のブリッジの部分もよく残っている。着柄角は、身に対して水平に近い。非常にていねいな作りで遺存状態も良好である。カシ材。

着柄鋤 (274) 基部の一部を欠く。長さ26.3cm、最大幅17.2cm、刃部の幅約10cm、着柄部の厚さ2.3cmを測る。基部から刃部にかけて少しづつ幅、厚さとも減じ、刃部は直線的である。基部に2.8×6.0cmの長方形の着柄孔を穿つがブリッジの部分は欠失する。着柄角は約17.5度である。ていねいな作りであったと思われるが腐蝕が著しい。カシ材。

広鋤 (275) 両側縁と基部の造り出しの一方を欠く。長さ37.2cm、現存最大幅13.2cm、最大厚1.0cmを測る。基部両側に三角形の造り出しを有し、側縁はその下から扇状に広がる。舟形突起は4.8×14.0cmで非常に低く、その基部近くに2.6×3.6cmの長円形の着柄孔を穿つ。着柄角は57~72度の間である。表面には鋭利な刃物による細かいキズが多数認められる。ていねいな作りで遺存状態は良好である。カシ材。

広鋤 (276) 両側縁を欠く。長さ29.2cm、現存最大幅9.7cm、着柄部の厚さ2.4cmを測る。舟形突起は5.8×17.7cmで高く造り出されている。その基部近くに3.5×3.8cmのほぼ円形の着柄孔を穿つ。着柄角は約58度である。腐蝕が著しく加工痕は不明瞭である。カシ材。

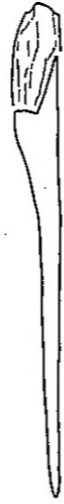
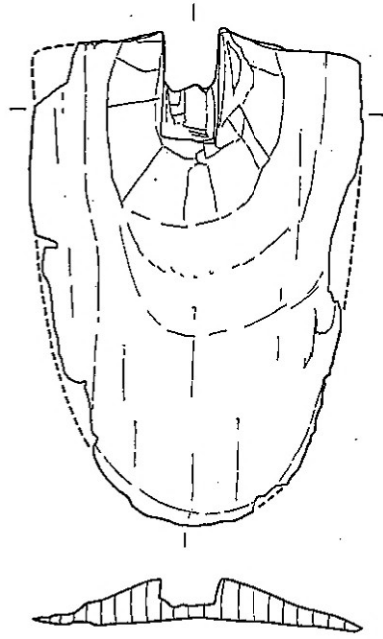
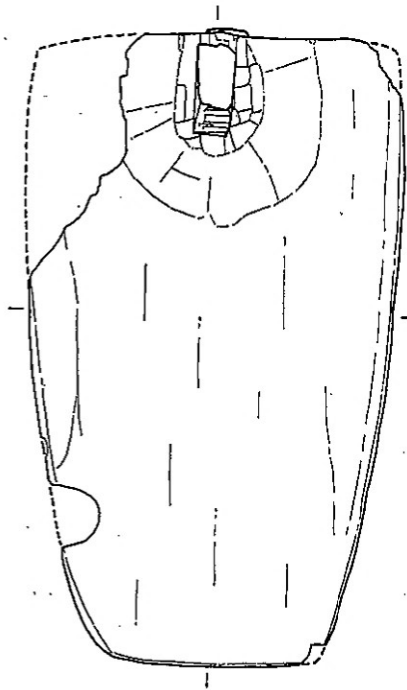
着柄鋤または鋤 (277) 側縁の一部のみ残存する。現存長33.7cm、現存最大幅6.0cm、最大厚1.6cmを測る。基部に三角形の突起を有する着柄部を作り出し、その下は丸く張った肩から刃部にかけて少しづつ幅を減じる。この形態からは膝柄のつく鋤、直柄のつく鋤両方の用途が想定できるがいずれとも決しがたい。ただ、着柄部の形状や長い身部を持つことなどからナスビ形着柄鋤(鋤)の原形と考えることも可能で弥生時代中期の例として興味深い。やや腐蝕する。カシ材。

広鋤 (278) 側縁一部のみ残存する。現存長21.3cm、現存最大巾9.4cm、厚0.8cmを測る。加工痕は不明瞭である。カシ材。

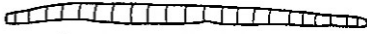
広鋤未製品 (279) 長さ28.7cm、基部の幅10.2cm、刃部の幅18.4cm、厚さ3.8cmを測る。基部から中ほどまで扇状に広がり、刃部までは垂直な側縁を持つ。荒削りの段階である。カシ材。

大型蛤刃石斧の柄未製品 (280) 長さ75.0cm、装着部正面の幅5.8cm、側面の幅6.9cmを測る。荒削りの段階で、中ほどの断面形は台形を呈する。先端から約16cmの位置に3.0×5.7cmの楕円形のソケットを穿つ。正面に対して直角になっていないが、深さ約4.5cm底のすぼまるソケットである。柄の長軸に対する石斧の着装角はほぼ直角である。柄の装着部の境界には背面にのみ段を削り出しかけている。鋭利な工具による加工痕が明瞭に観察でき、そこから推定される工具の刃幅は4cm前後である。遺存状態は良好。カシ材。

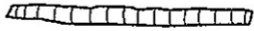
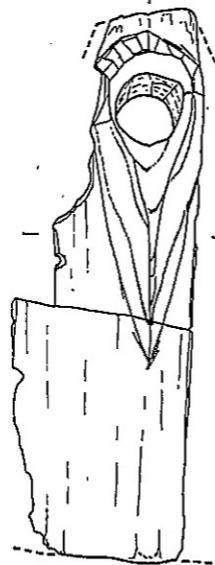
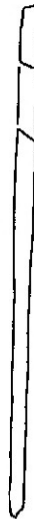
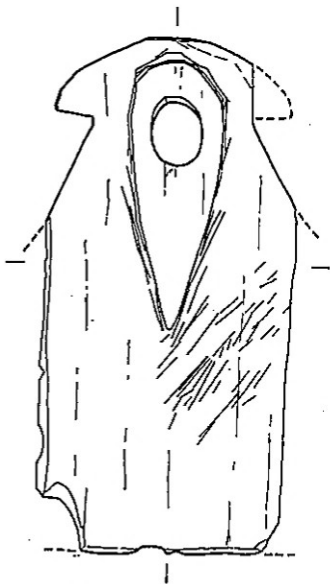
偏平片刃石斧の柄 (281) 長さ46.0cm、台部の長さ21.2cm、台部の最大幅4.2cm、一段削り込



274



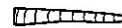
273



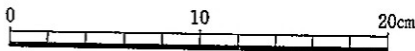
275



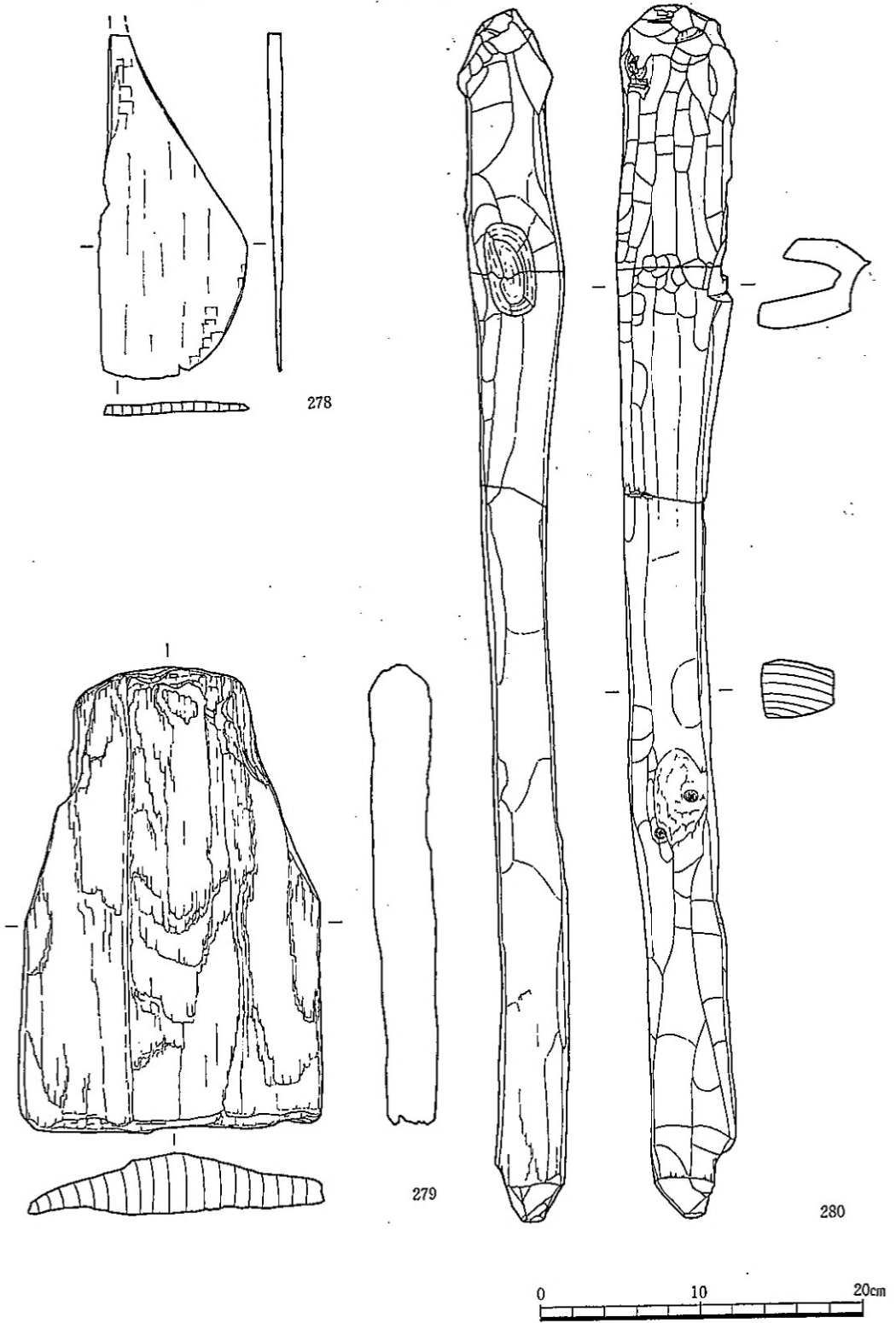
276



277



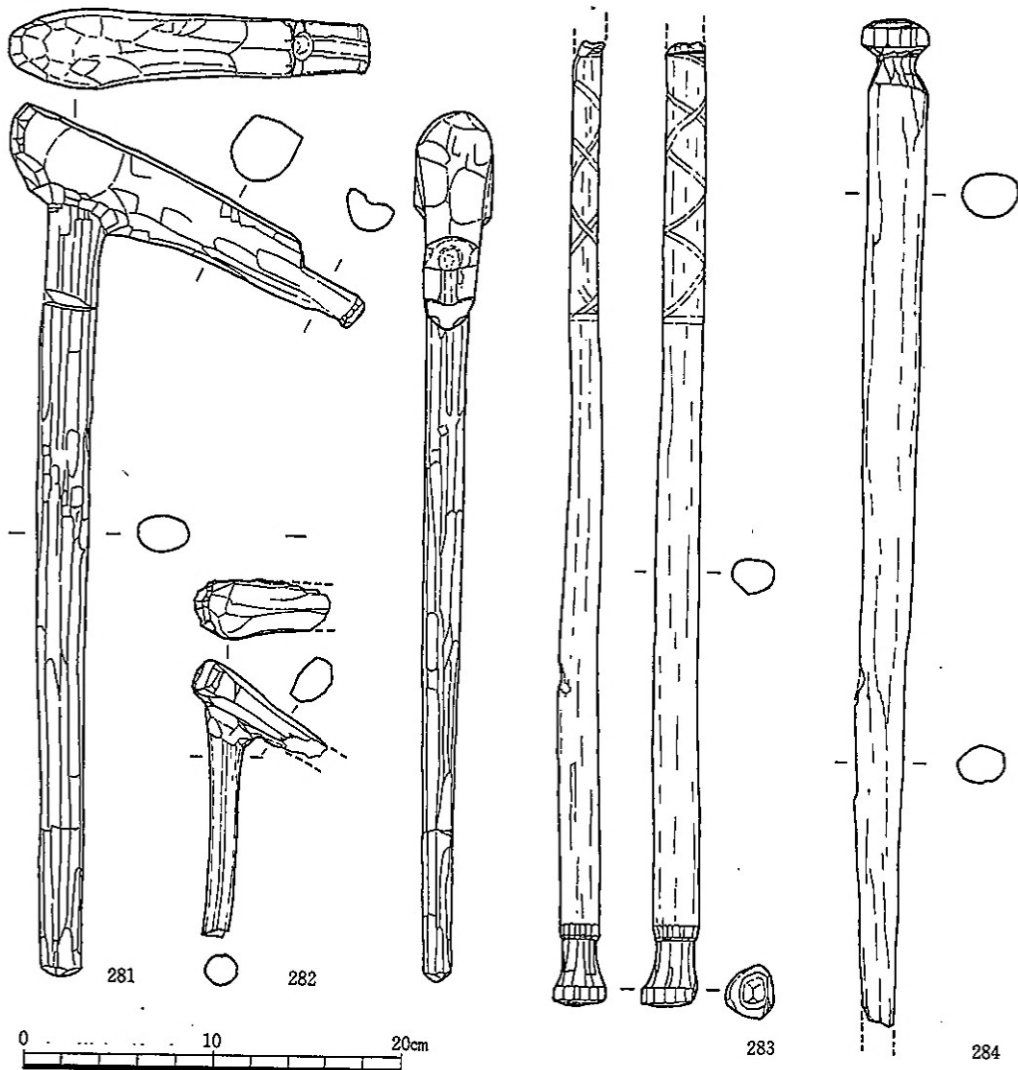
第160图 S K 3060出土木製品実測图 (14)



第161图 S K 3060出土木製品実測图 (14)

んだ着装部の長さ3.8cm、着装部の幅26.0cmを測る。台部は上面がほぼ平坦なカマボコ形の断面形を呈する。着装部は下面もわずかに削り込んでおり、先端には紐ずれを防ぐ段が削り出されている。石斧の基部が当る部分は丸くくぼんでおり、三角形に近い形状の偏平片刃石斧を装着していたことがわかる。握柄は直径2.7×2.0cmの長円形の断面形を呈するがこれは、土圧によって変形したものと思われる。握柄も細かく面取りを施した見事な膝柄である。遺存状態は非常に良好。広葉樹の枝分かれの部分を利用している。

横斧の柄(282) 握柄、台部の一部が残存する。現存長14.7cm、台部の現存長8.0cm、台部の最大幅3.3cm、握柄の直径1.7cmを測る。台部は偏平な不整多角形の断面形を呈する。握柄は樹皮を剥いだままの自然面である。着装部を欠くため石斧か鉄斧の柄かは不明である。かなり腐蝕する。広葉樹の枝分かれの部分を利用している。



第162図 S K 3060出土木製品実測図(14)

棒状木製品 (283) 一端を欠く。現存長51.2cm、中ほどの直径2.2cmを測る。一端に約3.5cmの頭を削り出しており、先端を欠く他端にも頭状の造り出しの一部が残存している。その段のつく部分から中ほどへ14.5cmの間に紐状のものを2条交叉させて巻きつけた痕跡が白く残っている。紐状のものの幅は0.2~0.4cmである。端部の造り出しは鋭利な工具でていねいに削り出されており、細かい加工痕が観察できる。断面形は角の丸い三角形を呈する。中ほどの棒状の部分は片面に稜を持ち、断面形は栗を縦割りにしたような形を呈する。広葉樹心持材。

棒状木製品 (284) 一端に頭部を有し他端を欠く。現存長53.5cm、最大径は3.0×2.3cmで断面形は長円形を呈するが、これは土圧による変形と考えられる。頭部から他端に向って徐々に太さを減ずるが、腐蝕が著しいためこれが本来の姿であるかどうかは明らかでない。頭部の加工痕は比較的明瞭に観察できる。織具の一部とも考えられるが用途は明らかではない。樹種不明。

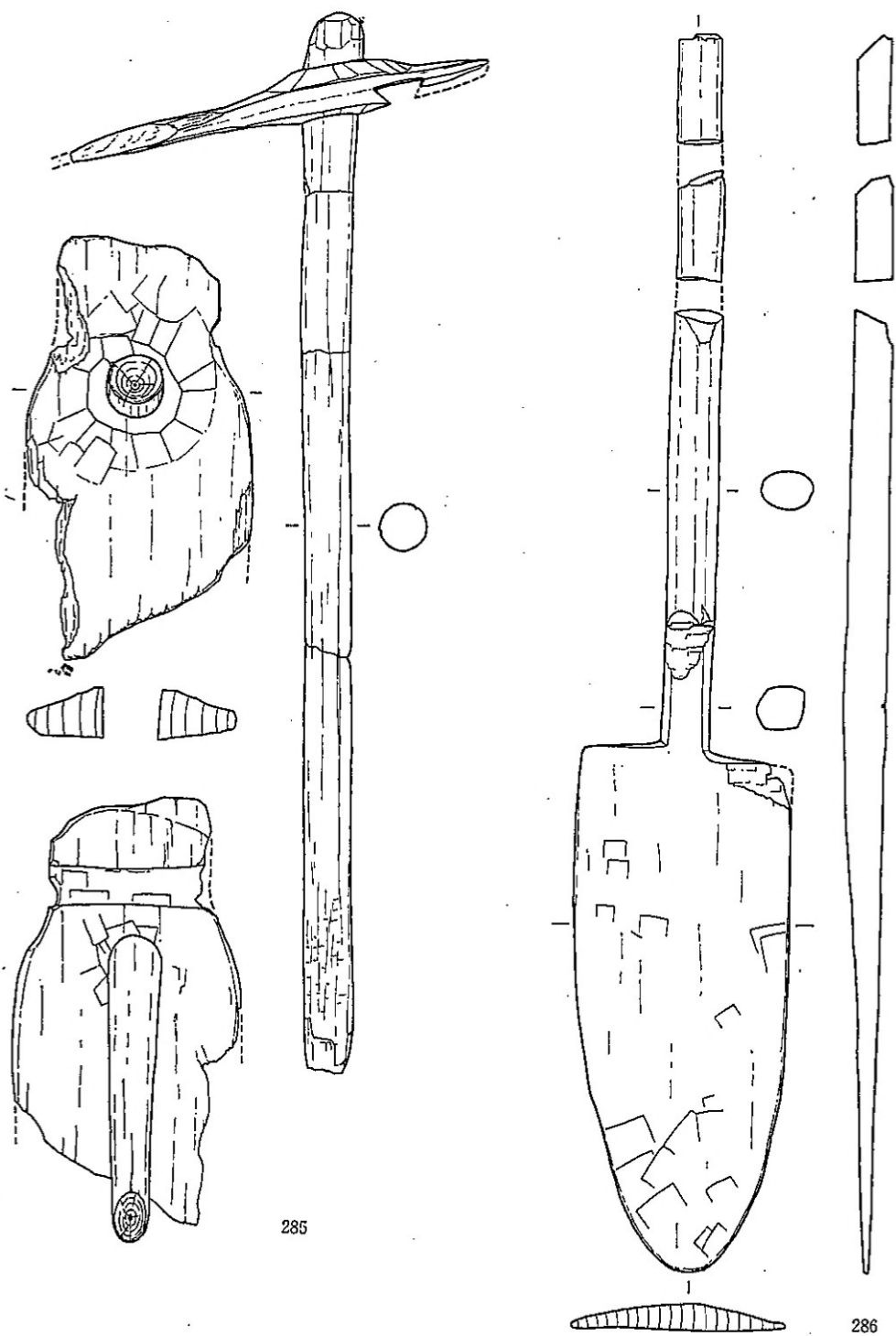
S D3008 (第163~165図、図版89~91)

広鋏 (285) 約61cmの柄が残存する。身部は火を受けて一部を欠くため長さは不明であるが、幅は14.0cm、厚さ3.0cmを測る。身の上部はくびれており、その部分の手前側の面に断面台形の溝状の切り欠きを有する。着柄部の突起は円形を呈する。柄の直径は2.8cmを測る。着柄角は約75度。身はカシ材。柄は広葉樹材。

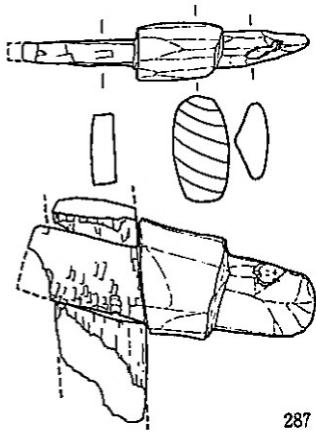
鋤 (286) 柄・身を一木から作り出したもので柄の一部を欠く。身の長さ30.6cm、身の最大幅12.5cm、身の厚さ1.5cmを測る。柄の現存長は接合しない部分もあってははっきりしないが、38~42cmほどである。柄の断面形は3.0×2.2cmの楕円形を呈するがこれは、土圧による変形と考えられる。また、身に近い部分の柄は方柱状になる。かなり腐蝕していて加工痕は明瞭ではないがていねいな作りだったことがうかがえる。カシ材。

縦斧の柄 (287) ソケットを有する柄の一部とやといほぞを作り出した着装部が現存する。柄の部分は破損が著しく原形はわからないが、次に述べる(288)をひと回り大きくしたようなものであろう。装着部は全長15.5cmを測る。やといほぞは5.5×3.7cmの長方形で厚さは1.3cmである。長さ5.0cm、幅3.9cmで片面に稜のつく舌状の装着部との間には3.0×5.6cmの長円形の断面形をもつ台部がつく。着柄角は約74度である。舌状の装着部の断面形から推定して袋状鉄斧を装着したものであろう。畿内では初例かと思われる。柄、台部共にカシ材であるが、台部の方が木理の密な材を用いている。

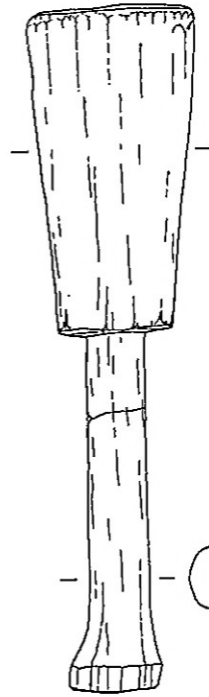
縦斧の柄 (288) ソケットを有する柄の部分がほぼ完存する。長さ44.6cm、着柄部の幅と厚さはそれぞれ4.3cm、2.6cmを測る。ソケットの断面形は1.0×5.0cmの長方形を呈し、着柄角は約76度である。先端から約15cmのところを一段、幅、厚みを減じ、柄の中ほどの断面は2.6×1.7cmの隅丸長方形を呈する。また、握部の断面形は直径2.3cmの円形を呈する。握部は元の方が少し細くなるように作られており、右手利き用の親指かけと小指かけが作り出されている。全体にていねいに削られた加工痕が観察できるが、着柄部の側面はさらに研磨されて光沢すら持つ。また、着柄部の側面と前面には細かいきずが多数認められる。(287)と同様のやといほぞを有する



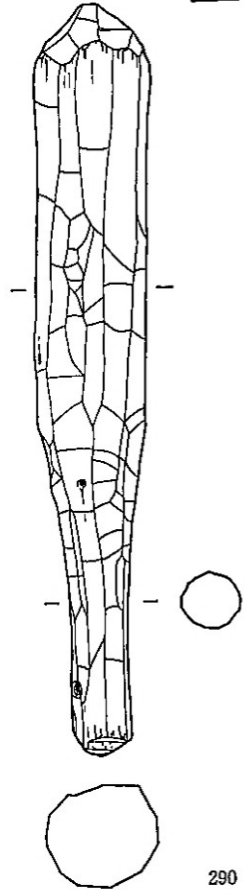
第163图 S D 3008出土木製品実測图 (1/4)



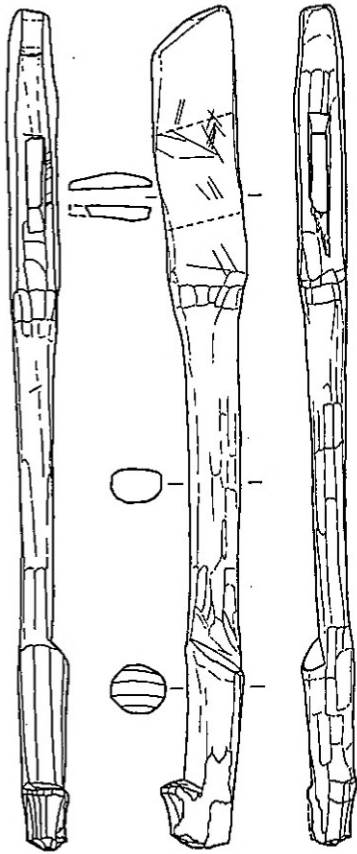
287



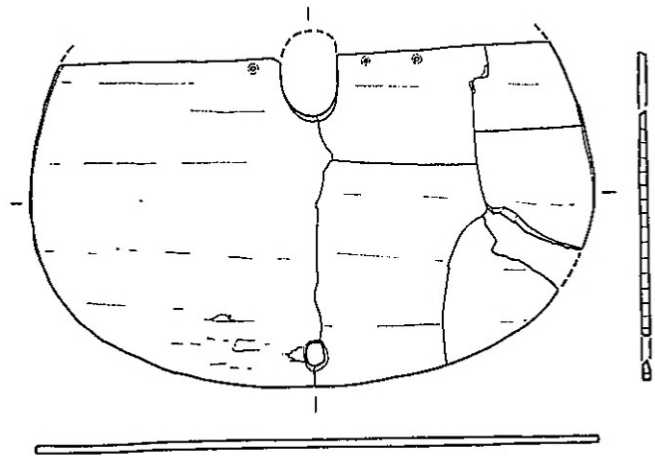
289



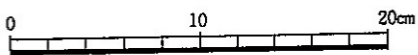
290



288



291



第164图 S D3008出土木製品実測图 (1/4)

台部が伴うものであろう。カシ材。

砧 (289) 完形品である。全長36.2cm、柄の長さ18.9cmを測る。ものを打つ部分は先端から柄に近づくにつれて細くなるように作られており、先端の直径8.7cm、柄との境の部分の直径は6.1cmを測る。断面形は円形を呈する。柄の太さはほぼ一定しており、中ほどの断面形は直径3.1cmの円形を呈する。また、柄の端部にはすべり止めのふくらみが作り出されている。かなり腐蝕しているため加工痕は明瞭に観察できない。広葉樹材。

棒状木製品の未製品 (290) 完形品である。長さ39.8cm、太い部分の直径5.9×5.5cm、握り部分の直径3.1×2.9cmを測る。荒削りの段階で全体に鋭利な加工痕が観察できる。両端には削り込んで切断した痕跡が残る。先端から約23cmのところより徐々に太さを減じるように削り込んで握りを作り出している。(269)のような棒状木製品の未製品と考えられる。遺存状態は良好である。

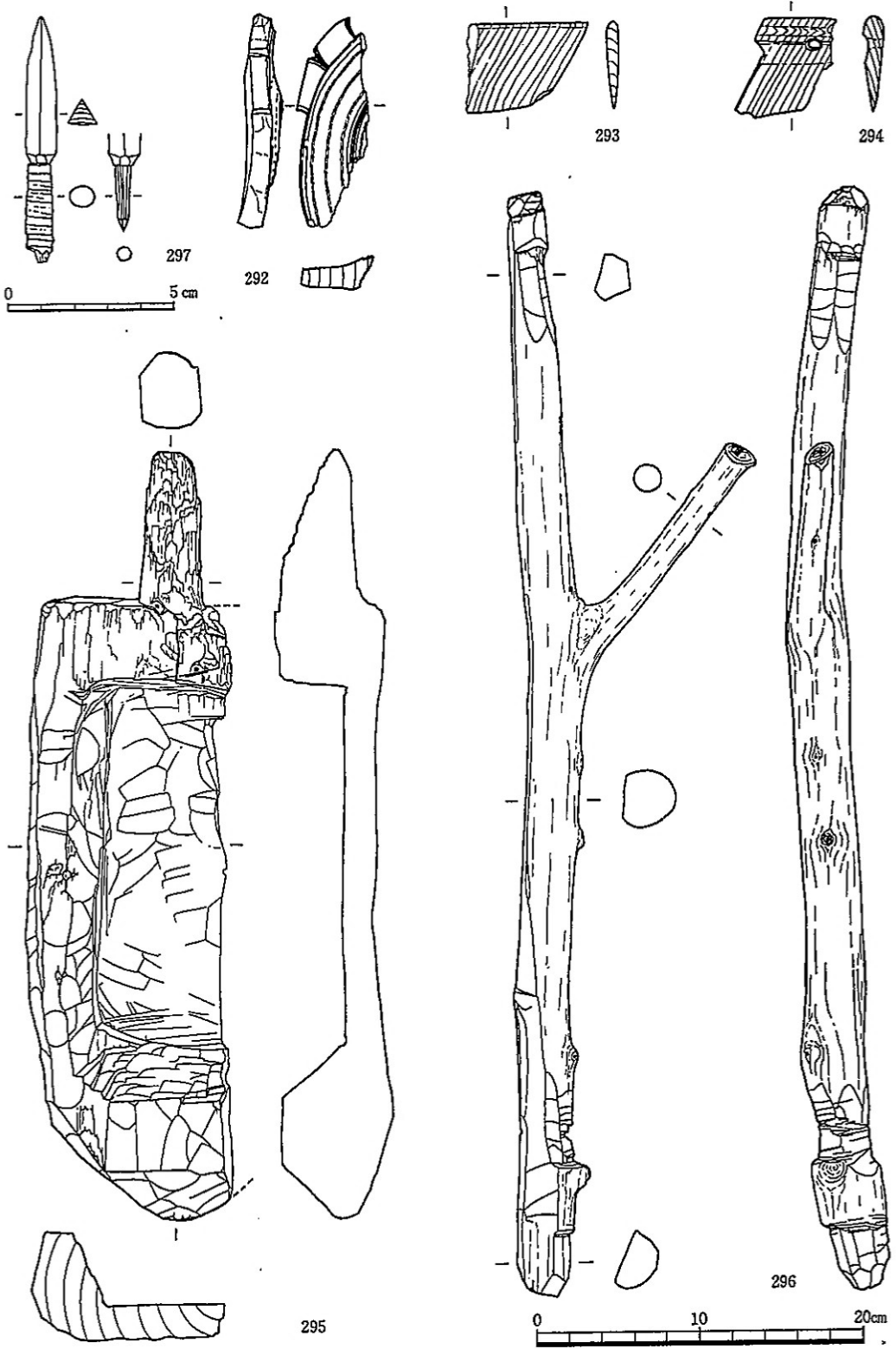
丸鋳 (291) 身の上部を欠く。幅29.8cm、厚さ0.4cmを測る。上部に3.0×4cm以上の楕円形の着柄孔、下部に1.2×1.6cmの長方形の補強柄孔を有する。上部の欠失部には3ヶ所に補修孔が見られる。着柄角は約45度。カシ材。

装飾のある木製品 (292) 円形ないし半円形を呈する木製品の一部と考えられる。2個1組のイチョウの葉形の突起がつく。体部と突起はていねいに削り込んだくま取りで飾られる。体部には同心円状に4重の小孔列が穿たれるが、いずれの小孔も貫通はしていない。また、各列の小孔間には、細い紐状のものをさし渡したと考えられる痕跡がわずかな盛り上がりとなって観察できる。さらに、外側から3番目と4番目の小孔列の間には断面V字形の細い溝が2条彫り込まれている。断面形は、表面が中心に近づくにつれて盛り上がっている。裏面はていねいに削って仕上げているが文様は施されていない。側面観はゆるやかなS字状を呈する。遺存状態は非常に良好である。広葉樹材。

この木製品に見られるような小孔列間に紐をさし渡したような痕跡は、亀井を含め周辺の他の弥生時代の遺跡から出土している小孔列を有する板状木製品にもよく見られるものである。これら板状木製品のうちには、赤色顔料によって彩色されたものも数多く見られる。⁽⁶⁾時代は下がるが、平城宮跡の井戸SE1230出土の単人楯の頭部に見られる小孔列にも同様の痕跡が観察でき、毛飾りを紐で綴じ合わせて施すように復元されている。⁽⁷⁾弥生時代のこの種の木製品にあっても毛飾り、羽根飾り等の存在が想定できる。

この破片を、シンメトリーな形態をもつものと仮定して復元して見ると、直径約11.4cmの円弧を描き、2個1組の突起を半周で4個持つものとなる。このような形態は銅鐸の鈕の部分に酷似している。ただし、S字状に彎曲している点など銅鐸とは異っており、用途については可能性を指摘するにとどめ、不明とせざるをえない。

石庖丁形木製品 (293・294) いずれも一部欠失する。(293)は刀形で幅5.4cm、厚さ0.7cmを測り、上端は丸く、刃部は鋭く作られている。(294)は幅5.9cm、最大厚1.3cmを測り、上部は肥厚し、横に張り出しが認められる。紐穴の部分は片面が幅1.7cmの浅い溝状に削られており、内



第165图 S D 3008、N R 3001出土木製品実測图 (1/2 · 1/4)

径0.7×0.4cmの紐穴が残っている。穴の周囲は紐ずれ状に広がっている。上端は丸く、刃部は鋭く作られている。木取りはいずれも木理の線が刃部に対して52度の角度をなすように作られている。広葉樹材。

取手付容器の未製品(295) 約3分の1が欠失する。長さ47.0cm、最大厚6.7cm、底部の厚さ2.0cm、取手は径3.6×4.5cmの多角柱状を呈する。復元最大巾は17~18cmである。容器の部分は舟形を呈し、口縁からの深さは4.3cmを測る。荒削りの段階で、全体に明瞭な工具痕が観察できる。工具痕は刃部幅約2.8cmを測り、非常に鋭利な感じを受ける。一度に0.3~0.5cmも削り込んでいる部分があることからかなり強い力で工具が打ち込まれていることがわかる。以上のことから使用された工具は、鉄製の縦斧か横斧と推定される。広葉樹材。

二又有頭棒状木製品(296) 長さ67.5cm、最大径3.5cmを測る。両端に突起を削り出しており、一面を削って断面形は半月形を呈する。他は樹皮を剥いだままである。先端から約27cmの削っていない面に長さ約16cm、直径1.6cmの枝を残す。同様の製品は大阪府西岩田遺跡に弥生時代後期の例が、静岡県伊場遺跡に古墳時代の例がある。伊場の報告書では用途をしょいこであるとしているが、西岩田の例では一端に板状の木製品がほぞ穴によって取りつくものが見られ、その角度からしょいこは考えにくいものである。そのため、この製品についても用途は不明としておく。広葉樹材。

NR3003 (第165図、図版92)

木鎌(297) 完形の木鎌と漆塗り樹皮巻の矢柄の一部が残存する。木鎌は長さ6.5cmで、身の長さは4.5cm、断面形は一辺0.8cmのほぼ正三角形を呈する。基部は一段細く削っており、なかごは長さ2.0cm、直径0.3cmの多角柱状で、先端は鋭くとがっている。矢柄は3.0cm残存する。木質部がほとんど残存していないがそれ自体は篠竹のようなものであり、木鎌をさし込んだ後、幅約0.5cmの桜のような樹皮を巻きつけて漆で固定している。漢式鎌を模したものと考えられ、何らかの儀器であろう。亀井遺跡では他に槍と考えられる武器形木製品が出土している。(広瀬)

第4項 金属器

貨泉(298~300) 3枚ともBトレンチf9区のⅢb層中から出土した。(299)と(300)は2枚重なった状態で、(298)はその南側約2m付近で検出された。3枚の間には、互いに書体、径、厚さ、重量等に相違が認められる。(298)は径2.31cm、重さ1.85g、(299)は径2.26cm、重さ2.10g、(300)は径2.195cm、重さ2.30gをそれぞれはかる。貨泉が新の元鳳元年(A. D. 14年)に初めて発行された時の規格、径1寸(約2.25cm)、重さ5珠(3.19g)に比らべると、今回出土の3枚は、径はその規格に近似する値を示しているが、重量はかなり軽いものであるといえる。

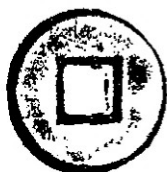
銅鐸片(301) NR3003出土。突線鈕式銅鐸の轄下端の1部で、2辺に縁を残している。外周の突線は基本的には3本であるが、片面の下辺にだけは4本鑄出されている。突線の内側には内行裾歯文の一部が認められる。縦4.2cm、横5.9cm、厚さ2.5mmをはかる。

銅鏡(302) Cトレンチe40区、NR3001の河床近くから出土した。径5.40cm、縁厚3mmを

はかり、約1mmの反りをもつ。鈕は円座鈕で、径9.8mmの半球形を呈する。円座は紐孔部分が切れている。円座の外側に幅5.5mmの主文様帯があり、四乳の間に「卍」形の擬銘様のものが各1個配されている。主文様帯と縁の間には斜行櫛歯文帯が1条めぐる。縁は幅の広い平縁で高くつくられている。鋳上がりは良好である。倣製鏡であるが、既発見の弥生時代小形仿製鏡あるいは古式倣製鏡と称されているものには類例がみられない。また、北九州地方に分布の中心をもつ内行花文日光鏡系統の倣製鏡とは系譜を異にすることも明らかである。

銅鏡 (303、304) (303) はBトレンチ e10区のⅢb層出土。(304) はBトレンチ d12区Ⅲc層出土。ともに、有茎腸袂式である。(303) は完形で、全長4.0cm、身最大幅2.05cmをはかる。(304) は先端部2分の1程を欠いており、現存長3.05cm、身最大幅2.95cmをはかる。

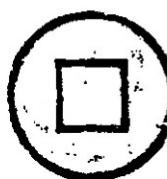
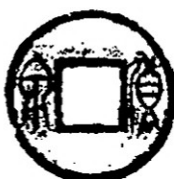
鉄製鏝 (305) S D3067出土。完形で長さ10.6cm、幅0.65cm、厚さ0.45cmをはかる。全体に錆着が著しく、また、土圧のためか、彎曲し、ねじれている。身は断面長方形を呈する。刃部に向ってわずかに拡がり気味につくられており、両刃と推定される。基部の形態は錆のために詳細が明らかでないが、扁平な笠形をしていた可能性が強い。(高島)



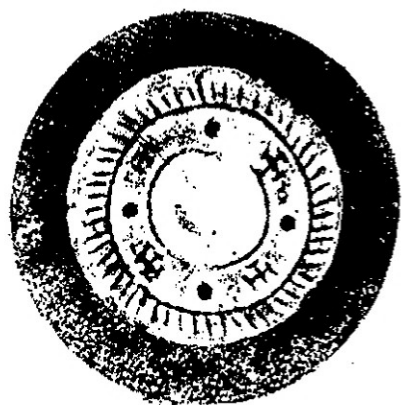
298



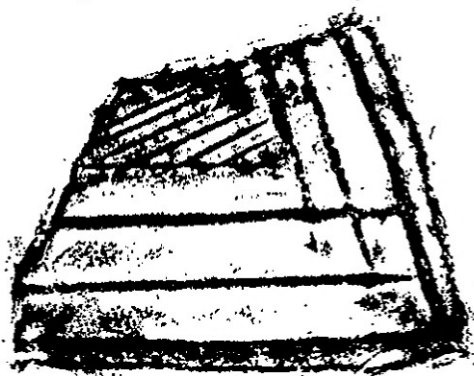
299



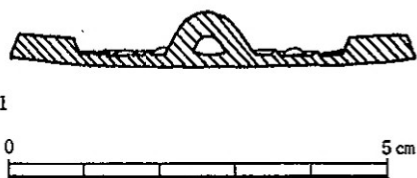
300



302



301



第166図 金属器実測図 (実寸)

第5項 骨角器

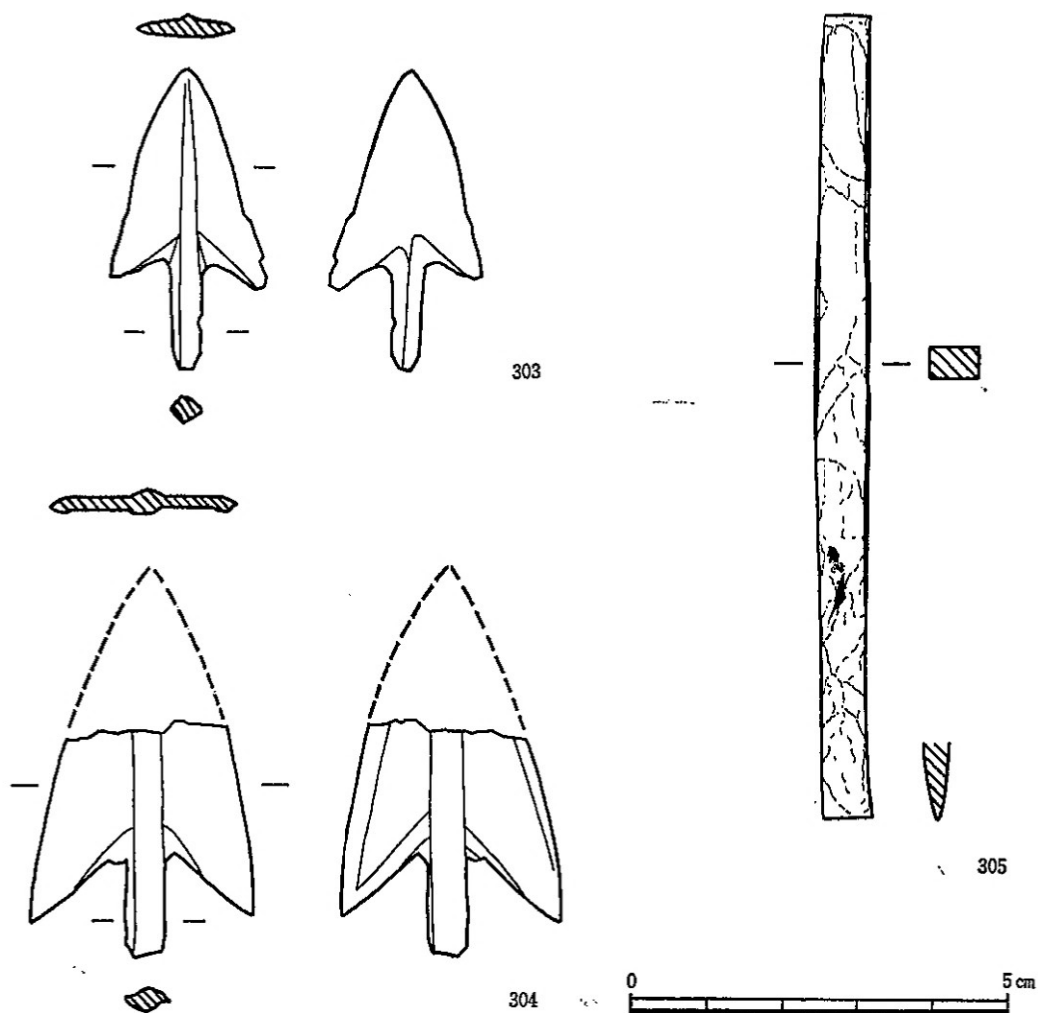
今回紹介する骨角器は、勾玉1点、紡錘車1点、ヤス3点、儀伏(?)1点、鉤(?)1点である。紹介出来なかったものが多数あるが、本報告に譲りたい。

(306) は牙製の勾玉である。長さ33mm、最大巾10mmを測る。舌側のエナメル質が磨り減り、象牙質のみが残る。両面から錐状のもので穿孔した様子がよくわかる。素材は右上顎犬歯⁽⁸⁾で数少ない例である。S K 3082出土。

(307) は紡錘車である。直径45mm、最大厚8mm、孔径7mmを測る。両面を削り調整している。穿孔は上下から施す。一部分火を受けて白い。素材はニホンシカの角座骨。S D 3067出土。

(308) はヤスである。現長89mm、最大厚8.5mmを測る。全体を密に丁寧に削る。素材はニホンシカの中足骨。B e 19の柱穴状のピットの1つから出土した。

(309) はヤスである。現長135mm、最大厚5mmを測る。先端15mm程を鋭く削る。全体に鋭い調

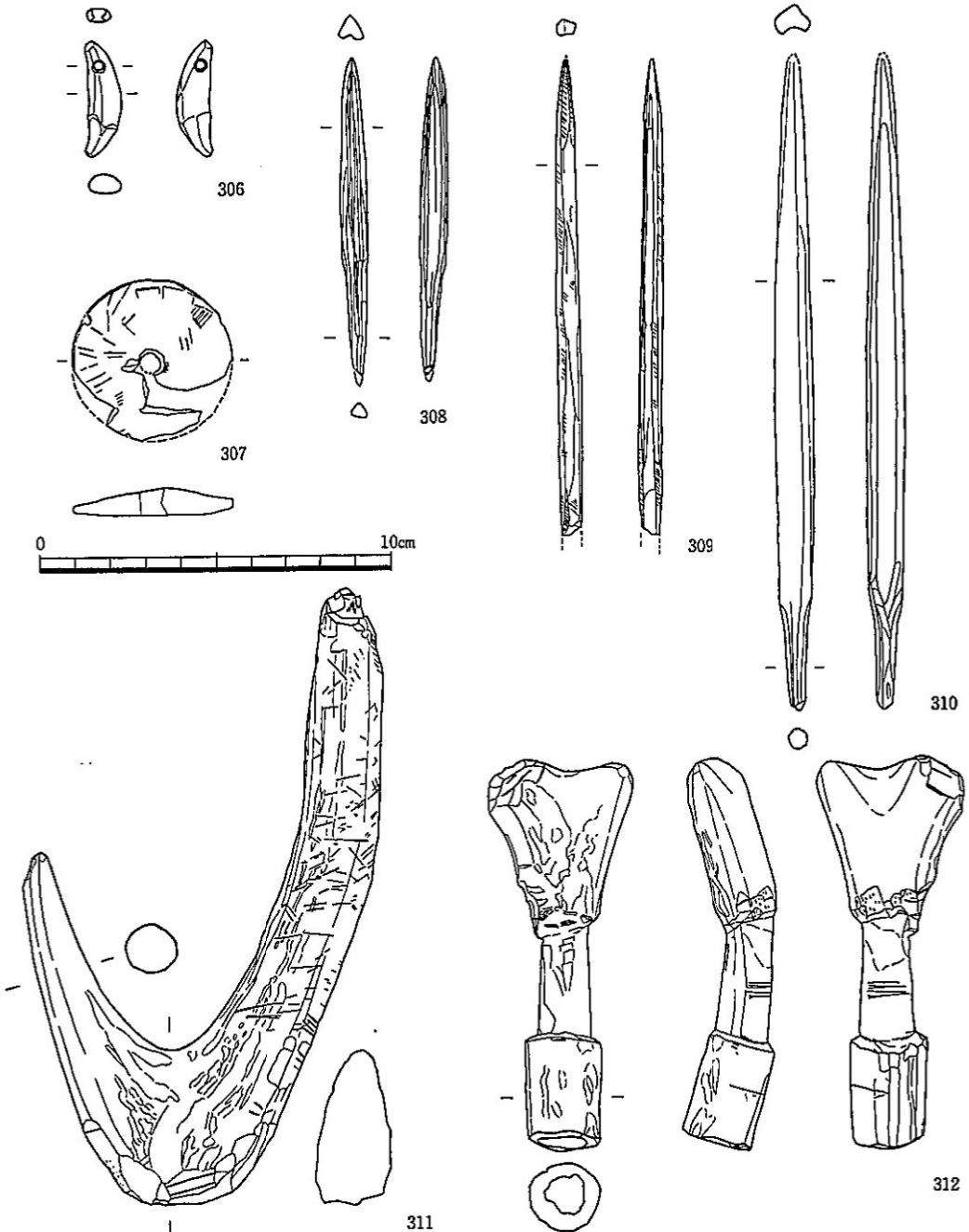


第167図 金属器実測図(実寸)

整で、調整時の擦痕がある。断面は平坦である。素材はニホンシカの中手又は中足骨。B d 20の柱穴状のピットから出土した。

(310) はヤスである。現長186mm、最大厚9mmを測る。基部の削りは顕著であるが、それ以外は摩耗のため不明である。素材はニホンシカの中足骨である。N R 3001出土。

(311) は鉤状のものである。現長179mmを測る。2尖をもつ。角幹は途中で折れている。基部



第168図 骨角器実測図 (1/2)

を部分的に削る。叉状部分は磨滅している。角幹に多くのアトランダムな擦痕がある。鹿角製。
S K 3060出土。

(312) は儀仗状のものである。長さ111mmを測る。鹿角を切り中央部を細く削り、下方のキャップ状になる部分も丸くなるように一部分削っている。上方の角幹も削り取っている。裏面の柱状部とキャップ状部分に5条と1条の線刻を施す。包含層Ⅳc～e層のいずれかから出土。(畑)

第6項 玉類 (巻頭カラー)

ガラス小玉4点と管玉4点が出土した。

ガラス小玉 左2点は水色・右2点は紺色を呈する。いずれも包含層Ⅳb層出土である。左から順に計測値を述べる。

(左) は長径3.5mm、孔径2mm弱、厚み2mmを測る。ゆがみがきつい。(中左) は直径4mm、孔径1mm、厚み3mm強を測る。(中右) は直径4mm弱、孔径1mm、厚み3mm強を測る。(右) は長径4mm、孔径1mm強、厚み3.5mmを測る。やや楕円形を呈する。

管玉 いずれも碧玉製である。(中右) は火を受け黒っぽく変色している。

(左) は長さ6mm弱、直径2mm強、孔径1.5mmを測る器壁の極く薄いものである。片側穿孔である。S X 3005出土。(中左) は長さ15.5mm、直径4mm、孔径2.5mmを測る。両側穿孔である。S D 3020出土。(中右) は長さ21mm、直径6mm弱、孔径2.5mmを測る。両側穿孔である。S K 3111出土。(右) は長さ36.5mm、長径10mm強、孔径3mmを測る楕円形を呈する。片側穿孔である。包含層Ⅳb層出土。(畑)

第7項 祭祀遺物

ト骨 (第169図) 今回の調査によって、弥生時代中期の溝・土坑から多量の土器、木器、石器、動物遺存体とともに占いに用いられたと思われるト骨を得ている。いずれも肩甲骨を利用したもので、ニホンジカ、イノシシの二者が認められる。

(313) は、BトレンチのS K 3060から出土したイノシシ右肩甲骨である。遠位端のほとんどを失なう。関節上結節は癒着しておらず、若獣の個体のものである。

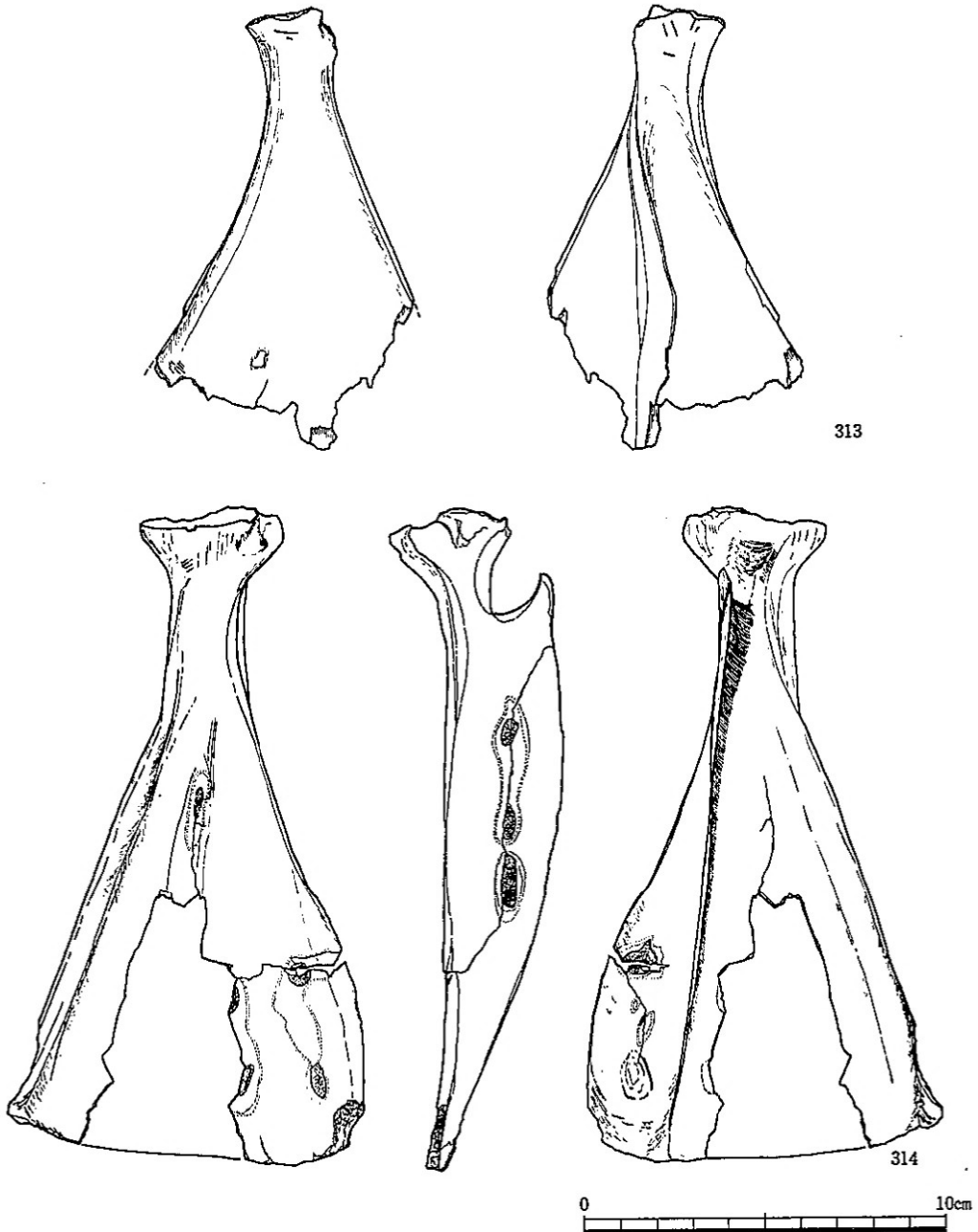
焼灼痕は肋骨面に1ヶ所観察され、その部分の骨色は黒褐色に変化していた。おそらく、肋骨面に棒状のものを使用して、点状に焼灼を加えたものと思われる。外側面には、それに対応する変化は現れていない。

(314) は、ニホンジカ右肩甲骨を利用したもので、棘下窩の一部を欠失するものの、保存状態は良好と云える。関節上結節は完全に癒着しており、成獣の個体のものである。

焼灼痕は肋骨面からみて肩甲下窩に5ヶ所、肩甲棘に3ヶ所、骨が焼けて骨色の変化した部分が観察され、外側面にも及んでいる。直に火にあたった所は黒褐色に変色し、中心から離れるに従い薄褐色、そして黄色に変化した部分が認められた。焼灼の行なわれたところの骨厚は約1.0mm前後と、最も薄い海綿質の認められないところを選定している。その焼け方から考えて、肋骨面及び肩甲棘に棒状のもので点状に焼灼を加えたものと思われる。外側面にはそれに対応する変

化がはっきり現われ、火焔が走り、骨の収縮を生じている。また、前縁の背縁よりも、二次的に火を受け黒褐色に変化した部分が観察された。なお、前縁、肩甲頸、肩甲下窩にみられる加工痕は、肩甲骨を胴骨及び上腕骨から切り離す際に付された、解体痕であろう。SK3060出土。

以上、前述した2例の他に平野川改修工事に伴う亀井遺跡の調査(KM-H1地区)からもト骨1点⁽⁹⁾が出土している。時期は弥生時代中期後半で、イノシシ右側肩甲骨(成獣)を利用したものである。本例と同じく右側肩甲骨を利用している点、興味を注ぐといえよう。詳細は本報告を



第169図 ト骨実測図 (1/2)

待って、さらに検討をすすめていきたい。

イノシシ下顎骨（図版97・98）

（図版97）は、弥生時代後期後半の溝 S D 3021 B から出土した左右下顎骨である。前臼歯は遊離しているものの、保存状態は良好といえる。犬歯は、装身具にでも利用したのであろうか抜きとられていた。左右下顎骨連合部の右下顎骨寄りにて二分され、左下顎骨を右下顎骨に重ねるようにして出土した。左右の下顎枝に径約10mmの円孔を穿っている。孔は他の例に比べて小さいのが特徴といえよう。年齢は、 M_3 が完全に萌出していることから3才ぐらいで、性別は雄である。

（図版98・上）は P_4 より前の骨体を失う右下顎骨片（♂）で、歯牙は M_2 のみ残歯。下顎枝の中央に径19.8×30.8mmの不整楕円形の孔を穿っている。孔は打ち割りのままで周縁は整えていない。脱落している M_3 は、 M_2 の萌出状況・咬耗の進展からして後葉未萌出で、前葉・中葉はおそらくわずかにエナメル質咬耗段階のものであろう。Age class 3. S K 3060 出土。

（図版98・中上）は下顎骨のほぼ中央 M_1 のところで割れ、 M_1 より前の骨体・下顎枝の後縁を失う右下顎骨である。下顎枝に穿った孔23.1mmで周縁に細部調整を施している。なお、頬側面 M_3 の下にぶい解体痕、 M_1 ・ M_2 の中央下に斜めに解体痕が加えられている。下顎枝の後縁および下顎枝の破断面に、動物による咬痕がみられる。Age class 4. S D 3021 B 出土。

（図版98・中下）はイノシシ右下顎骨で、 M_2 より前の骨体・下顎枝の大半を失う。孔は骨厚の薄いところを選んで穿っている。径約20mmで周縁には丁寧な調整を加え整えている。頬側面 M_2 下に鋭利な解体痕が観察された。歯牙 M_3 後葉の末端は歯槽中にある。咬耗は前葉・中葉のみ観察され、エナメル質咬耗のみ。Age class 4. 弥生時代後期後半の溝 S D 3021 B 出土。

（図版98・下）はほぼ完存する左右下顎骨である。犬歯をとり出すために、骨体の一部を壊している。写真に掲載している標本は、左下顎骨である。 P_1 ・ P_2 は保存状態不良のため、上部を失う。下顎枝のほぼ中央に径28×32mmの粗孔を穿っている。細部調整はおこなっていない。 M_3 は完全に萌出している。咬耗度からして Age class 4. 下顎枝の前縁・後縁には下顎骨を頭蓋骨からははずす際に付された解体痕が顕著に認められた。弥生時代後期後半の溝 S D 3021 B 出土。

以上、今回の亀井遺跡の調査からイノシシ下顎骨下顎枝に孔を穿つ資料を5例得た。これらの骨に共通している点を項目別にまとめてみたい。まず、下顎枝の中央に人為的な孔を穿っているいずれも M_3 が萌出している点であり、一定の約束事（儀式）があったことを推定させる。次に、性別の判明している個体は雄（♂）であり、特に雄が選定されたのであろうか。時期は、弥生時代前期～後期後半まで弥生時代の全期間に通じてみられる。亀井例は、中期後半から後期後半のものである。左右下顎骨がそろっている例からして、本来は左右下顎骨の両方に孔を穿っていたのであろう。

最後に、畿内弥生時代の出土例をあげてみる。まず奈良県唐古・鍵、八尾市恩智、東大阪市鬼虎川、三重県納所遺跡等がある。平野川改修工事に伴う亀井遺跡の調査からも1点出土している。詳細は本報告書に譲って、さらに検討をすすめてみたいと思う。（宮崎）

第2節 古墳時代以降の遺物

第1項 土師器 (第170図)

第Ⅰ層 (328~334)

高杯 (328) 口縁部の約 $\frac{3}{4}$ を欠くが体部と脚部は完存する。口縁部の復元径は約13.6cm、脚端部径9.2cm、器高11.0cmをそれぞれ測る。半球形の杯部は内湾する口縁部を有し、直立する端部は丸く仕上げられている。内外面ともヨコナデ調整が施されており、脚部とのつぎ目は粘土紐を貼りつけて指でナデつけている。脚部は裾がラッパ状に広がっており、端部は外面に稜を有している。外面上半部は面取りふうに縦方向のヘラナデが施されており、ところどころに爪痕が残っている。下半部はヨコナデ調整である。内面は上半部に明確なシボリメが観察され、下半はハケメ調整であるが部分的に指オサエの痕跡が残っている。口縁部と脚端部に黒斑が認められるほか、二次的に火熱を受けたものかすすけている部分がある。胎土は精良で色調は橙灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

高杯 (329) 口縁部の約 $\frac{1}{2}$ で脚裾部を欠く。口縁部径は14.8cmを測る。杯部は半球形で、やや外反する端部は丸く仕上げられている。口縁部と外面はヨコナデ調整、内面はヨコナデの上に2段の放射状文が施されている。脚部とのつぎ目には粘土紐を貼り付けて指でナデつけている。脚部は裾がラッパ状に広がる形態を有し、外面上半部は面取りふうにユビナデするがシボリ目が残っている。下半部はヨコナデ調整する。内面上半部には明確なシボリ目が観察でき、下半部は荒いハケメ調整を施す。胎土は精良で色調は外面が橙褐色、杯部内面は黒色物質が付着しており、焼成はやや軟質である。

壺 (334) 完形の中形壺で、口縁部径13.8cm、体部最大径16.6cm、器高17.9cmを測る。逆ハの字形に広がる口縁部を有し、端部は短く外反する。端部と口縁部外面はヨコナデ、体部から丸底の底部にかけての外面は丁寧な縦方向ハケメ、口縁部内面は横方向ハケメ、体部内面はヘラケズリ、底部内面はユビナデを施し、器壁は非常に薄く仕上がっている。胎土、焼成とも良好で、色調は暗褐色を呈する。

壺 (330) 口縁部の約 $\frac{1}{4}$ を欠く小形壺で、復元口縁部径8.4cm、体部最大径9.6cm、器高8.5cmを測る。逆ハの字形に広がる口縁部を有し、直立ぎみに内傾する端部は丸く仕上げられている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は上半が縦方向ハケメ、下半が横方向ハケメでそれぞれ荒いヨコナデを加え、丸底の底部外面はこまかいハケメを施す。体部から底部にかけての内面はヘラケズリを施し、器壁は非常に薄い。胎土、焼成とも良好で、色調は橙褐色を呈する。

壺 (331) 口縁部の約 $\frac{1}{2}$ を欠く小形壺で、復元口縁部径10.5cm、体部最大径10.5cm、器高9.6cmを測る。逆ハの字形に広がる口縁部を有し、端部と口縁部外面はヨコナデ、体部から丸底の底部にかけての外面は縦方向ハケメ、口縁部内面は横方向ハケメ、体部と底部内面はユビナデを施す。胎土、焼成とも良好で、色調は橙褐色を呈する。

壺 (332) 口縁部から体部にかけて約 $\frac{1}{2}$ の破片で、底部を欠く。復元口縁部径約10.0cm、体部最大径約13cmを測る。口縁部は逆ハの字形に外反するが、頸部の屈曲は強くなく丸みをおびる。口縁部及び体部上半外面は縦方向ハケメ、体部下半外面は横方向ハケメを施す。口縁部内面は横方向ハケメにヨコナデを加え、体部内面はヘラケズリを施す。胎土には細砂粒を少量含むが焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

壺 (333) 口縁部から体部にかけて約 $\frac{1}{2}$ ほどの破片である。復元口縁部径約11.5cm、体部最大径約14cmを測る。口縁部は逆ハの字形に外反するが、頸部の屈曲は強くない。口縁部及び体部外面は縦方向ハケメ、口縁部内面は横方向ハケメ、体部内面はヘラケズリを施す。胎土に長石粒を少量含むが焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。

第Ⅶ層 (315・316)

蓋 (315) いわゆる蓋A類の小破片で、復元口縁部径約22.5cm、頂部の高さ約3cmを測る。平坦な頂部とまるみを持った口縁部を有し、口縁端部は巻き込むように突出する。つまみは欠失するが、扁平な宝珠形のものが見つくと考えられる。内外面ともヨコナデののち、外面には丁寧なヘラミガキを施す。胎土は精良で焼成も良好、色調は灰褐色を呈する。

杯 (316) 杯C類の口縁部 $\frac{1}{2}$ の破片で、復元口縁部径約15.5cmを測る。器形は半球形で、口縁部はわずかに外反する。口縁端部内外面はヨコナデ、口縁部外面はヘラミガキ、底部外面はヘラケズリを施し、口縁部内面には2段の放射状文を施す。胎土は精良、焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。

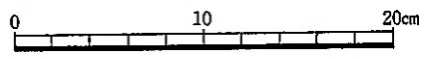
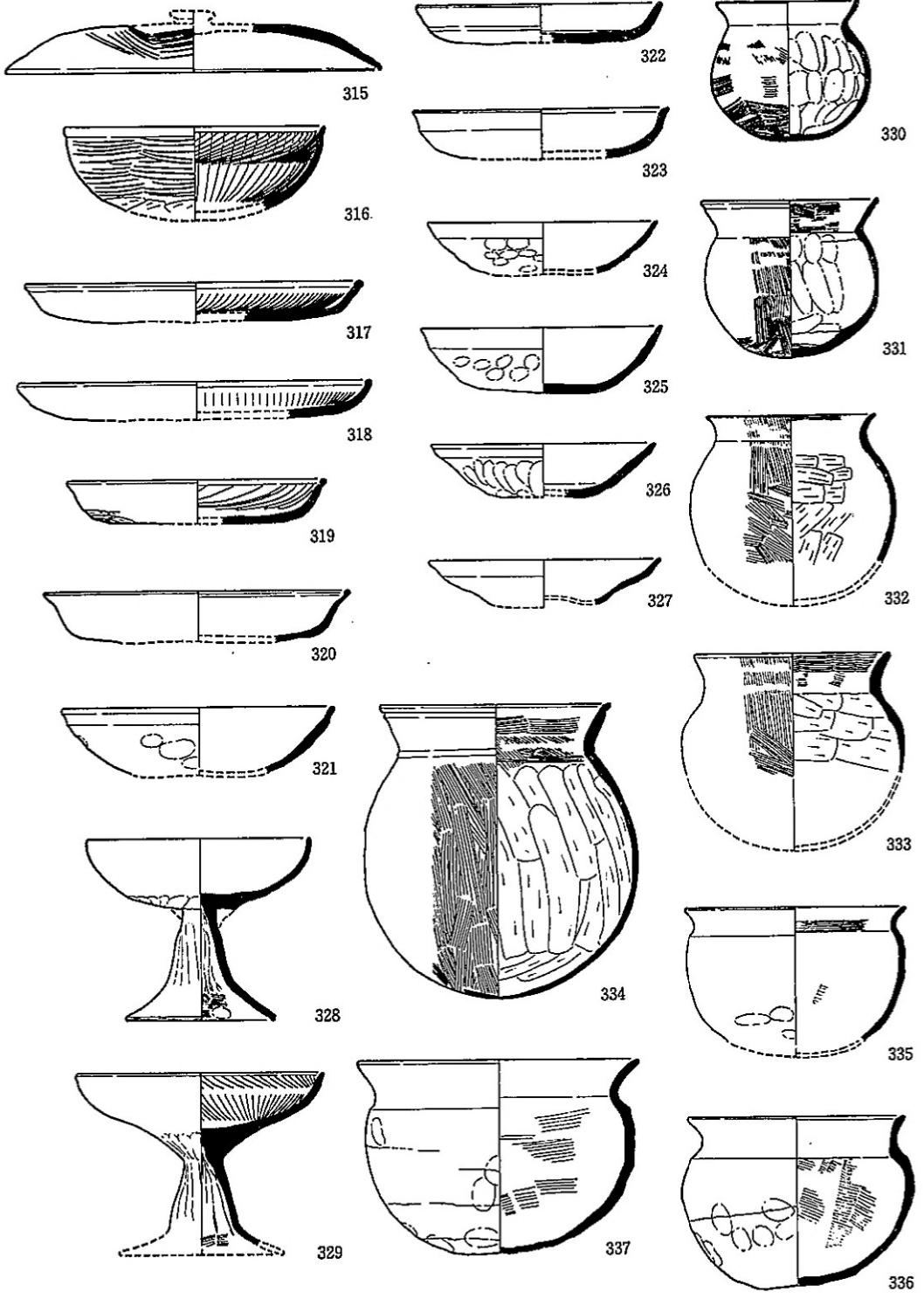
NR6001 (317~321・323・336・337)

皿 (317) 皿Aの $\frac{1}{4}$ ほどの破片で、復元口縁部径約20cm、器高約2.5cmを測る。平らな底部に外反する口縁部がつき、口縁端部はやや内側へ巻き込み、丸く仕上げられている。内外面ともヨコナデ、ナデを施し、口縁部内面には1段の放射状文を施す。胎土は精良、焼成も良好で、色調は橙褐色を呈する。

皿 (318) 皿Aの $\frac{1}{4}$ ほどの破片で復元口縁部径約21cm、器高約2.5cmを測る。平らな底部に丸みを持って外反する口縁部がつき、口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。口縁端部内外面と口縁部外面はヨコナデ、底部外面はユビオサエにナデを加える。口縁部内面はヨコナデの後、1段の放射状文を施す。胎土は精良で焼成は良好、色調は橙褐色を呈する。

皿 (319) 皿Aの $\frac{1}{4}$ ほどの破片で、復元口縁部径約15.5cm、器高2.7cmを測る。平らな底部に外反する口縁部がつき、口縁端部はわずかに外側に屈曲して内側が肥厚する。外面の口縁部と底部の境をヘラケズリするほか、内外面ともヨコナデ、ナデを施し、口縁部内面には1段の放射状文を加える。胎土は精良で焼成も良好、色調は橙褐色を呈する。

皿 (320) 皿Aの $\frac{1}{4}$ ほどの破片で、復元口縁部径約18.5cm、器高3.2cmを測る。平らな底部に外反する口縁部がつき、口縁端部は内側に巻き込むように肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はユビオサエにナデを加える。暗文は施されていない。胎土は精良、



第170图 土師器実測图 (14)

焼成も良好で、色調は橙褐色を呈する。

杯 (323) 杯Aの $\frac{1}{6}$ ほどの破片で、復元口縁部径約15.5cm、器高約3.5cmを測る。平らな底部に内湾して外反する口縁部がつく。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面はユビオサエにナデを加える。胎土は精良、焼成は良好で色調は灰褐色を呈する。

杯 (321) 杯Aの $\frac{1}{6}$ ほどの破片で、復元口縁部径約16cmを測る。底部は平らで、内湾する口縁部を持つ。口縁部内外面はヨコナデを施すが、外面には指頭痕が残っている。口縁端部は仕上げのヨコナデを加える。胎土には少量の砂粒を含むが焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。

甕 (336・337) 両者ともほぼ完形、(337)は口縁部径16.8cm、体部最大径16.3cm、器高11.7cmを、(336)は同じく12.0cm、14.1cmを測る。粘土紐巻き上げて成形し、球形の体部に外反する口縁部がつく。口縁部を強くヨコナデするため頸部と体部の境目に明瞭な段がつき、口縁端部は丸く仕上げられている。体部と底部外面はナデ調整を施すが、大ざっぱであるため粘土紐のつき目や指頭痕が観察できる。体部内面はナデを施す。胎土には少量の砂粒とクサリ礫を含み焼成は良好、色調は淡い橙褐色を呈する。

第Ⅴ層 (325)

杯 (325) C e 38区出土の杯Aの $\frac{1}{2}$ の破片で、口縁部径14.4cm、器高4.0cmを測る。底部は平らで、内湾する口縁部を持つ。口縁部内外面はヨコナデ、底部内外面はナデを施すが、口縁部外面下半と底部外面には指頭痕が残存する。胎土は精良で焼成も良好、色調は灰褐色を呈する。

S E 7001 (322・324・335)

杯 (324) 復元口縁部径約15cmを測る。平らな底部に内湾する口縁部がつく。口縁部内外面はヨコナデ、底部内外面はナデを施すが、口縁部外面下半には指頭痕が残る。胎土は精良、焼成も良好で、色調は灰褐色を呈する。

皿 (322) 口縁部径14.7cm、器高2.4cmを測る。平らな底部に外反する口縁部がつく。口縁部内外面をヨコナデし、外面の底部との境目に明瞭な段を有する。底部外面はナデ、底部内面はナデマワシを施す。胎土には少量のクサリ礫を含むが精良で焼成も良好、色調は橙褐色を呈する。

甕 (335) 口縁部径13.2cm、体部最大径13.6cmを測る。やや扁平な球形の体部に外反する口縁部がつく。頸部のくびれは曲線的で、口縁部内外面を強くヨコナデするため口縁部と体部の境目に明瞭な段がつく。体部外面はナデを施すが指頭痕が残存する。体部内面はハケメにナデを加える。頸部内面には横方向ハケメが残っている。

S D 8003 (326)

杯 (326) 復元口縁部径約13.5cm、器高3.3cmを測る。中央がやや持ち上がる底部に外反して内湾する口縁部がつく。口縁上半部外面と口縁部内面はヨコナデし、さらに端部には仕上げナデを加える。口縁下半部から底部外面はユビオサエ、底部内面はナデを施す。胎土には砂粒を多く含むが焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

S D 8006 (327)

皿(327) 外反し、屈曲して内湾する口縁部を有するといわゆるヘソ皿で、復元口縁部径約7cmを測る。口縁上半部外面と口縁部内面はヨコナデ、口縁下半部外面はユビオサエを施す。胎土に細砂粒を含むが焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

小結 当遺跡では古墳時代以降、近世に至るまで遺構の検出される密度が非常に希薄になり、遺物の出土量もわずかとなる。ここでは各土師器の編年的位置をおさえておきたい。

Ⅷ層から比較的まとまって出土した(328)～(334)は、船橋遺跡の0-Ⅲないし0-Ⅳ出土の土師器⁽¹⁰⁾と平行する時期のものである。(316)は飛鳥Ⅱ⁽¹¹⁾の時期のもので(315)もそれほど隔たらない時期のものと考えられる。NR6001出土の土師器のうち図示したものは平城宮ⅢからⅣの各時期のものを含んでおり、SE7001出土の土師器は平城宮ⅤないしⅥ⁽¹²⁾の時期のものである。SE7001がNR6001のオーバフローと考えられるⅤ層を掘り込んでいることと考え合わせて、NR6001の最終埋没年代を8世紀末から9世紀初頭におくことができる。中世の溝から出土した土器は細片が多く、図示したもの以外に良好な資料がないが、ヘソ皿の形態から年代の一点を15世紀前半に求めることができる。

第2項 須恵器(第171図)

NR4001(342・344・347・349)

取手付椀(342) 体部から底部にかけての破片で、復元底部径5.2cm、同じく体部最大径8.7cmを測る。全体を水ビキ成形の後、体部外面上半には2条の沈線を施す。下半はヘラケズリにナデを加え、4本1単位の波状文1条を巡らす。底部外面は回転ヘラケズリを施す。底部近くに取手の痕跡が残る。体部及び底部内面はヨコナデ調整する。色調は青灰色を呈し、焼成は非常に良好である。

高杯(344) 脚部の破片で、復元脚部径は10.4cmを測る。全体を水ビキ成形し脚端部近くとスカシの下端近くに断面三角形のシャープな凸帯をひき出す。スカシは長方形で3方向にあけられていたものと考えられる。内面上部にはシボリ目が観察できる。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。

壺(347) 口頸部を欠くが体部は完存する小形の短頸壺である。体部は丸く、径は中ほどより少し上が最大となり、14.6cmを測る。体部中ほどに2条の沈線を巡らし、その間に5本1単位の波状文を1条施す。その下には幅1.4cmほどの回転カキメ調整を施す。底部は丸底で平行タタキの痕跡が残る。色調は灰青色で焼成は良好である。

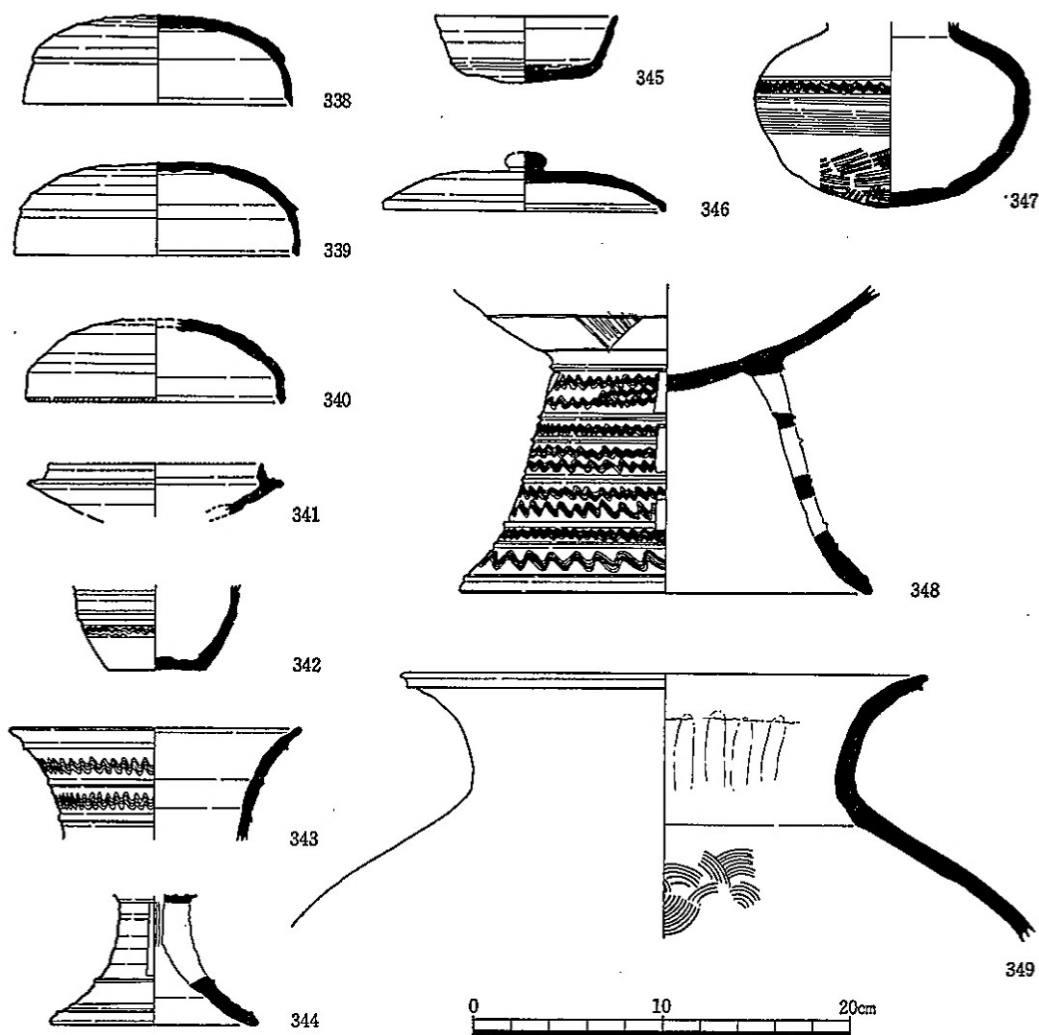
甕(349) 口縁部から胴部上半にかけての破片で、復元口縁部径27.6cmを測る。口頸部は体部から丸みを帯びたコの字状に外反し、口縁端部は丸く仕上げられる。また、口縁部外面には1条の凸線が巡る。口頸部及び体部内外面は不整方向の丁寧なナデ調整を施すが、体部内面には一部同心円当板痕跡がうっすらと残る。色調は暗紫褐色を呈し、焼成は非常に良好である。

SD4002(343・348)

壺(343) 口頸部のみほぼ完存し、口縁部径15.3cmを測る。口頸部は逆ハ字形に強く外反し、

口縁端部は丸く仕上げられている。全体を水ビキ成形しており、外面に3条の凸線を巡らす、それらは、上下の凹線によりひとときわ明瞭になっている。各凸線の間には4本1単位の波状文が2条巡る。色調は灰青色を呈し、焼成はきわめて良好である。

器台 (348) 台部下半から脚部にかけての小破片で実測図の数値は正確ではない。半球形の台部から脚部はゆるやかに外反し、脚端部は丸く仕上げられている。台部外面下半部には2条の沈線を巡らし、その間に沈刻された鋸歯文を施す。脚部には上下の凹線によってきわたされた7条の凸線が巡り、各凸線の間には7本1単位の波状文を施す。各文様帯の波状文の数は上から2〜3条、1条、2条、2条、1条、1条という構成になっている。また、脚部には4ないし5方向と推定される3段のスカシがあげられている。2方向のみがかりうじて観察できるが、ひとつは長方形のスカシが上下に直線的に配されており、他のひとつは最上部の逆三角形のスカシが一部残っているのみであるが、これも上下に直線的に配されていたものと推定される。色調は自然



第171図 須恵器実測図 (34)

釉をかぶって黒灰色の光沢をもち、焼成はきわめて良好である。

SD4001 (338・339)

杯蓋(338) はほぼ完形で、口縁部径14.2cm、器高4.7cmを測る。天井部と口縁部を画する稜は丸く、やや外反する口縁部を有し、口縁端部には内傾する段を有する。ミズヒキ成形の後、天井部外面のほぼ3/4にヘラケズリを施す。天井部内面中央には同心円当板痕跡が残る。色調は灰青色で焼成は良好である。

杯蓋(339) はほぼ完形で、口縁部径15.0cm、器高4.9cmを測る。天井部と口縁部を画する稜は鋭さを欠き、直立する口縁部を有し、口縁端部には内傾する明瞭な段を有する。水ヒキ成形の後、天井部外面の約3/4にヘラケズリを施す。色調は灰青色で焼成は良好である。

第Ⅵ層 (340・341)

杯蓋(340) 約3/4が残存しており、口縁部の復元径13.4cm、器高は約4.4cmを測る。天井部は丸みを有し、口縁部は内側へなだらかに屈曲する。口縁端部は丸く仕上げられている。水ヒキ成形の後、天井部外面の約3/4に回転ヘラケズリ調整を施す。また口縁端部外面には荒いヤスリ目のような痕跡を有する。色調は灰色で焼成は良好である。

杯(341) 口縁部3/4が残存しており、底部を欠く。口縁部の復元径は11.3cmである。比較的幅の広い受部を有し、立上りは短く内傾するが端部はわずかに外反し、丸く仕上げられている。色調は灰青色で、焼成は良好である。

第Ⅶ層上面 (345)

杯(345) 約3/4が残存しており、口縁部の復元径は9.6cmである。口縁部は逆ハの字形に外反し、端部は丸く仕上げられている。底部は回転ヘラ切り未調整で、不安定な平底を呈する。色調は灰色で焼成は良好である。

SX3006 (346)

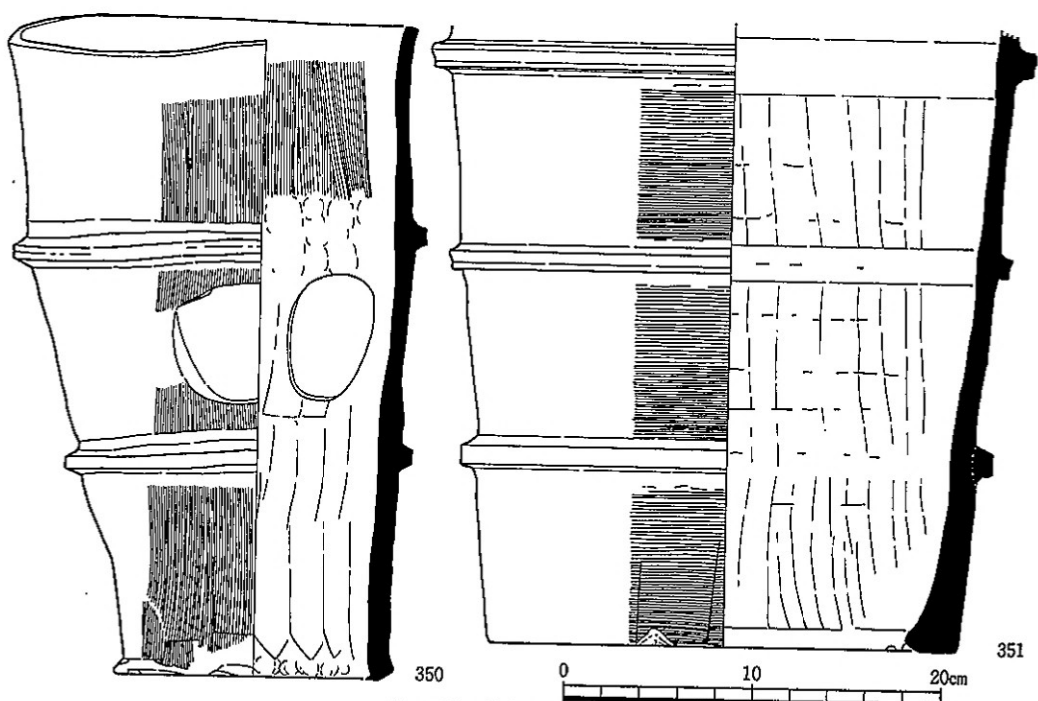
杯蓋(346) 約3/4が残存する。口縁部の復元径は約15cmである。天井部は丸みをもち、中央に扁平な擬宝珠様つまみを付す。口縁部は内側へ短く屈曲させる。天井部外面の大半に回転ヘラケズリ調整を施す。内面はヨコナデ調整である。色調は灰白色で焼成は良好である。

小結 弥生時代の遺物に比して須恵器は出土量が非常に少なく、明確な遺構に伴ったものもないが、陶色の編年にしたがって編年の位置づけを行う。⁽¹³⁾

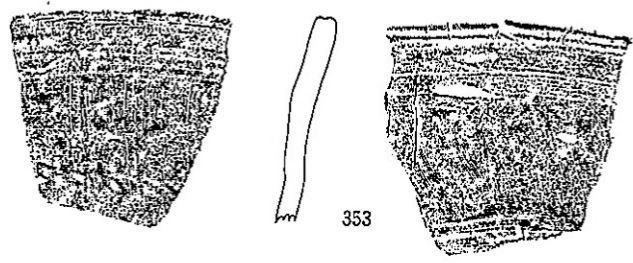
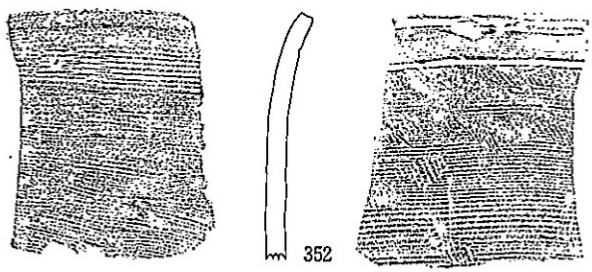
(342・344・349)はⅠ型式1段階に属する。(343・348)は器台に鋸歯文が見られる点古い要素を残すが、同じく器台の脚部のスカシが直線的に配されている点からⅠ型式2段階に属するものと考えられる。(347)はⅠ型式4ないし5段階に属する。(338・339)はⅡ型式1段階に、(340・341)はⅡ型式5段階に属する。(345)はⅢ型式2段階に、(346)はⅣ型式1段階に属する。(広瀬)

第3項 埴輪

今回の調査で出土した埴輪は30点余りにすぎず、大半がⅥ層中及びNR4001から出土したものの



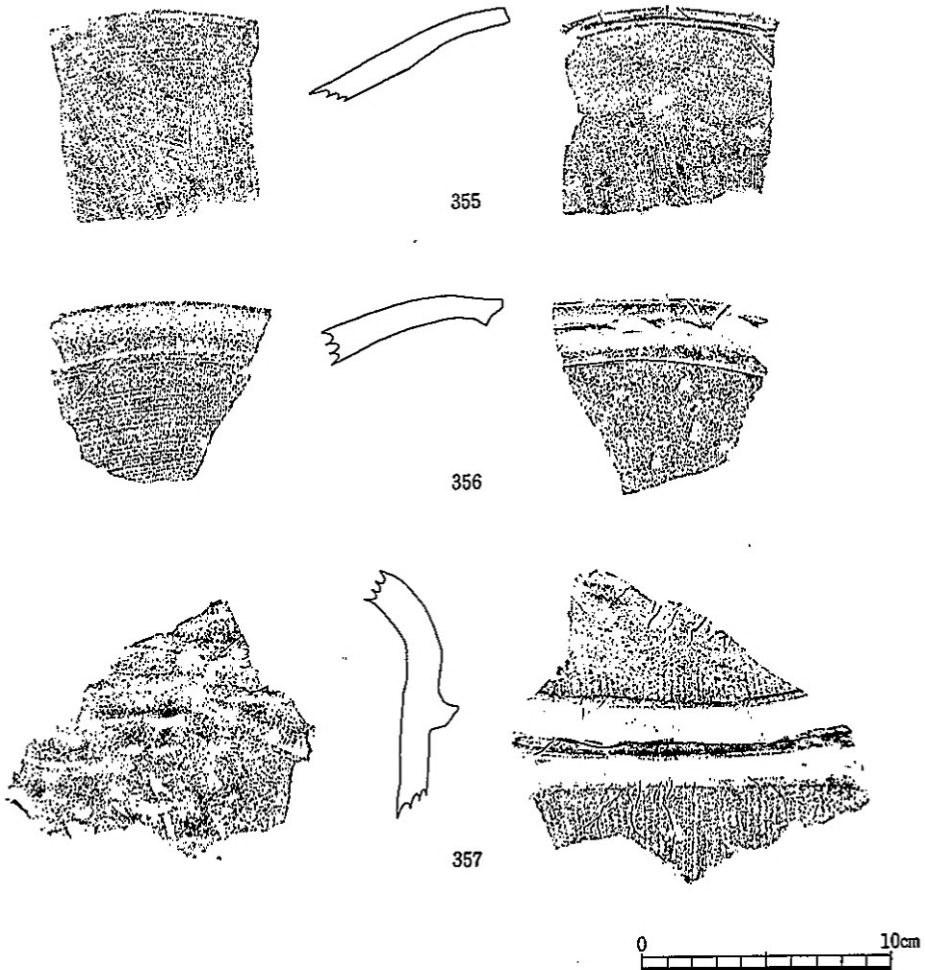
第172图 埴輪実測图 (1/4)



第173图 埴輪実測图 (1/4)

である。家形埴輪の棟木部分1点以外は、全て円筒埴輪で、なかに若干の朝顔形円筒埴輪片がみられる。(351)に黒斑が認められるほかは、全て無黒斑と考えられる。

(350~354)は普通円筒埴輪である。(350)はg14区のNR9002肩部付近出土。ほぼ完形であるが、全体にひずみが著しい。高さ34.4cm~32.8cm、口縁部径21.5cm、基部径14.0cmを測る。3段に作られ、第2段に一对の円形透孔があるが、正しく左右対称の位置にはない。外面調整はタテハケ1次調整である。内面も凸帯部及び基部のユビオサエあるいはユビナデに先行して、タテハケ調整が行われているが、第1段・第2段のものはケズリに近い。また、口縁部の内外面はヨコナデ調整が施されている。なお、第3段外面には赤色顔料が塗布されている。(351)はⅣ層出土。基部から3段までの破片である。現存高32.4cm、基部復元径24.6cmを測る。外面調整は停止する連続ヨコハケであるが、第2段・第3段では停止痕がほとんど確認できない。内面調整は、凸帯部及び基部がヨコナデ調整、他はユビナデ調整である。第2段と第3段のユビナデは連続している。外面に縦に長い黒斑が認められる。(352)はⅣ層出土。(353・354)はNR4001出土で



第174図 埴輪実測図 (1/4)

ある。いずれも口縁部の小片であるが、(352・353)の口縁端部がわずかに凹み気味であるのに対し、(353)の口縁端部は丸く終っている。また、(352)の口縁端部直下には凹線1条が認められる。外面調整は、(352)がタテハケ後にヨコハケ2次調整、(353・354)はタテハケ1次調整である。内面調整は、(352)がヨコハケ調整、(353)がタテハケ調整、(354)がナナメハケ調整と、それぞれ異なっている。また、3片とも口縁端部の内外面にはヨコナデ調整が施されている。

(355～357)は朝顔形円筒埴輪である。いずれもNR4001出土。(356・357)は同一個体である。(355)は口縁端面がわずかに凹み気味となり、内外面ともにタテハケ調整されており、口縁端部はヨコナデ調整である。(356)は口縁端部外面に断面三角形の1条の凸帯がめぐり、その直下が弱い段となっている。外面は縦方向にヘラケズリされており、内面はヨコハケ調整である。口縁端部の内外面にはヨコナデ調整が施されている。(357)は肩部の破片である。外面調整はタテハケ1次調整であるが、ハケメはケズリに近い。内面はナデ調整であるが、成形時の輪積み痕が顕著に認められる。(高島)

第3節 自然遺物

第1項 動物遺存体について

1. はじめに

今回の調査で出土した動物遺存体について、保存処理と同時に同定を試みたのでここに報告する。動物遺存体は、弥生時代前期から後期に堆積した包含層および同時期に形成された溝などの遺構から出土している。出土した動物遺存体の保存状況はかなり良好であったが、水分で保護された形で出土する 경우가多く、良好な保存状況でもかなり脆弱な状態である。

2. 動物遺存体の保存処理法

出土した動物遺存体は水分に保護された状態で、水分が蒸発すれば遺物内部からの水分の拡散と同時に水の表面張力によって遺物を崩壊するため、同定も不可能になる。そのため、次のような保存処理を行なった。

水分の拡散と蒸発が進行しないように防止すること、及び変形させないでアルコールに置き換える。アルコール置換は20%、40%、60%、80%、100%と漸次濃度をあげて脱水を完了させる。その後、アクリル系樹脂（商品名：パラロイドB72、溶媒：アセトン）溶液を含浸、または塗布することにより強化した。この保存処理法は確立されたものではなく、合成樹脂の今後の開発と共に、遺物に適した樹脂が開発された場合にはそれに代えられるように考慮した方法である。

3. 動物遺存体の同定結果

今回の同定は、出土した動物遺存体全部について行なったものではなく、同定に耐えうる状態のものだけ行なった。同定したものは、哺乳類・3種、鳥類、魚類、貝類であり、保存処理を行なったものについての同定であるため、種類は比較的少ない。なお、この他に人骨も同定している。同定結果については遺構別、出土地点別に表1にまとめた。

同定結果、全体の約半分をイノシシの骨格がしめていた。その中でほぼ完全な形で出土したイノシシの頭蓋骨を土ごと取りあげたものについて保存処理を行ない、現生イノシシ（1981年冬、丹波篠山で捕獲された約1.5～2.5才）との比較（同定）を行なった。（図版101・102）

保存処理を行なったイノシシの頭蓋骨は、土圧によってかなり変形した状態が観察できる。なお、イノシシの骨で注目すべきものとしては下顎骨があげられる。その下顎骨の下顎枝に孔を穿つ5個体が検出され、イノシシ下顎骨祭祀として注目される。このような下顎骨祭祀の出土例としては、奈良県唐古、⁽¹⁴⁾ 鍵遺跡で13個体の下顎骨を木棒に垂下した状態で検出されている。また、⁽¹⁵⁾ 東大阪市鬼鹿川遺跡でも検出されている。これらは、弥生時代の狩猟面に対する風習を知る上で貴重な資料であると考えられる。また、イノシシの下顎骨を見るかぎり、乳歯の残存している個体が多く、M₃が萌出している個体は少ないようである。

次に、同定をした中で多いのがシカの骨格であり、シカの中手骨あるいは中足骨の完形のものは見られず、骨端が残っているのみで、ヤス状骨器の原料として利用されたものと考えられる。

第2表 動物遺存体の同定結果一覧

遺構番号	出土地点	時期	同定	結果
S K 3024	B d-16 包含層Ⅷf 上面	弥生中期 Ⅱ～Ⅲ様式	イノシシ歯牙 2個	
S K 3058	B e-13 包含層Ⅷf 上面	弥生後期	イヌ臼歯 1個	
S K 3060	B e-12 包含層Ⅷf 上面 中層	弥生中期 Ⅱ～Ⅲ様式	イノシシ下顎骨 (M ¹ のみ萌出) 1個 イノシシ上顎骨 (M ¹ 萌出、P ³ P ⁴ 未萌出) イノシシ頭蓋骨 1個 イヌ右下顎骨 (小型犬) 1個、イヌの長管骨 1個 イノシシ肩甲骨 1個、イヌ左上顎骨 (P ³ が萌出途次の若獣) 1個 イノシシ下顎骨の連結部 1個	
S K 3066	B f-12 包含層Ⅷf 上面	弥生中期	魚類の骨 1個	
S K 3072	B e-10 包含層Ⅷf 上面	弥生中期	ニホンジカ 中足骨又は中手骨の近位端でヤス状骨器の加工残がい	1個
S K 3082	B e-09 灰層	弥生中期 Ⅱ～Ⅲ様式	イノシシ上顎骨 (M ³ のみ残存) 1個 イノシシ右下顎骨 (M ¹ 萌出) 1個、イヌ肩甲骨 1個	
S K 3090	B f-08	弥生中期	イノシシ歯牙 (M ³) 1個	
S K 3143	C f-39	弥生中期 (Ⅲ様式古段階)	イノシシ尺骨 1個、イノシシ頭蓋骨 1個 イノシシ左下顎骨 (M ³ 未萌出)	
S E 3011	B e-14 包含層Ⅷf 上面 下層暗灰色粘土	弥生中期 (Ⅰ～Ⅱ様式)	イノシシ切歯 1個、イノシシ寛骨 1個、イノシシ上腕骨 1個 イノシシ左下顎骨 (M ³ 未萌出) 幼獣のイノシシ左上腕骨近位端、1個 (解体痕あり)、右寛骨の腸骨 1個 頸椎 2個、下顎骨 (M ¹ 萌出途次) 1個	
S D 3074	C e-38 (東矢板きわ約1m分)	弥生中期 Ⅱ～Ⅳ様式	ニホンジカ成獣落角 (火をうけ炭化した部分あり、未加工)	1個
S D 3008	B e-24 下層灰褐色粘土	弥生後期	ニホンジカ又はイノシシの骨? ヒト大腿骨? 1個、イノシシ右下顎骨 (M ³ 未萌出) 1個 ニホンジカ 右下顎骨 1個	
S D 3009	B e-23 包含層Ⅷf 上面	弥生中期 Ⅱ様式	イノシシ下顎骨 (M ³ 未萌出) 1個、不明 1個	
S D 3010	B d-23 灰色細砂	弥生後期 Ⅱ様式	ニホンジカ 脛骨 1個 (遠位端) ニホンジカ (落角で切斷痕あり) 1個	
S D 3012	B e-19 包含層Ⅷf 上面	弥生中期 Ⅱ様式	ニホンジカ上腕骨 1個、イノシシ歯牙 1個、イノシシ胸椎 1個、ニホンジカ脛骨 1個、イノシシ頸椎 1個、イノシシ左頭蓋骨 (生後6ヶ月未満)	
S D 3055	B e-15 eラインアゼ 包含層Ⅷe 上面	弥生後期 Ⅱ様式	鹿角 2個、イヌ右下顎骨 (歯牙なし) 1個、イノシシ寛骨 1個	
	B f-10 包含層Ⅷc 上面 暗青灰色シルト	弥生後期	鳥類の骨 1個	

S D 3067	Be-10 包含層Ⅷc上面 土器溜9	弥生後期	イノシシ下顎骨 (M ₃ 未萌出、火をうけている) 1個 ニホンジカカ頤骨 1個、鹿角 1個、ニホンジカ橈骨 1個 ニホンジカ頭蓋付鹿角 1個、イノシシ距骨 1個
S D 3074	Be-9 包含層Ⅷc上面 土器溜	弥生後期	イノシシ頭蓋骨 (M ₃ 既萌出、咬群初段階) 1個 ニホンジカ上腕骨遠位端 1個、鹿角未製品 1個 ニホンジカ大腿骨 1個、イヌ腰椎 1個
S D 3079	Ce-38	弥生前期	イノシシ距骨 1個、イノシシ頭蓋骨 (M ₃ 未萌出約1.5~2.5才) 1個
S D 3104	Cf-35 包含層Ⅷc上面 細レキ混り黒地色粘土	弥生後期	ニホンジカ環椎 1個
N R 3001	Cトレンチ42ライインf断面 青灰色シルト層	弥生後期	ニホンジカ肩甲骨 (頸部に骨増殖の異常認めらる) 1個
	Bd-8 包含層Ⅷf上面 P4		ニホンジカ又はイノシシ脛骨? 1個
	Be・f-8 包含層Ⅷf上面		ニホンジカ右下顎骨先端部 1個
	Bf-16 fラインアゼ 包含層Ⅷf		ニホンジカ中手骨 1個
	Be・f-10 包含層Ⅷf上面		鹿角製品 1個、イノシシ頭蓋骨片 1個
	Be-11 包含層Ⅷc (包含層Ⅷc上面S D 3069混る)		鹿角 (切断痕あり) 1個、イノシシ頤骨 1個
	Bd-18 包含層Ⅷf		ニホンジカ肩甲骨 1個、イノシシ基節骨 1個
	Bd-9 包含層Ⅷf上面 P8		貝類 2個
	Bd-10~11 包含層Ⅷe		イヌ下顎骨 1個、鹿角 1個、ニホンジカ中手骨 1個 ニホンジカ橈骨 1個
	Be-18 包含層Ⅷe		イノシシ寛骨片 1個
	Bd-9 包含層Ⅷf上面		ニホンジカ左下顎骨 1個
S D 3074	Cf-38 (合流点付近)		鹿角未製品 1個
	Bd-15 包含層Ⅷf		鹿角 (切断痕あり) 1個
N R 3001	Ce-42 最下層		イノシシ頭蓋骨片 1個

鹿角製品がよく見られることも特徴である。特にSK3144の遺構より土器と共に検出された頭蓋骨付角は無造作に投げ込まれたようである。ほぼ完全な形で検出され慎重に取りあげられていたので、保存処理を行ない復元した。(図版95)

イノシシとシカに続いて多く見られたのはイヌの骨である。イヌの骨では加工されたもの、あるいは打ちこわされたことが明らかなものは見られなかった。

亀井遺跡では中小型犬の中で小型の犬が多く出土しているようである。平野川改修工事で出土したイヌの全身の骨格、オス・メス両個体の出土は、弥生時代の犬の骨格形態を知るうえで貴重な資料といえる。また、埋葬ではなく、農耕、狩猟儀礼にともなう犠牲獣として供献されたものである。この犠牲獣の例としては、奈良県大福遺跡⁽¹⁶⁾の弥生時代後期長頸壺の中から四肢骨等主要な骨のみが見つかり、二次埋葬と考えられることから、弥生時代のイヌに対する精神面を示す資料と言える。また、イノシシとシカの骨を見るかぎり、骨端部等に傷のつけられた骨がかなり多く見られる。おそらく、肉を骨からほとんど完全にはずしてしまうような解体方法がとられたように思われる。

最後に同定に際してご教示して下さいった当センター技師宮崎泰史氏に対して感謝申し上げる。(山口)

第2項 植物遺存体について

1. はじめに

今回の調査で出土した植物遺存体(種子)について同定を試みたのでここに報告する。

植物遺存体は、弥生中期から後期に堆積した包含層および同時期に形成された溝などの遺構から出土している。また、奈良時代のしがらみから出土した多量の種子のうち、慎重に取り上げられたものについてのみ同定した。この同定は一部にすぎず、全体を把握できるものではなく、今後本報告において全貌を明らかにしたい。

2. 同定結果

同定結果は遺構別、出土地点別にまとめ、表3に掲げた。今回の調査で出土した種子は、つぎの2類41科12属58種である。

菌類 Fungi

蘚類 Musci

裸子植物

イチイ科 Taxaceae

イヌガヤ科 Cephalotaxaceae

マツ科 Pinaceae

カヤ *Jorrea nucifera*

イヌガヤ *Cephalotaxus karringtonia*

モミ *Abies firma*

ツガ *Jsuga sieboldii*

被子植物(単子葉植物)

ミクリ科 Sparganiaceae

ミクリ? *Sparganium ramosum*

- | | |
|---------------------------------------|--|
| イバラモ科 <i>Najadaceae</i> | オオミクリ? <i>Sparganium macrocarpum</i> |
| イネ科 <i>Gramineae</i> | イバラモ属 <i>Najas sp.</i> |
| カヤツリグサ科 <i>Cyperaceae</i> | イネ (炭化米) <i>Oryza sativa</i> |
| | ミズガヤツリ <i>Cyperus serotinus</i> |
| | ホタルイ属 <i>Scirpus sp.</i> |
| | スゲ属 <i>Carex sp.</i> A種、B種 |
| ツユクサ科 <i>Commelinaceae</i> | イボクサ <i>Aneilema keisak</i> |
| 被子植物 (双子葉植物) | |
| I. 離弁花類 | |
| クルミ科 <i>Juglandaceae</i> | オニグルミ <i>Juglans ailanthifolia</i> |
| カバノキ科 <i>Betulaceae</i> | イヌシデ <i>Carpinus tschonskii</i> |
| | アカシデ <i>Carpinus laxiflora</i> |
| | アサダ <i>Ostrya japonica</i> |
| ブナ科 <i>Fagaceae</i> | アカガシ? <i>Quercus (Cyclobalanopsis) acuta</i> |
| | イチイガシ <i>Quercus (Cyclobalanopsis) gilva</i> |
| | コナラ亜属 <i>Quercus (Lepidobalanus) sp.</i> |
| | ナラガシワ <i>Quercus (Lepidobalanus) aliena</i> |
| | コナラ <i>Quercus (Lepidobalanus) serrata</i> |
| | <i>Quercus sp.</i> |
| | クリ <i>Castanea crenata</i> |
| | ツブラジイ <i>Castanopsis cuspidata</i> |
| ニレ科 <i>Ulmaceae</i> | ケヤキ <i>Zelkova serrata</i> |
| | エノキ <i>Celtis sinensis</i> |
| クワ科 <i>Moraceae</i> | クワ <i>Morus bombycis</i> |
| | カジノキ <i>Broussonetia papyrifera</i> |
| | カナムグラ <i>Humulees japonicus</i> |
| タデ科 <i>Polygonaceae</i> | ミゾソバ <i>Polygonum thunbergii</i> |
| | サナエタデ <i>Polygonum scabram</i> |
| | タデ属 <i>Polygonum spp.</i> A種、B種 |
| ヒユ科 <i>Amaranthaceae</i> | ヒユ属 <i>Amaranthus sp.</i> |
| ナデシコ科 <i>Caryophyllaceae</i> の一種 2pp. | |
| キンボウゲ科 <i>Ranunculaceae</i> | キンボウゲ属 <i>Ranunculus sp.</i> |
| ツツラフジ科 <i>Menispermaceae</i> | コウモリカズラ <i>Menispermum dauricum</i> |
| クスノキ科 <i>Lauraceae</i> | クスノキ <i>Cinnamomum camphora</i> |

モウセンゴケ科 Droseraceae	ムジナモ? <i>Aldrovanda vesiculosa</i>
ユキノシタ科 Saxifragaceae	ウノハナ <i>Deutzia sp.</i>
バラ科 Rosaceae	キイチゴ属 <i>Rubus sp.</i>
	キンミズヒキ <i>Agrimonia pilosa</i>
	バラ属 <i>Rose sp.</i>
	モモ <i>Prunus persica</i>
	ウメ <i>Prunus mume</i>
マメ科 Leguminosae	クサネム <i>Aeschynomene indica</i>
	フジ <i>Wisteria sp.</i>
カタバミ科 Oxalidaceae	カタバミ <i>Oxalis corniculata</i>
トウダイグサ科 Euphorbiaceae	ヒメミカンソウ <i>Phyllanthus ussuriensis</i>
	アカメガシワ <i>Mallotus japonicus</i>
	シラキ <i>Sapium japonicum</i>
モチノキ科 Aquifoliaceae	ナナミノキ <i>Ilex chinensis</i>
トチノキ科 Hippocastanaceae	トチノキ <i>Aesculus turbinata</i>
ムクロジ科 Sapindaceae	ムクロジ <i>Sapindus mukrossii</i>
ツリフネソウ科 Balsaminaceae	ツリフネソウ <i>Impatiens textorii</i>
ブドウ科 Vitaceae	ウドカズラ <i>Ampelopsis leoides</i>
ツバキ科 Theaceae	サザンカ <i>Camelia sasanqua</i>
	ヤブツバキ <i>Camelia japonica</i>
	ヒサカキ <i>Eurya japonica</i>
アカバナ科 Onagraceae	ヒシ <i>Jropa japonica var. rubeola</i>
ウコギ科 Araliaceae	ウド <i>Aralia cordata</i>
セリ科 Umbelliferae	セリ <i>Oenanthe javanica</i>
ミズキ科 Cornaceae	クワノミズキ <i>Cornus brachypoda</i>
	ヤマボウシ <i>Cornus kousa</i>

II. 合弁花類

エゴノキ科 Styrcaceae	エゴノキ <i>Styrax japonica</i>
シン科 Labiatae	ヒメジソ属 <i>Mosla sp.</i>
ナス科 Solanaceae	ナスビ <i>Solanum melongena</i>
	ナス属 <i>Solanum sp.</i>
ウリ科 Cucurbitaceae	マクワウリの仲間 <i>Cucumis melo</i> .
	ヒョウタンの仲間 <i>Lagenaria sp.</i>
	カラスウリ属 <i>Trichosanthes sp.</i>

キク科 Compositae

オナモミ *Xanthium strumarium*タカサブロウ *Eclipta prostrata*

この中で木本(Arbor)は、カヤ、イヌガヤ、モミ、ツガ、オニグルミ、イヌシデ、アカシデ、アサダ、アカガシ、イチイガシ、アカガシ亜属、ナラガシワ、コナラ、ナラ属、クリ、ツブラジイ、ケヤキ、エノキ、クワ、カジノキ、クスノキ、ウノハナ、キイチゴ属、バラ属、モモ、ウメ、フジ、アカメガシワ、シラキ、ナナミノキ、ムクロジ、ウドカズラ、サザンカ、ヤブツバキ、ヒサカキ、クマノミズキ、ヤマボウシ、エゴノキで、そのほか菌、蘚類をのぞく全部が草本(Herb)である。

この木本の中で食用になる植物(Edible plant)は、カヤ、イヌガヤ、オニグルミ、アカガシ、イチイガシ、アカガシ亜属、ナラガシワ、コナラ、ナラ属、クリ、ツブラジイ、エノキ、クワ、カジノキ、キイチゴ属、モモ、ウメ、トチノキ、ヤマボウシであり、草本の中ではイネ、ヒユ属、ヒシ、オニビシ、ウド、セリ、ヒメジソ属、ナスビ、マクワウリの仲間、ヒョウタンの仲間、ウリ科の一種である。

栽培植物(Cultivated plant)は、イネ、モモ、ウメ、ナスビ、マクワウリの仲間、ヒョウタンの仲間、ウリ科の一種であり、栽培あるいは保護していた可能性があるのは、クワ？カジノキ？オニグルミである。

次に人里植物(Ruderal)は、ミゾソバ、サナエタデ、ヒユ属、ナデシコ科の一種、クサネム、カタバミ、ヒメミカンソウ、オナモミ、タカサブロウ、カナムグラである。水生植物(Water plant)及び好湿性植物はミクリ、イバラモ属、イネ、ミズガヤツリ、ホタルイ属、スゲ属、イボクサ、ミゾソバ、サナエタデ、ムジナモ⁽¹⁷⁾、ヒシ、オニビシ、セリである。なお、分類に関しては、大井次三郎著の「日本植物誌」を参考にした。

3. まとめ

今回の調査で検出された種子から古環境を概観すると、弥生時代中期から後期においては栽培植物が多く、農耕を営んでいたことがうかがえる。特に、弥生時代のモモの核と現生の核とを比較すると、栽培が盛んになるにつれて丸く肉厚の核が、長細く肉薄の核になる傾向を示すように思われる。

時代は飛ぶが、奈良時代のしがらみに堆積された種子のうち水生植物から推定すると、この付近に沼などの湿地が存在していたと思われる。また、その他の種子より、暖地性の常緑樹や落葉樹が生茂る森が近くに存在していたと思われる。それに、森の存在を確かに行っている種子としては、現在山奥にしか見られないコウモリカズラ、ウドカズラなどがあげられる。これらの植物より推定される気温は、現在と大きく異なることはないようである。また、人里植物の種子の存在は、近くに住居址や田畑が存在しているであろうことを物語っている。

以上、種子の同定に関して終始ご教示下さった 大阪市立大学 粉川昭平教授に感謝の意を表す。(山口)

第3表 植物遺存体同定結果一覧

遺構番号	出土地点	時期	植物遺存体	同定結果
S K 3060	B e-12 包含層Ⅷf上面	弥生中期 (Ⅲ~Ⅳ)	ヒョウタン21個、炭化米 1個 Quercus sp. イチイガシ (木炭化した完全な子葉) 1個	
S E 3022	B d-05 地山面	弥生中期	ヒョウタン140個、ミズガヤツリ 1個、 マクワツリの仲間 4個	
S D 3008	B e-24 灰色細砂	弥生後期	Quercus sp. 堅果 1個 (先端部欠失)、モモ (核) 1個	
S D 3008	B e-24 灰褐色粘土	弥生後期	オニビン (4角半分かけている) 1個、Quercus sp. 堅果 1個 アラカシ?	
S D 3011	B e-22 包含層Ⅷf上面	弥生中期	ヒョウタン 292個、マクワツリの仲間 多数、タカサブロウ 多数	
S D 3049	B d-09	弥生中期 (古段階)	マクワツリの仲間 47個	
S D 3067	B e・f-10 暗青灰色シルト	弥生後期	炭化米 30個、草木の種? 1個、その他骨あり	
S D 3067	B d-10 包含層Ⅷe上面	弥生後期	モモ (核、全面に焦げて、不規則に割れている) 1個	
S D 3077 and S D 3078	C f 36~37	弥生中期	モモ (核、上部半分が欠失)	
S D 3104	C f-35 包含層Ⅷc上面 黒灰色粘土	弥生後期	モモ (核、底部がほぼ欠失)	
S X 6006	C f-16 しがらみ北東部 堆積部	奈良	ヒシ (2角、1つの角は丸くなり奇形) 1個、ヤブツバキ (果実の破片、未熟で不規則に 横断されている) 3個、オナモミ 1個、マクワツリの仲間 1個、エゴノキ (半分のもの) 1個、カラスウリ属 1個、トチノキ (種皮の破片) 1個、コナラ? (大型の穀斗) 1個 イチイガシ? (穀斗6個、種皮片4個、幼果7個)、ツアラジイ? (種皮半分のもの) 1個 クマノミズキ (半分のもの) 1個、アカメガシワ 1個、コウモリカズラ 1個、 Quercus sp. 2個、ウドカズラ 1個、菌類 1塊、カナムグサ (半分のもの) 2個、モ ミの葉 2片、ナナミノノキ 1個、炭化米 1個	
	C f-16	奈良	トチノキ (完熟果皮片) 1個、バラ属 (刺) 5個、クマノミズキ (半分のもの) 1個	

第3項 亀井遺跡出土土器及び木器に塗布された赤色顔料の蛍光X線分析

1. はじめに

亀井遺跡から出土した土器及び木器のうち、弥生時代中期末から後期前半にかけての土器及び木器に塗布された赤色顔料について、蛍光X線分析法で調査したのでここに報告する。

2. 測定方法

今回の測定方法は、蛍光X線分析の非破壊的方法による。蛍光X線分析とは、X線管から発した1次X線を試料にあて、これによって2次的に発生した蛍光X線（特性X線）を分光し、その波長と強度から含有元素の定性と定量を行なう分析法である。

3. 測定条件

理学電機製蛍光X線分析装置（大型試料台付、奈良国立文化財研究所 所有設備）、X線管：クロム対陰極、加圧電圧—電流；40KV—20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーションカウンター、走査範囲(2 θ)；20~65°

赤色顔料の主成分である元素の判定に使用したスペクトル線の強度は、記号表示を用いて7段階で示した。

4. 測定結果

試料は、弥生時代中期末から後期前半の土器片8個と木器2個である。赤色顔料が塗布された面は土器の場合、壺の胴部、頸部、口縁部及び高杯の脚に塗布されている。木器は用途不明であるが、ひとつは、大阪府瓜生堂遺跡、長原遺跡、東京良遺跡、恩智遺跡、岡山県上東遺跡等で出土している彩色有孔板と思われるもの、もうひとつは、棒状の木製品である。蛍光X線分析で行なった測定結果は第4表にまとめた。

第4表は、赤色顔料に由来する鉄と水銀のスペクトル強度の差異と有無を表わしたものである。鉄の測定においては胎土部分にも含有するため、塗布されている面と塗布されていない面との比較によって慎重に検討した。その結果、土器に塗布されていた赤色顔料はベンガラ（酸化鉄： Fe_2O_3 ）系顔料である。木製品の場合、まず彩色有孔板の赤色顔料は、少量のベンガラ（酸化鉄： Fe_2O_3 ）系顔料の混ざっている水銀朱（HgS）系顔料であった。なお、同じような赤色顔料は、岡山県上東遺跡⁽¹⁸⁾より出土した短甲残欠状木製品（弥生時代後期前半）からも発見されている。

また、用途不明の棒状木製品はかなり顔料が剝離してわずかしが残っていないため、スペクトル強度は弱い、ベンガラ系顔料であると判定した。

ここで興味深いことは、土器に赤色顔料を塗布する場合、塗布する部分が限定されるのではないかという点、器種が壺と高杯に限られている点、木製品に顔料を塗布する場合にも、用途によってベンガラと水銀朱を混ぜ合わせて使用している点などである。

このことから、出土した顔料付着の土器及び木器は、弥生時代中期末から後期前半にかけての赤色顔料の使用法（技法）を把握するひとつの貴重な試料であると考えられる。今回の調査では

単に定性的に調査したものであり、今後 X線回折法によりベンガラ (Fe₂O₃) と水銀朱 (HgS) の存在を確認し、定量的な分析法で十分に検討していきたい。

最後に分析に際して種々のご教示をいただいた奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室の沢田正昭室長、秋山隆保研究員、成瀬正和氏に深く感謝の意を表わす次第である。(山口)

第4表 亀井遺跡出土赤色顔料蛍光X線分析結果

No.	遺構番号	出土地点	器種	元素判定に使用した スペクトル線					検出元素
				Fek α	Fek β	HgL α	HgL β	HgL γ	
1	B D 3010	B e-22~23 暗灰色粘土	弥生第V様式 壺胴部片	+++++	++	-	-	-	鉄(Fe)
2	B D 3010	B e-22~23 下層暗灰色粘土	弥生第V様式 壺胴部片	++	+	-	-	-	鉄(Fe)
3	B D 3010	B e-22~23 下層暗灰色粘土	弥生第V様式片	+++	+	-	-	-	鉄(Fe)
4		B d-18~19 包含層Ⅷ e 上面	弥生第V様式 高杯脚片	++++	+	-	-	-	鉄(Fe)
5		B e-16~17 fラインサブトレ 包含層Ⅷ e とⅧ f	弥生第Ⅳ様式 高杯脚片	++	+	-	-	-	鉄(Fe)
6		B e-16 包含層Ⅷ e	弥生第Ⅳ様式 高杯脚片	+++	+	-	-	-	鉄(Fe)
7		B f-09 包含層Ⅷ e	弥生第V様式 壺口縁部片①	+++++	++	-	-	-	鉄(Fe)
8		B f-09 包含層Ⅷ e	弥生第V様式 壺口縁部片②	+++++	++	-	-	-	鉄(Fe)
9	S D 3012	B d-20 包含層Ⅷ f 上面	用途不明木製品 (彩色有孔板) 弥生中期	+	±	+++++	+++++	++	鉄(Fe) 水銀(Hg)
10	S D 3010	B d-23 下層暗灰色粘土	用途不明木製品 弥生後期	+	±	-	-	-	鉄(Fe)

注) 元素判定に使用したスペクトル線の強さの表示方法について

+++++ 非常に強い +++++ 強い
+++ ふつう ++ 弱い
+ 非常に弱い ± 痕跡
- 認められない

という表示のし方で示している。

〔註〕

- (1) 中村 浩 1978 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書 第30輯
大阪府教育委員会
- (2) 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2
- (3) 井藤暁子 1982 「弥生土器一近畿2-」『考古学ジャーナル』202
- (4) 石鍬の分類については、佐原真氏の分類に従った。
佐原 真 1964 「第四章—石器・土器・骨角貝製品・鉄製品」『紫雲出』詫間町文化財保護協会
- (5) 西村尋文 1982 「亀井遺跡における剝片生産技術」『寝屋川南部流域 下水道 事業長吉ポンプ場築
造工事に伴う亀井遺跡発掘調査報告書Ⅱ』大阪文化財センター
- (6) 長原・瓜生堂、恩智などに報告例がある。
- (7) 奈良国立文化財研究所 1978 「平城宮発掘調査報告Ⅸ」学報第34冊
- (8) 亀井1号犬（中型犬）と比較してそれよりも大きく、咬耗の進展が著しく、弥生時代の犬にあって
は、大きく老獣であったろう。
- (9) 宮崎泰史「亀井遺跡出土のト骨について」『亀井遺跡』1982年 大阪文化財センター
- (10) 田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真 1962 「船橋Ⅰ・Ⅱ」平安学園考古学クラブ
- (11) 西弘 海 1978 「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥藤原宮跡発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研
究所
- (12) 小笠原好彦・西弘海 1978 「平城宮Ⅰ～Ⅶの大別」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研
究所
- (13) (1)と同じ。
- (14) 奈良県立橿原考古学研究所編；1978 「唐吉、鏡遺跡」
- (15) 樽野博幸 1980 「自然遺物」『鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会
- (16) 樽野博幸 1978 「大福遺跡出土の獣骨について」『大福遺跡』奈良県史跡名勝 天然記念物調査報
告第36)
- (17) 大井次三郎 1978 「日本植物誌頭花編」至文堂
- (18) 安田博幸・青園泰子・則近薫 1977 「岡山県倉敷市上東遺跡出土遺物に塗布された赤色顔料物質の
化学分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』p.170

第6章 まとめ

今回の調査が、『亀井・城山』として報告した調査の結果と、それによって提出された問題点を踏まえて、実施されたことは言うまでもない。しかし、今回の調査によって検出された遺構・遺物は多岐にわたっており、新たに生じた問題点も数多くある。このため、それらの全てに解答を用意し、検討を加えることは、遺物整理の終了していない現段階では、困難である。

ここでは、「弥生時代集落の変遷と全容の解明」という調査の開始にあたって設定した課題の一つを踏まえ、弥生時代集落の変遷と周辺部の様相についての若干の素描を行い、さらに、今後に残された課題を述べて、まとめに換えたいと思う。

第1節 弥生時代集落の変遷と周辺部の様相

今回の調査は、南北400m以上に及ぶものであったが、そのなかで弥生時代遺跡のあり方は、遺物包含層の状況や、遺構の分布密度・存在形態等から、大きく3つの区域に分けて理解できるものであった。

即ち、第1の区域として把握できるのは、Bトレンチ19ライン付近からCトレンチ30ライン付近にかけての、分厚い遺物包含層が存在し、井戸・土坑・ピット等が稠密に分布する範囲であり、第2の区域とは、第1の区域の縁辺に位置し、幅1.5~2.0m、あるいはそれ以上の規模を有する大溝が幾条も存在する所である。さらに、Cトレンチ30ライン付近からDトレンチ全域にかけての、遺物包含層も薄く、遺構の分布密度も全体に低下する区域を、第3の区域と考えることができる。

このうち、第1の区域については、分布する遺構の種類、多種・多様で豊富な遺物の出土、分厚い遺物包含層の存在等から、集落域と考えて大過ないものと思われる。また、第2の区域に存在する大溝群については、これらの大溝群の外側で、井戸・土坑・ピット等の集落の存在の推定できる性格の遺構が、極端に少なくなるという事実から、集落域を画する機能をもつものと推定できる。一方、第3の区域については、土坑・溝が散発的に存在するCトレンチ12ライン付近までの範囲と、溝が優先するという12ライン付近より南側の範囲の、2つの区域に細分可能であるが、いずれにしても、集落域外に拡がる周辺部として理解してよいと考えられる。

以上のような遺物包含層の状況・遺構の分布密度・存在形態等からの、遺跡地の区域分けは、先に『亀井・城山』として報告した長吉ポンプ場関連の調査区においても認められたところである。そこでは、調査区のほぼ東半部を集落域と、西半部を周辺部と位置づけることが可能であった。さらに、集落域を画する機能をもつ溝としては、S D3013・3014・3031等を挙げるができる。

次に、今回の調査区域で、集落域と推定できた区域の遺構群・遺物包含層のあり方は、前期・

中期及び後期前半・後期後半の各時期によって、一定のまとまりを持っていることが、看取できる。このことと、長吉ポンプ場関連の調査区で検出された集落跡が、中期から後期前半までの時期に限られることからすると、亀井遺跡の弥生時代集落は、時期によってその位置が移動している可能性が指摘できる。後期の集落が、西方へ移動していた可能性については、『亀井・城山』でも指摘されているところであり、以下においては、集落位置の変化を中心に、弥生時代集落の変遷について述べてみたい。

前期の集落域と推定できるのは、その時期の土坑・ピット・土器群等が検出されたCトレンチ30ライン付近から38ライン付近にかけての範囲である。この時期の遺構は、S D3079・3080の北側では小溝1条と土坑2個が検出されたにすぎず、Bトレンチでは遺物包含層も存在しない。また、Cトレンチ30ライン付近から南側では、後期の自然流路NR3003による削平を受けているものの、後述する後背湿地部分と考えられる12ライン付近以南の区域まで、NR3003の中洲状部分においても、この時期の遺構は検出されていない。前期の遺構・遺物は、長吉ポンプ場関連の調査区や平野川改修関連の調査区においてもほとんど検出されておらず、現在までのところ、Cトレンチの極めて狭い範囲だけが集落域と推定できるにすぎない。

このため、集落域の全体像を想定することは困難であるが、Cトレンチ30ライン付近から38ライン付近にかけての区域の西半部、S D3104の西側では遺構・遺物の検出が非常に少ないことから、今回の検出区域が前期集落の西端部であった可能性が考えられる。集落域は今回の調査区の東側あるいは東南側へ広がっているものと推定しておきたい。

中期になると集落は前期集落の北側へ移動する。中期から後期前半にかけての集落跡を推定させる遺構群は、Bトレンチ19ライン付近からCトレンチ38ライン付近までの範囲と、長吉ポンプ場関連の調査区東半部にわたって広く分布している。井戸・ピット・土坑等の遺構は、多くの切合い関係をもっており、分厚い遺物包含層の存在、複数の遺構面の存在等からも、活発な集落活動が連綿と続けられたものと考えられる。この時期の集落は、現在までのところ、東西250m以上、南北150m以上の拡がりをもつものと推定できる。

集落域の周縁には、集落域を面する大溝が掘られている。それらの溝としては、Aトレンチ全域からBトレンチ19ライン付近にかけてのS D3001～3012、CトレンチのS D3073・3074・3076・3077・3081、長吉ポンプ場関連の調査区のS D3013・3014・3031等々を挙げることができる。これらの大溝は、前述の3つの場所によって、所属時期・検出条数等に顕著な相違があり、このため、環濠であるか否かも含めて集落周縁での具体的様相については明らかにできていない。ただし、集落北縁にあたるBトレンチ19ライン付近から北側の大溝が、南縁の大溝に比べて、中期後半から後期前半にかけての時期には、条数において著しく多かったことは、明らかであるといえよう。

この時期の遺構が極めて稠密な分布をしていることは前述したとおりであり、大溝群も含め集落内の各遺構の所属時期を詳細に検討することによって、この時期の集落のより細かな動態を復

原することが可能であると考えられるが、現在までのところ、そこまでの分析は行っていない。なお、中期後半になると、集落の東側部分、平野川改修関連の調査区や長吉ポンプ場関連の調査区では、方形周溝墓や木棺墓が出現しており、この時期以降、集落の一部が墓域化したものと考えられる。

後期の後半になると、集落は再度、西方へ移動している。後期後半の遺構群・遺物包含層は、Bトレンチに限って検出されており、長吉ポンプ場関連の調査区やCトレンチでは、後期前半までの集落の一部を押し流す形で、大規模な自然流路NR3001が流れるようになる。また、Cトレンチの中央部でも、自然流路NR3003が出現する。この時期の前半に属する大溝群は、長吉ポンプ場関連の調査区の西半部に認められるが、これらは、それ以前の大溝群と異なり、集落域を画するといったあり方を示していない。後期後半の集落の縁辺にも、集落域を画する大溝が存在したか否かは、現在までのところ確認されていない。

後期後半の段階での集落位置の移動は、NR3001の流入によるところが大きいと考えられるが、それが急激に起ったものか、徐々に進行したものかは明らかでない。また、後期後半の集落が、どのような拡がりをもつものかも推定し難い状況にある。しかし、現在の平野川付近が南限にあたること、長吉ポンプ場関連の調査区までは拡がっていないことは明らかである。

亀井遺跡の弥生時代集落の位置の変化は、大要、以上のように理解される。前期及び後期後半の集落域の範囲を推定できていない現状では、集落位置の移動にともなって、集落規模の拡大や縮小がどの程度起ったかは明らかにできない。また、集落の移動というようなことが、急激に行なわれたものか、徐々に行なわれたものかも明らかでない。しかし、亀井遺跡の弥生時代集落が、前期から後期後半にいたるまで、集落の位置を変えながらも連続と営まれ続けたこと、また、集落の変遷に、前期末あるいは中期初頭と、後期中頃の2つの画期があったこと等は、認めうところであろう。さらには、集落移動の要因の一つに、古平野川・古東除川の2つの自然流路の動きがあったことも、後期後半におけるNR3001の集落内への流入といった事実によって、容易に理解できるところであるし、集落の立地は、いずれの場合にも古平野川の形成した埋没自然堤防上であったと考えられる。

集落周辺部が、土坑等の散在する集落域により近い区域と、溝が優先する集落域からより離れた区域の、2つに分けられることは、前述したとおりである。前者の区域には、Cトレンチ30ライン付近から12ライン付近までと、長吉ポンプ場関連の調査区の西半部があり、後者の区域としては、Cトレンチ12ライン付近からDトレンチ全域にかけての範囲を挙げることができる。

前者の区域では、中期に属する土坑や溝が散在するが、それらの遺構の性格は必ずしも明らかでない。しかし、これらの遺構の個々の様相は、集落域内の同種の遺構と大きく異なるものではなく、この区域は、集落に近接した場所として、集落活動の一環のなかでも利用されたものと考えられる。後期も後半になると、長吉ポンプ場関連のこの区域では、幾条もの大溝が掘られ、Cトレンチでは、大規模な自然流路NR3003が流れるようになる。後期後半になると、この区域に

は、人間の生活の痕跡が少なくなることは、『亀井・城山』でも指摘されているところである。

後者の区域は、第3章でも述べたように、後背湿地と推定できるところである。この区域は、全域がN R 9002による削平を受けているため、断定し難いところもあるが、検出された遺構の時期は、前期から中期中頃までに限られている。その時期以降の様相は、前述のように、全域がN R 9002の削平を受けているため明らかでない。しかし、Dトレンチにおいて、小規模ではあるが後期の土器群が検出されていることからすれば、中期後半以降にて、この区域への人為的な働きかけは、何等かの形で行なわれたものと推定される。

前期から中期中頃までの遺構は、その多くが溝であった。いくつかの溝には、水の流れた痕跡が明瞭に認められている。一般に、集落周辺に広がる後背湿地は、水田として利用されたと考えられているが、今回の調査では、明らかな水田跡は検出できなかった。ただし、中期前半の溜り状遺構S X 3010に、細い杭が無数に打ち込まれていた事実は、今回の調査区の西方に水田跡の存在する可能性をも考えさせるものがあり注意しておきたい。

以上のような集落周辺部の様相は、集落周辺に広がる後背湿地の土地利用のあり方として、十分に検討する必要があることと思われるが、検出された溝の性格等にかかわるその具体像の復原は、今後の課題とせざるを得ない。

第2節 今後の課題

今回の調査では、弥生時代前期及び後期後半の集落の確認、中期から後期前半までの集落の拡がりの確認と、集落域を画する大溝群の検出、さらには、貨泉、小形倣製鏡、銅鐸片、銅鏃等の青銅器類を含む多量の遺物の出土等々、弥生時代に限っても、いくつかの成果を挙げることができたと思う。また、古墳時代以降についても、江戸時代までの各時期の遺跡の拡がりが確認されている。その結果、亀井遺跡の内容が、より一層豊かなものとなったことは確かであろう。

しかし、その反面において、解決しえなかった問題点、新たに生じてきた問題点も多数あることは、前節でも折に触れ、述べてきたとおりである。

弥生時代についてみれば、1つには前期及び後期後半の集落の範囲が確認できていないことがある。前期及び後期後半の集落の存在は、今回の調査で確認できたが、その範囲を推定するにはいたっていない。このため、集落の変遷についても、その位置の変化については見通しをたてることが可能となったが、集落の消長の問題には立ち入れない状況にある。

第2には、中期から後期前半までの集落についても、その細かな消長や、集落形態の具体像まで復原するにはいたっていないということである。この問題の解決のためには、出土遺物の詳細な検討と、それに基づく、大溝群を含む集落内の遺構の時期の検討、分析が不可欠であることは、前節でも述べたところである。また、各時期毎の生活面の確認や、住居形態の復原のためには、より一層精密な調査が必要となってくるものと思われる。

第3には、集落の生産基盤であった水田跡の確認と、墓域の確認ができていないことがある。

中期後半の時期に、遺跡の東側で方形周溝墓の築かれていることが確認されているが、各時期の集落に伴う水田域・墓域については、ほとんど明らかになっていない。水田域については、前節で述べた後背湿地区域の遺構の性格論にも関わってくる可能性があるが、いずれにしても、水田域・墓域の問題が、弥生時代集落の展開を考えるうえで、避けることのできないものであることは、言うまでもないであろう。

古墳時代以降の各時期については、今回の調査でも、流路・畦畔状遺構・井戸・しがらみ等の弥生時代集落の廃絶後、遺跡地が耕地化してゆく過程や、耕地化した様相を示す遺構が検出されている。古墳時代以降の集落位置の確認という課題は、そのまま残されることとなった。しかし、この問題は、加美遺跡・久宝寺遺跡・城山遺跡等の、近接する諸遺跡の調査の進展によって明らかにされる可能性をもっているものと思われる。

最後に、亀井遺跡全体の範囲について述べておきたい。今回の調査は、北から順にA、B、C、Dの4本のトレンチを設定して実施したものであるが、Aトレンチの北端は、弥生時代中期の大溝SD3001Aの途中で終わっており、Dトレンチの南端も、同時期の溝SD3101が南西に走り去っている。このため、亀井遺跡の範囲が、今回の調査区域よりも、さらに南と北に広がっていることは明らかである。遺跡の範囲を明らかにしてゆくことは、隣接する諸遺跡との関係を考えてゆくうえにも重要なことと思われる。今後の調査によって、亀井遺跡の範囲が明らかにされることが期待される。

亀井遺跡が、河内平野の一角を占める弥生時代の大集落遺跡であることは、調査の進展に伴って徐々に明らかにされてきている。しかし、その構造、集落活動の具体的姿相等を呈示するにはいたっていない。今回の調査によるものを含めて、亀井遺跡の調査で出土した遺物は、コンテナ5000箱以上にもなっている。それらの遺物の整理・検討・分析と、それに基づいての遺構群の分析・検討とが、亀井遺跡における弥生時代遺跡の構造解明のために、不可欠であることは、繰り返して述べてきたところである。古墳時代以降の遺跡の構造解明のためにも、同様の作業が必要であることは、言うまでもない。今後に残された課題は多いのであり、また、上述の作業の進展によって、さらに新たな課題が設定されてくるものと思われる。それらの課題の1つ1つに取り組んでゆくことが、調査者の責務であることを銘記して終りとしたい。(高島)

〔参考文献〕

- 寺川史郎・尾谷雅彦編「亀井・城山」(財)大阪文化財センター、1980
 中西靖人・宮崎泰史・西村尋文編「亀井遺跡」(財)大阪文化財センター 1982

